

靈界物語 第六二卷 山河草木 丑の巻

出口王仁三郎

）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

（例）【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號（丸にホチ）は「」に置き換えた。その他、文字コード（ユニコード）に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第六十二卷』愛善世界社

2008（平成20）年02月03日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載して

ある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。  
図表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜変更した。  
編纂・データ作成：飯塚弘明(オニド主宰)

2009年12月20日修正

）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）

## 目次

序歌じよか  
総説そうせつ

第一篇

言海靈山  
げんかいれいざん

第一章

神威  
しんゐ  
〔一五七六〕

第二章

神柱  
しんちゆう  
〔一五七七〕

第三章

神力  
しんりき  
〔一五七八〕

第四章

神慈  
しんじ  
〔一五七九〕

第五章

神世  
しんせい  
〔一五八〇〕

第二篇

桶伏の山  
をけふせ  
の  
やま

第六章

神榮  
しんゑい  
〔一五八一〕

第七章

神降  
しんかう  
〔一五八二〕

第八章

神生  
しんせい  
〔一五八三〕

第九章

神子  
しんし  
〔一五八四〕

第一〇章 神宮〔一五八五〕

第三篇 四尾の嶺

第一章 神勳〔一五八六〕

第二章 神教〔一五八七〕

第三章 神祈〔一五八八〕

第四章 神幸〔一五八九〕

第五章 神情〔一五九〇〕

第四篇 彌仙の峰

第一章 神息〔一五九一〕

第七章 神心〔一五九二〕

第一八章	神園 <small>しんえん</small>	〔一五九三〕
第一九章	神水 <small>しんすい</small>	〔一五九四〕
第二〇章	神香 <small>しんかう</small>	〔一五九五〕
第五篇	金龍世界 <small>きんりうせかい</small>	

第二一章	神悟 <small>しんご</small>	〔一五九六〕
第二二章	神樹 <small>しんじゆ</small>	〔一五九七〕
第二三章	神導 <small>しんだう</small>	〔一五九八〕
第二四章	神瑞 <small>しんずゐ</small>	〔一五九九〕
第二五章	神雲 <small>しんうん</small>	〔一六〇〇〕

第六篇  
聖地せいちの花はな

第二六章	神丘 <small>しんきう</small>	〔一六〇一〕
第二七章	神習 <small>しんしふ</small>	〔一六〇二〕
第二八章	神瀧 <small>しんろつ</small>	〔一六〇三〕
第二九章	神洲 <small>しんしう</small>	〔一六〇四〕
第三〇章	神座 <small>しんざ</small>	〔一六〇五〕
第三一章	神閣 <small>しんかく</small>	〔一六〇六〕
第三二章	神殿 <small>しんでん</small>	〔一六〇七〕

序歌 じよか

一、高砂（謠曲） たかさご

磯輪垣の、秀妻の國に打ち寄する、浪は靜かに泰平の、鼓を打ち、御代も治ま  
る天津風、いそ「ふく神」の寶舟、榮えの神に相生の、松のみどりのうるはしけ  
れ。かくも尊き神國に、住める御民ぞ豊かなる、いづの恵ぞありがたき いづの  
恵ぞありがたき。

二、玉の井（謠曲） たま

盡せぬ生命の眞清水は、いや永久に湧き出にけり。神の恵を汲みて知る、心の  
底の曇りなき、月の桂の澄み渡る、瑞の光に照されて、連理の枝の影きよく、あ  
した夕べに溢れ出づる。玉の井の深き契ぞたのもしき 深き契ぞたのもしき。

三、老松（謠曲）

綾あやの高たか天原あまはらに、その名なも清きよく老松おいまつの、みどりの色いろの、あでやかさ、汚けがれは露つゆ白梅しらうめ  
の、花はなの香かの、千代ちよにかをりて、行末ゆくすゑ永と久はに神垣みかきもり守もり、榮さかえの園そのに樂たのもしく、夜よを  
守まもるこそ目出めで度たけれ。五み六ろ七くの御代みよを知食しるしめす皇大神すめおほかみは、爰ここも同おなじ名なの、天津御空あまつみそら  
の高たか天原あまはらに、樂たのしく榮さかえて紅くれなゐの、花はなも常磐とぎはの松まつも諸共もろともに、萬代よろづよの春はるとかや、千代ちよ  
萬代よろづよの春はるとかや。

大正十二年五月十六日

君きみが代よは 千代ちよに坐ましませ

八千代やちよに 坐ましませ

さざれ石いしの 巖いはほとなりて

苔こけの生むすまで おはしませ

總説そうせつ

歌の枕うたまくらに

一

夕暮ゆふぐれの空そらを照てらして望もちの夜よの  
月つきは出いでたり東あづまの空そらに。

二

天土あめつちの火か水の恵めぐみを世よの人ひとに  
知しらさむための瑞みづの言こと靈たま。

三

スメールの山やまの尾をの上へに鳴渡なきわたる  
こゑも悲かなしきあはれ時鳥ときどり。

四

あななひ  
三五の月の光の影さして  
いくことたま  
生言靈は照り出でにけり。

五

みちとせ  
三千年の神の忍びをかしこみて  
うた  
稱への歌は鳴り出でにけり。

大正十二年五月十五日

第一篇

言海靈山  
げんかいれいざん

第一章

神威〔一五七六〕  
しんゐ

第二五二

一

刈菰の亂れはてたる吾胸も  
かりこも みだ わがむね  
神の言葉にをさまりにけり。  
かみ ことば

二

皇神すめかみの嚴いづの御聲みこゑは大瀧おほたきの  
響ひびくが如ごとく聞きこえ來くるなり。

三

晝夜ひるよるの別わかちも知しらに皇神すめかみの  
御稜威みいづを歌うたふ身みこそ安やすけれ。

四

安やすらけく御前みまへに申まをす太祝辭のりごとは  
神かみにささぐる貢物みつぎものなり。

五

永久とこしへに榮さかえを給たまふ瑞御魂みづみたまを  
四方よもの國くに人待まちあぐみ居をり。

六

大前おほまへに仕つかへまつりて吾罪わがつみを  
夜晝よるひるなしに清きよめこそすれ。

七

身みの幸さちを神かみの御前みまへに祈いのりつつ  
今日けふも暮くれけり明日あすも暮くれゆく。

八

御試みたましに遭あひて打うち勝かつ信徒まめひとと  
ならしめたまへ神かみの力ちからに。

九

皇神すめかみの珍うづの言葉ことばを味あぢはひて  
夜よるなき國くにの幸さちを知しるかな。

一〇

日にち々にちの法のりとなすべき御姿みすがたを  
罪つみある身みにも拜をがませたまへ。

一一

永久とこしへの榮さかえに充みてる皇神すめかみは  
わが身みを守まもる力ちからなりけり。

第二五三

一

天津日あまつひの神かみの光ひかりに照てらされて  
夜よるなき國くにに進すすみ往ゆかまし。

二

輝かがやける珍うづの大路おほぢを歩あゆむ身みは

罪つみの流ながれに落おつる事ことなし。

三

八や重へ葎むぐらわが往ゆく道みちを塞ふさぐとも  
安やすく通かよはむ神かみの任まに任まに。

四

奥おく津つ城きも榮さかえの門かどと思おもふまで  
惠めぐませたまへ瑞みづの心こころに。

五

村<sup>むら</sup>肝<sup>きも</sup>の心<sup>こころ</sup>に神<sup>かみ</sup>のましまさば  
常<sup>とこよ</sup>世<sup>よ</sup>の闇<sup>やみ</sup>も如<sup>い</sup>何<sup>か</sup>で迷<sup>まよ</sup>はむ。

## 第二五四

一

仇<sup>あだ</sup>人<sup>ひと</sup>の群<sup>むら</sup>がり立<sup>た</sup>ちて笑<sup>わら</sup>ふとも  
押<sup>お</sup>しわけ往<sup>ゆ</sup>かむ神<sup>かみ</sup>の大路<sup>おほぢ</sup>を。

二

我<sup>わが</sup>神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>前<sup>まへ</sup>に進<sup>すす</sup>み跪<sup>ひざまづ</sup>き

過ぎにし罪を悔いて捨てばや。

三

罪の身も神の尊きころも手に  
觸れて安けくなりけるかな。

四

如何ならむ曲のわが身を襲ふとも  
動かざらまし神の守りに。

五

數<sup>かず</sup>ならぬ身<sup>み</sup>をも捨<sup>す</sup>てさせたまはずに  
此<sup>こ</sup>上<sup>よ</sup>なき惠<sup>めぐみ</sup>賜<sup>たま</sup>ふわが更生<sup>き</sup>主<sup>み</sup>。

六

我<sup>わが</sup>神<sup>かみ</sup>の爲<sup>ため</sup>には何<sup>なに</sup>か惜<sup>をし</sup>むべき  
山<sup>やま</sup>も畑<sup>はたけ</sup>も珍<sup>うづ</sup>の寶<sup>たから</sup>も。

七

大<sup>おほ</sup>前<sup>まへ</sup>に供<sup>そな</sup>へまつらむものもなし  
ただ赤<sup>まご</sup>心<sup>ころ</sup>の清<sup>きよ</sup>きのみなる。

八

砕<sup>くだ</sup>けたる心<sup>こころ</sup>の玉<sup>たま</sup>を御幣<sup>みでくら</sup>と  
供<sup>そな</sup>へまつらむ神<sup>かみ</sup>の御前<sup>みまへ</sup>に。

## 第二五五

一

皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>は晝<sup>ひる</sup>と夜<sup>よる</sup>との別<sup>わか</sup>ちなく  
惠<sup>めぐみ</sup>の雨<sup>あめ</sup>を降<sup>ふ</sup>らせたまひぬ。

二

世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>の樂<sup>たの</sup>しみ許<sup>ばか</sup>り求<sup>もと</sup>めたる

わが身は實にも愚なりけり。

三

苦しきも厭はず避けず大道に  
麻柱ひまつる人ぞ尊き。

四

ふく息も幽かに残る最後にも  
恵ませたまふ元つ大神。

第二五六

一

仇あだ數あまた多た攻せめ寄よせ來くとも恐おそれむや  
神かみは吾われ等らと共ともに在あませば。

二

試こころみに遭あふも憂うれひの雨あめ降ふるも  
悔くまず怯おぢず神かみに任まかせよ。

三

闇やみ深ふかく嵐あらし激はげしく吹ふく中なかも  
神かみに任まかせし身みこそ安やすけき。

四

世よの中なかの聖ひじりの道みちを踏ふみ越こえて  
神かみの大おほ路ぢに進すすみ行ゆかまし。

五

わが心こころ救すくひの神かみに任まかす上うへは  
今いまも神かみ國くにの幸さちに住すむなり。

第二五七

一

終<sup>をは</sup>りまで赤<sup>まごころ</sup>心<sup>こ</sup>籠<sup>こ</sup>めて仕<sup>つか</sup>へまつる  
人<sup>ひと</sup>は神<sup>かみよ</sup>代の<sup>たから</sup>寶<sup>たから</sup>なりけり。

二

現<sup>うつしよ</sup>世<sup>よ</sup>の戰<sup>たたか</sup>ひ如何<sup>いか</sup>に激<sup>はげ</sup>しとも  
御<sup>みはた</sup>旗<sup>た</sup>の下<sup>もと</sup>はいとど安<sup>やす</sup>けし。

三

目<sup>め</sup>も眩<sup>くら</sup>むばかり輝<sup>かがや</sup>く珍<sup>うづたから</sup>寶<sup>たから</sup>  
何<sup>なに</sup>かはあらむ神<sup>かみ</sup>の國<sup>くに</sup>には。

四

誘いざなひの醜しこの諸もも聲こゑ耳みみにみちて  
眼まなこ眩くらます人ひとぞうたてき。

五

わが身み魂たまごころ試たまむるもの内外うちそとに  
伊い寄より集つどひぬ守まもらせたまへ。

六

いと清きよき珍うづの御み聲こゑを放はなちつつ  
名めい利りの嵐あらしを薙なぎたまひける。

七

皇神すめかみの嚴いづの御心みこころ移うつしなば  
心こころの浪なみは忽たちまち風なぐべし。

八

大前おほまへに珍うつつの僕しもへと仕つかへまつる  
司つかさを清きよく恵めぐませたまへ。

九

現世うつしよにあらむかぎりは麻柱あななひの  
神かみの心こころを永と久はに持もたまし。

第二五八

一

皇神の御稜威を高くうたひつつ  
天津御國に昇る嬉しさ。

二

嚴御靈宣らせたまへる言の葉は  
闇世を照す光なるかも。

三

形かたちある寶たからに心動こころごころかさず  
誠まこと一つに進すすみ往ゆけ御子みこ。

四

世よのほまれ如何いかに廣ひろけく照てれるとも  
神かみの國くににはいとど小ちひさし。

五

奇くしびなる愛あいの光ひかりの輝かがやける  
御顔みかほの色いろぞ實げにもなつかし。

六

悲<sup>かな</sup>しみは消<sup>き</sup>えて憂<sup>うれ</sup>ひは跡<sup>あと</sup>もなし  
めぐみの滴<sup>したた</sup>る瑞<sup>みづ</sup>の姿<sup>すがた</sup>に。

七

惱<sup>なや</sup>む時<sup>とき</sup>疲<sup>つか</sup>れし折<sup>をり</sup>も皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の  
愛<sup>あい</sup>の御<sup>み</sup>聲<sup>こゑ</sup>に力<sup>ちから</sup>得<sup>え</sup>にけり。

八

目<sup>め</sup>に見<sup>み</sup>えぬ元<sup>もと</sup>つ神<sup>みくに</sup>國<sup>くに</sup>も我<sup>わが</sup>神<sup>かみ</sup>の  
惠<sup>めぐみ</sup>によりて安<sup>やす</sup>く昇<sup>のぼ</sup>らむ。

第二五九

一

生死いきしには皆皇神みなすめかみの御心みこころぞ  
唯何事ただなにごとも神かみに倣ならへよ。

二

我神わがかみの御爲みためになれば富とみも智ち慧ゑも  
力ちからも位くひくゑも捧ささげまつらむ。

三

神かみのため憂うれひ惱なやみも怖おそれずに  
進すすみ往ゆく身みぞ國くにの御寶みたから。

四

神かみのため千座ちくらを負おひて勇いさみ立たち  
喜よろこび行ゆかむ山やまの奥おくまで。

第二六〇

一

綾錦神あやしきかみの都みやこに上のぼり往ゆく

旅たびにしあれば頼たのもしきかな。

二

御教みをしへの友ともと手てを引き遠方をちかたの  
綾部あやべをさして行くぞ嬉うれしき。

三

圓山まるやまの緑滴みどりしたたる齋場ゆにはこそ  
神かみの在まします御園みそのなりけり。

四

これやこの知るも知らぬも押し立てて  
笑みこぼれつつ御園に集へる。

五

世の中の總てを捨てて皇神の  
教に従ふ人ぞたふとき。

第二六一

一

巖御靈瑞の御靈の神柱は

御み楔そぎの業わざを初はじめたまひぬ。

二

御み心こころに背そむきまつりし人ひと草くさも  
等ひとしく愛あいの御み聲こゑ聞きくなり。

三

永とこ久とはに罪つみより清きよめ御み惠めぐみの  
滴したたる園そのに導みちびきたまへ。

四

永久とこしへに輝かがやき渡わたる御榮みさかえは  
旭あさひの昇のぼる如ごとくにおはせり。

（大正一二・五・九 舊三・二四 於教主殿 明子録）

第二章 神柱しんちゆう（一五七七）

第二六二

一

わが爲ために千座ちくらを負おひし神柱みはしらを

知らぬ顔にて世にあるべきや。

二

御教に叶ひし御子の幸はひは  
如何に楽しき生涯なるらむ。

三

悦びて千座を負ひつつ道の爲  
死に至るまで仕へまつらな。

四

御み榮さ光かえの珍うづの冠かむりは千座ちくら負おふ  
人ひとの頭かしらに被かぶせ玉たまはむ。

第二六三

一

世よの榮ほまれ譽むな空むなしき希望のぞみ何なにかあらむ  
神かみの榮さかえ光かえに比くらべて見みれば。

二

わが命道いのちみちの爲ためには棄すつるとも

いかで惜しまむ神かみるます國くによ。

三

現世うつしよの樂たのしみ榮さかえ悉ことごとく  
神かみに捧ささげて仕つかへ奉まつらな。

四

天津國あまつくにのつきぬ樂たのしみを身みに受うけて  
永久とほに榮さかゆる魂たまとなるべき。

五

惠めぐみより榮光さかえに進すすみ上のぼり行ゆく  
天津御國あまつみくには樂たのしかるらむ。

六

變かはり行ゆく世よに生うまれ來きて皇神すめかみの  
惠めぐみに浸ひたるは嬉うれしからずや。

第二六四

一

わが魂たまを洗あらひ清きよめて永とこし久への

恵めぐみをたまへ瑞みづの大神おほかみ。

二

わが月つきひ日ひわが所有もちもの物ものも悉ことごとく  
つかはせ玉たまへ瑞みづの大神おほかみ。

三

わが歩あゆみ神かみの御後みあとを慕したひつつ  
夜よるなき國くにに進すすむ嬉うれしさ。

四

皇神すめかみの珍うづの力ちからに頼たよりつつ  
惡魔あくまの猛たける道みちを別わけ行ゆく。

五

皇神すめかみの惠めぐみを謳うたふわが舌したは  
天あまの瓊ぬほこ矛つるぎの劍つるぎなりけり。

六

わが口くちに清きよき言ことば葉おとづの訪おとづれを  
溢あふるるばかり充みたさせ玉たまへ。

七

世よの寶たから皆みな皇神すめかみに奉たてまつり  
魂たまをあづけて御世みよを送おくらむ。

八

わが心神こころかみの寶座みくらと選えらびまして  
彌いやとこしへ永久とこしへに鎮しづまりませよ。

第二六五

一

雪ゆきよりも白しろく清きよけく研みがきませ

神かみの宮居みやゐのわが魂たましひを。

二

諸もろ々もろの仇あだを退やひてわが魂たまを  
神かみの宮居みやゐとなさしめ玉たまへ。

三

伏ふして願ねぎ起おきては祈いのる眞心まごころを  
諾うべなひたまへ嚴いづの大神おほかみ。

四

許々こたく多久たぐの罪つみを清きよめてわが魂たまを  
彌新いやあたらしき宮みやとなしませ。

## 第二六六

一

皇神すめかみは生命いのちのもとにましませば  
吾等われらは永久とこほに生いきて榮さかえむ。

二

皇神すめかみの御許みもと離はなれて現世うつしよに

立働たちはたらくも御心みこころなるべき。

三

身みも魂たまも捧ささげまつりて道みちのため  
世よ人のびとために犠いけに牲へとなれ。

## 第二六七

一

世よの中なかの波なみは騒さわげど御み恵めぐみの  
聲こゑは静しづかに治をさまりて聞きこゆ。

二

家族親族すべてを捨てて御後方に  
とく従ひぬ神のまにまに。

三

朝夕の起臥さへも御恵の  
神の御聲は豊に聞ゆる。

四

限りある果敢なき此世の富を棄てて  
生命のもとの神に従へ。

五

瑞御魂宣らす言靈喜びて

聲のまにまに進み行くなり。

第二六八

一

眞心を籠めし祈言短くも

恵の神は聞召すらむ。

二

朝夕あさゆふに御前みまへに祈いのり業げふをなせば  
いと安やすらけく進すすみ行ゆくべし。

三

曲まがりたる人ひとは何なんとも言いはば言いへ  
わが眞まご心ころは神かみのみぞ知しる。

## 第二六九

一

人ひとの子この朝あさな夕ゆふなに守まもるべき

勤<sup>つと</sup>めは神<sup>かみ</sup>に従<sup>したが</sup>ふにあり。

二

天<sup>あめ</sup>地<sup>つち</sup>の道<sup>みち</sup>に叶<sup>かな</sup>ひて皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の  
嚴<sup>いづ</sup>の御<sup>み</sup>楯<sup>たて</sup>となるが嬉<sup>うれ</sup>しき。

三

世<sup>よ</sup>のため<sup>ため</sup>に朝<sup>あさ</sup>な夕<sup>ゆふ</sup>なに勤<sup>いそ</sup>みて  
御<sup>み</sup>旨<sup>ね</sup>傳<sup>つた</sup>ふる人<sup>ひと</sup>は神<sup>かみ</sup>なり。

四

何事なにごとも元津御神もとつみかみの御名みなによりて  
祈いのる言葉ことばに仇花あだばなはなし。

五

世よの審判さばき近ちかづくとも恐れおそれむや  
神かみの大道おほぢを歩あゆむ身みなれば。

第二七〇

一

わが身魂みたま慰なぐさめ照てらすものあらじ

只ただ皇すめ神かみの御み聲こゑのみなり。

二

われは今いま瑞みづの御み魂たまと俱ともにあり  
如何いかなる枉まがも襲おそふべきかは。

三

いと清きよき神かみの光ひかりに照てらされて  
輝かがやきわたる人ひとは聖ひと止となり。

四

嚴いづ御み靈たま瑞みづの御み魂たまの御み心こころに  
叶かなふ人ひとこそ人ひとの聖ひと止となり。

第二七一

一

千ち萬よろづの仇あだは絶たえせず襲おそひ來こむ  
嚴きびしく守まもれ神かみの大道おほぢを。

二

世よの中なかの戦たたかひ休やすむ時ときもなし

神かみに祈いのりて安やすく榮さかえよ。

三

枉まが神かみの戦いくさに勝かてば彌い益やますも  
こころ固かためて夢ゆめな撓たゆみそ。

四

天あま津つ國くに珍うづの宮みや居ゐに進すすむまで  
勇いさみ戦たたかへ言こと靈たまをもて。

(大正一二・五・九 舊三・二四 隆光録)

第三章 神力しんりき（一五七八）

第二七二

一

皇神すめかみの教のりのちからに靈魂たましひを  
強めて曲つよのとりでにせまれ。

二

曲神まががみの世よにある限りかぎ言靈ことたまの  
いくさは止やまじ勇いさみ進すすめよ。

三

皇神すめかみのいづのちからに頼たよりなば  
まがつ戦いくさもなにか有あらむや。

四

たたかひの長ながきを悔くやむ事ことなかれ  
かちどき擧あぐる時ときは迫せまりぬ。

五

曲神まががみの力ちから加くははり來きたる時とき  
神かみの力ちからはいや増まさり行ゆく。

六

神國かみくにの嚴いづのつはものいざ進すすめ  
生言靈いくことたまの楯たてをかざして。

第二七三

一

浅あさき瀨せは醜しこのあら浪なみ高たかけれど  
深ふかき流ながれは水音みなおとも無なし。

二

御救みすくひの舟ふねに棹ささしすべりゆく  
大海原おほうなばらの波なみの静しづけさ。

三

たちねの母ははのみどり子こ安やすらかに  
ねむらす如ごとく治をさめますかも。

四

舟人ふなびとの聲こゑも静しづかに聞きこゆなり  
いざすすみゆけ救すくひの船ふねに。

五

みさかえの珍うづの港みなとも近ちかづきぬ  
神かみのまにまに御船みふね漕こぎゆく。

六

瑞御魂みづみたま救すくひの舟ふねとあらはれて  
浪なみに漂ただよふ世よ人びとを助たすくる。

第二七四

一

恐おそれずに進すすめ言こと靈たま神み軍いくさよ

十曜とえうの御旗みはた高くひるがへる。

二

言靈ことたまの軍いくさの聲こゑに戦まのきて  
雲くもを霞かすみと敵あだは逃にげ往ゆく。

三

神軍みいくさの勳いさをを稱たたふ其聲そのこゑは  
黄泉よみの礎いしず揺あゆり動うごかさむ。

四

言こと靈たまのみやび言こと葉はを打うち出だして  
仇あだの砦とりでに進すすみ往ゆかまし。

五

たとへ身みは滅ほろび矢やすとも皇すめ神かみの  
みくには永と久はに滅ほろぶ事ことなし。

六

黄よ泉も國つく醜くの力ちからも消きえて往ゆく  
生い言く靈ことの勇いさましきかな。

七

あまつかひよびと  
天使世人と共に皇神の  
いさをた  
勳稱ふる時は來にけり。

## 第二七五

一

すめかみ  
皇神の御旨畏み進む身は  
まがひ  
醜の曲靈も何か怖れむ。  
なに  
おそ

二

ことたま  
言靈の太刀取佩きて寄せ來る

仇あだを言こと向むけ和やはせ神かみ人びと。

三

醜しこの仇あだ放はなたばはなて征そ矢やのたま  
われにも神かみの楯たてはありけり。

四

仇あだ浪なみの醜しこの企たくみも何なにかあらむ  
神かみの守まもりのしげき身みなれば。

五

戦<sup>たたかひ</sup>の<sup>その</sup>其<sup>たびごと</sup>度<sup>ごと</sup>毎<sup>ごと</sup>に<sup>わが</sup>わが<sup>ちから</sup>力<sup>ちから</sup>  
神<sup>かみ</sup>の<sup>めぐみ</sup>恵<sup>めぐみ</sup>に<sup>い</sup>い<sup>や</sup>や<sup>まさ</sup>勝<sup>まさ</sup>り<sup>ゆく</sup>行<sup>ゆく</sup>く。

六

瑞<sup>みづみ</sup>御<sup>たま</sup>靈<sup>たま</sup>表<sup>おも</sup>に<sup>かがや</sup>輝<sup>かがや</sup>き<sup>たま</sup>た<sup>ま</sup>ま<sup>ひ</sup>ひ<sup>つつ</sup>つつ  
世<sup>よ</sup>を<sup>をさ</sup>治<sup>をさ</sup>め<sup>ます</sup>ます<sup>ひ</sup>日<sup>ひ</sup>は<sup>つ</sup>近<sup>つ</sup>づ<sup>き</sup>づ<sup>き</sup>ぬ。

第二七六

一

立<sup>た</sup>て<sup>よ</sup>よ<sup>ふる</sup>奮<sup>ふる</sup>へ<sup>よ</sup>よ<sup>あ</sup>三<sup>あ</sup>三<sup>あ</sup>五<sup>あ</sup>の<sup>な</sup>

神<sup>かみ</sup>の<sup>よ</sup>よ<sup>さ</sup>さ<sup>し</sup>の<sup>かみ</sup>神<sup>かみ</sup>軍<sup>いくさ</sup>よ

十曜とえうの御旗みはた翻ひるし 總すべての仇あだを言こと向むけて  
神かみの御稜威みいづを四よ方もの國くに 輝かがやかすまで進すすみ往ゆけ。

二

皇大神すめおほかみは神軍みいくさを 數多率あまたひきつれ大空おほぞらの  
雲搔くもかき別わかけて下くだります 醜しこの惡魔あくまはいや猛たけく  
押おし寄よせ來きたる事ことあるも 何なにか怖おそれむ三五あななひの  
誠まことの道みちの宣傳使せんてんし。

三

立たてよ言靈ことたま神軍みいくさよ 嚴いづの御靈みたまを經たてとなし  
瑞みづの御靈みたまを緯ぬきとなし 錦にしきの御旗みはたを織おりながら

仁慈じんじの鎧よろひを身みにまとひ  
各自おのもおのもの職分もちまへと

身みも棚たなし知らすすらに進すすむべし。  
智慧ちゑの劍つるぎを打ちかざし

四

神かみの御軍みいくさ漸やくに

終をはりを告つげて勝鬨かちどきの

聲こゑは天地てんちに揺ゆぐなり

永と久はの生命いのちの冠かむりをば

受うけて榮さかえの神柱かむはしら

經たてと緯よことの經綸けいりんに

勵いそしみまつれ信まめ徒ひとよ

神かみは汝なんぢと俱ともにあり

人ひとは神かみの子こ神かみの宮みや。

第二七七

一

曲津靈を言向け和す神軍の  
錦の御旗に従ひ進め。

二

世のそしり醜の妨げ厭はずに  
進むは神の御旨に叶へる。

三

千萬のあざみ妨げ身にうけて  
怯ぢず撓まず進め神人。

四

太刀劍火水の中也厭はざらむ  
世のため神の御爲なりせば。

五

男女老と若きの隔てなく  
神の軍に行くは雄々しき。

六

黄泉の國拂ひくだきて神國に  
開かせたまふ瑞の大神。

七

皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の使<sup>つか</sup>はせたまふ御<sup>み</sup>軍<sup>いくさ</sup>の  
尊<sup>たふと</sup>き群<sup>むれ</sup>に入<sup>い</sup>るが嬉<sup>うれ</sup>しき。

第二七八

一

言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>の軍<sup>いくさ</sup>の主<sup>きみ</sup>は瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>  
醜<sup>しこ</sup>の曲<sup>まが</sup>靈<sup>ひ</sup>も清<sup>きよ</sup>められ行<sup>ゆ</sup>く。

二

神軍みいくさの列つらに加くははり血ちの海うみを  
いやさきがけて進すすみ行ゆかまし。

三

如何いかにしてわが身み一人ひとりが花はなの園そのに  
嬉うれしき夢ゆめを辿たどるべしやは。

四

目まのあたり醜しこの仇あだがみ神潮しほの如ごとく  
寄よせ來くる見みれば心こころ勇いさみぬ。

五

大御旗空にかざして戦はむ  
生言靈になびかぬ仇なし。

六

彌榮に榮ゆる御代は近づきぬ  
我日の御子の巖の光に。

第二七九

一

村肝の心をのき惑ふときも

勇いさませたまふいづ嚴いづの大神おほかみ。

二

わがため爲あまつに天津神國みくにに祈いのります  
瑞みづの御靈みたまの恵めぐみかしこし。

三

形かたちある寶たからに眼奪まなこつばはれて  
知しらず知しらずに黄泉よみに落おち往ゆく。

四

素盞鳴の神の負ひます八千座は  
世人の罪のあがなひと知れ。

五

遺瀨なき諸の悲しみ悩みをも  
拂はせたまふ嚴の大神。

六

皇神の秘めたまへる慈愛  
現はしたまふ世は近づきぬ。

七

現身うつそみの塵ちり打ちう拂はらひ御み惠めぐみの  
冠かむりをたまふ三五あななひの神かみ。

八

許こ々こ多た久くの惱なやみに勝かちて永とこ久しへの  
春はるばかりなる神みくに國くにへ行ゆかむ。

第二八〇

一

城しろ高たかく堀ほり深ふかくとも仇あだ人びとの

據よれる砦とりでは恐おそるに足たらず。

二

彌い高やき城たかも軍しろも皇いく神さの

伊い吹ふの狭さ霧ぎりに水あ泡わと消きえ往ゆかむ。

三

怖おそるべき仇あだは世よ人びとの目めに見みえず

攻せめも來きたらず圍かこみもなさず。

四

恐るべき誠の仇は心なり  
鬼の潜みて時期を窺ふ。

五

わが胸に潜める仇は三五の  
御霊の剣に刺し徹してむ。

六

生霊の珍の剣に怯ぢ怖れ  
心の仇は滅び失せけり。

七

皇神すめかみは軍いくさの主きみにましませば  
おそるることなく進すすみ戦たたかへ。

八

内外うちそとの仇あだごと悉ことく平たひらげて  
更生き主みの御前みまへに勝かちどき鬩あげよ。

第二八一

一

神かみの子こよ神かみの御聲みこゑに目めを醒さませ

世よの終をはるとき近ちかづき來きたれり。

二

永とこしへ久への生いのち命の綱つなは御み空そらより  
神かみのまにまに降くだり來きにけり。

三

諸もろびと人かみよ神かみの御みこゑ聲を謹つつしみて  
生いくことたま言の靈みつなの御み綱つなに絶すがれ。

四

早來はやこよと綾あやの高天原たかまに現あらはれて  
招まねかせたまひぬ生命いのちの神かみは。

五

皇神すめかみの榮さかえ輝かがやき現世うつしよに  
又また比くらぶべきものなかるべし。

六

現世うつしよにときめき渡わたる人ひとの名なも  
神かみの國くににはいとど小ちひさき。

七

瑞御靈招みづみたままねかされたまふ玉たまの聲こゑを  
しるべに走はしれ神かみの都みやこへ。

八

三口クよの代ひら開そけ初あかつきめたる曉あかつきは  
神かみの力ちからを稱たたへぬはなし。

（大正一二・五・一〇 舊三・二五 於教主殿 明子録）

第四章 神慈しんじ（一五七九）

第二八二

一

由良の河瀬の音高く

松雲閣の離れの間

煙にうさを散じつつ

巻物語初め行く。

枕に響く竝松の

横に臥しつつ敷島の

山河草木己丑の

二

新緑滴る初夏の候

猫の産した話なぞ

鼻の尖つた北村氏

川の流を聞きながら

面白可笑しく聞き乍ら

竿竹姫と諸共に

讚美歌もどきの雑歌を

あらあらここに詠み出でぬ。

三

ほのかに聞ゆる水の音  
竝松通ふ車の響  
赤兒の泣聲聞き乍ら  
猫の鳴く音と怪しみつ  
南枕に西向いて  
いやいや乍ら述べて行く。

四

筆を含みし麥畑  
菜種子の花も彼方此方に  
黄金の色をかざしつつ  
いとも静に夏の日を  
迎へるこそ床しけれ  
流れも清き小雲川  
流れの音の轟々と  
世に響くなる言靈の

三十一文字の物語 筆にとどめて後の世の  
ためしと茲に述べておく。

## 第二八三

一

日は西に傾きそめて醜神の  
伊猛り狂ふ世とはなりぬる。

二

常世行く暗を晴らして昇ります

月つきこそ神かみの守まもりなりけり。

三

振ふるひ立つた柱まがも御み空そらの月つき影かげに  
所得ところえずして逃にげ失うせにけり。

四

嚴いづ御み靈たま瑞みづの御み靈たまの御み守まもりに  
魔まの棲すむ世よにも心こころ安やすかり。

五

皇神すめかみの大御恵おほみめぐみを世よに傳つたへ  
御名みなを現あらはす人ひととなりたき。

六

苦くるみの中なかにも永と久はの希の望ぞみあり  
いかに幸さちあるわが身みならずや。

七

皇神すめかみの嚴いづの御旨みむねに叶かなひなば  
御國みくにの門かどは獨ひとり開ひらかむ。

第二八四

一

伊都の御靈や美都御靈

玉の御聲は爽かに

天津空より聞え來ぬ

あゝ諸人よ諸人よ

耳をすませて逸早く

神の吹きます角笛の

御許に勇み寄り集へ

神は愛なり力なり。

二

海山隔てし遠方の

異國人に御惠の

訪れ傳へ得ずとても

せめては間近き住人に

神の御教を宣べ傳へ

安けき國に導きて

錦にしきの機はたの神業かむわざに  
諭さとさせ玉たまへ惟かむながら神

一人ひとりも多おほく仕つかふべく  
御前みまへに畏かしこみ願ねぎ奉まつる。

三

瑞みづの御靈みたまの宣のり玉たまふ  
語かたり得えずとも村肝むらきもの  
仁じんじの神かみの御心みこころを  
神かみの御楯みたてと逸いちはや早く

力ちからのこもりし言ことの葉はは  
心こころの限かぎり身みを盡つくし  
洽あまねく世人よびとに布しき教をしへ  
ならしめ玉たまへと願ねぎ奉まつる。

四

雲くも井みに高たかく住すむ人ひとや  
珍うづつの教をしへを詳まつびに

鄙ひなに住すまへる人々ひとびとに  
諭さとさせ玉たまへと朝あさ夕ゆふに

祈りをこらす神司いの かむつかさ 卑しき伏屋いや ふせやに身を起しみをおこ  
 女童をみなわらへに至るまで 悟り安さと やすきを旨むねとなし  
 卑近ひきんな言葉ことばを相あひなら並らべ 嚴いづの言靈ことたまうち打出だして  
 救すくひの栞しをりとなし玉たまふ 教祖をしへみおやの御功績みいさをは  
 天地てんちに並ならぶものもなし あゝ惟かむながらかむながら神々々  
 嚴いづの御魂みたまの尊たふとさよ 爲なす業わざなしと世よの業わざを  
 怠をこたり仇あだに日ひを暮くらす 人ひとは此この世よの曲津まがつかみ神かみ  
 眼まなこを覺さまし省かへりみよ 曇くもり果はてたる世よの人の  
 身魂みたまは亡ほろびに近ちかづけり 神かみの教をしへを畏かしこみて  
 四方よもにさまよふ同胞はらからに 神かみの救すくひの御聲おんこゑを  
 宣のべ傳つたへつつ神かみの子こと 生うまれ出いでたる務つとめをば  
 完全うまらに委曲つばらに盡つくすべし 神かみは汝なんぢと俱ともにあり  
 人ひとは神かみの子こ神かみの宮みや。

第二八五

一

道みちのため勵いそしめ宣つか使さは花はなにおける  
きらめく露つゆの消きえぬ間まにこそ。

二

時ときは過すぎ日ひは暮くれやすし朝あさ日ひ子この  
光ひかり照てる間まに道みちに勵いそしめ。

三

天津日あまつひの光輝ひかりがやき給たまふ間まに  
勉つとめ勵いそしめ神かみの宣つか使さ等ら。

四

日ひの御足みあし矢やよりも速はやし晝ひるの間まに  
神かみの言葉ことばを宣のべ傳つたへてよ。

五

勵いそしみて仕つかへ奉まつれよ青田あをた吹ふく  
涼すずしき風かぜの通かよへる間うちに。

六

業<sup>わざ</sup>休<sup>やす</sup>み寝<sup>ねむり</sup>に就<sup>つ</sup>く夜<sup>よ</sup>はいと早<sup>はや</sup>し  
日<sup>ひ</sup>の入<sup>い</sup>るま<sup>ま</sup>で<sup>で</sup>に道<sup>みち</sup>に勵<sup>いそ</sup>しめ。

第二八六

一

收<sup>かり</sup>穫<sup>いれ</sup>の時<sup>とき</sup>早<sup>は</sup>や迫<sup>せま</sup>り來<sup>きた</sup>りけり  
何<sup>な</sup>故<sup>ぜ</sup>淋<sup>さび</sup>しげに野<sup>の</sup>良<sup>ら</sup>に立<sup>た</sup>てるか。

二

友<sup>とも</sup>來<sup>きた</sup>る時<sup>とき</sup>を待<sup>ま</sup>つ間<sup>ま</sup>に日<sup>ひ</sup>は暮<sup>く</sup>れぬ

ひきて歸かへらぬ征そ矢やの如ごとくに。

三

夜よとならば如何いかになすべき術すべもなし  
日影ひかげあるうち谷川たにがはわた渡わたらへ。

四

世よを恵めぐむ神かみの御旨みむねを畏かしこみて  
仇あだに暮くらすな神かみの御子みこたち。

五

雨あめの朝風あさかぜの夕ゆふべも厭いとひなく  
勵いそしみまつれ惟かむながら神かみの道みち。

六

黄金こがねなす瑞穂みづほの稻いねを山やまの如ごと  
收穫かりいれ果はてて倉くらに納をさめよ。

七

御教みをしへの種たね子をば四方よもに蒔まきし人ひとの  
收穫かりいれ時ときの販にぎはしきかな。

八

嚴<sup>いづ</sup>御<sup>みた</sup>靈<sup>たま</sup>瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>みた</sup>靈<sup>たま</sup>の大<sup>おほ</sup>前<sup>まへ</sup>に  
功<sup>いさを</sup>績<sup>を</sup>を立てて謳<sup>うた</sup>ふ嬉<sup>うれ</sup>しさ。

第二八七

一

皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の大<sup>おほ</sup>御<sup>み</sup>心<sup>こころ</sup>を糧<sup>かて</sup>となし  
勵<sup>いそ</sup>しみ勤<sup>つと</sup>めよ日<sup>ひ</sup>々<sup>び</sup>の業<sup>げ</sup>務<sup>む</sup>に。

二

夢<sup>ゆめ</sup>よりも果<sup>は</sup>敢<sup>か</sup>なき此<sup>この</sup>世<sup>よ</sup>の榮<sup>さか</sup>えをば

棄<sup>す</sup>てて神<sup>みくに</sup>國<sup>に</sup>の榮<sup>さか</sup>え樂<sup>たの</sup>しめ。

三

御<sup>み</sup>榮<sup>さか</sup>光<sup>かえ</sup>と生<sup>いの</sup>命<sup>のち</sup>の冠<sup>かむり</sup>を賜<sup>たま</sup>ふべき  
時<sup>とき</sup>近<sup>ちか</sup>づきぬ勵<sup>いそ</sup>しみ勤<sup>つと</sup>めよ。

四

現<sup>うつ</sup>し世<sup>よ</sup>の空<sup>むな</sup>しき旅<sup>たび</sup>をなす人<sup>ひと</sup>に  
誠<sup>まこと</sup>の道<sup>みち</sup>を諭<sup>さと</sup>せ神<sup>みつ</sup>使<sup>かひ</sup>。

五

功績いさもなく仇あだに此世このよを過すこしなば  
神國みくにの父ちちに會あはむ顔かほなし。

六

目めを覺さまし主きみまつもの頭かしらをば  
撫なで慈いつくしむ時ときは近ちかみぬ。

第二八八

一

常暗とこやみの危あやふき旅路たびぢを今日けふまでも

守り玉ひし尊き神はも。

二

瑞御靈嚴の御榮光あれかしと  
祝ひ謠へよ神の御子たち。

三

わが主の御名に頼りて受くるものは  
悪しき汚き影だにもなし。

四

玉たまの緒をの命いのちの消きゆる時とき來くれば  
神かみの御名みこそ力ちからなりけり。

## 第二八九

一

益ます良す夫らは世よをば恐おそれず皇神すめかみの  
御み稜い威づの光ひかり畏おそれて住すむなり。

二

強つよきをば言向ことむけ和やはし弱よわきをば

助くる人ぞ神の御使。

三

村肝の己が心を楯とせず  
神に従ふ人は神なり。

四

皇神の掟を守り畏みて  
百の艱難に勝つ人ぞ神。

五

世よの中なかの憂うれひに先さきだちよく憂うれひ  
共ともに喜よろこぶ人ひとは神かみなり。

六

わが友ともと仇あだなす人ひとと区わか別ちなく  
誠まこと變かへざる人ひとは神かみなり。

第二九〇

一

麻あな柱なひの大神おほみ教をしへのそのままを

過あやまつ事ことなく語かたらしめてよ。

二

千ち早はや振ふる神かみの正ただしき大おほ道みちに  
まどへる人ひとを救すくふ樂たのしき。

三

飢う渴かく人ひとの身み魂たまに皇すめ神かみの  
嚴いづの糧かてをば惠めぐませ玉たまへ。

四

皇神すめかみの嚴いづの力ちからにわが魂たまは  
充みたされ人ひとを救すくふ身みとなりぬ。

五

瑞御靈みづみたまわが身からだ體たまに憑うつりまし  
使つかはせ玉たまへ御心みこころのままに。

六

天地あめつちの嚴いづの喜よろこび身みに受うけて  
榮光さかえの御顔みかほ仰あふぐ嬉うれしさ。

第二九一

一

すめおほかみ 皇大神の御前を  
 おんまへ  
 齋き奉るは外ならず  
 いたつまつ ほか  
 みくに 神國を望み黄泉の國  
 のそよみ くに  
 百の責苦を怖ぢ恐れ  
 もせめく おおそ  
 のが 逃れむ爲に非ずして  
 たためあら ちから  
 力なき身も厭はずに  
 いかば 庇ひ玉へる御心の  
 たまみこころ  
 いと尊さに報ふ爲。

二

すめおほかみ 皇大神の御惠は  
 みめぐみ  
 百の艱難を凌ぎつつ  
 ももなやみ しの  
 あだ 仇なす身をも恵みまし  
 あまつみくに 天津御國の幸はひも  
 さち  
 ねそこ 根底の國の暗きをも  
 くら  
 てら 照させ玉ふ有難さ  
 たまありがた

その御恵に報いむと

御祭仕へ奉る。

三

神に仕ふる吾々は  
何の報いか望むべき  
此世を造り玉ひたる  
神の功績を稱へつつ  
愛の恵に報いむと  
眞心こめて大前を  
祝ひまつりつ永久の  
守りの主と仰ぐのみ  
あゝ惟神々々  
いや永久にましませよ。

(大正一二・五・一〇 舊三・二五 於松雲閣 隆光録)

第五章 神世〔一五八〇〕

第二九二

一

千<sup>ち</sup>早<sup>はや</sup>振<sup>ふる</sup>古<sup>ふる</sup>き神<sup>か</sup>世<sup>みよ</sup>も巡<sup>めぐ</sup>り來<sup>き</sup>て  
君<sup>きみ</sup>の惠<sup>めぐみ</sup>も彌<sup>いや</sup>隆<sup>たか</sup>光<sup>ひか</sup>る。

二

夜<sup>よる</sup>晝<sup>ひる</sup>の守<sup>まも</sup>りも清<sup>きよ</sup>く明<sup>あき</sup>けく  
隈<sup>くま</sup>なく照<sup>てら</sup>す神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>代<sup>よ</sup>かな。

三

空<sup>そら</sup>をおほふ松<sup>まつ</sup>の梢<sup>こすゑ</sup>に鶴<sup>つる</sup>棲<sup>す</sup>みて  
其<sup>その</sup>聲<sup>こゑ</sup>高く天<sup>あめ</sup>に聞<sup>きこ</sup>ゆる。

四

小<sup>を</sup>倉<sup>くら</sup>山<sup>やま</sup>花<sup>はな</sup>と紅<sup>も</sup>葉<sup>みぢ</sup>の二<sup>に</sup>尊<sup>そん</sup>院<sup>ゐん</sup>  
清<sup>きよ</sup>きは神<sup>かみ</sup>の姿<sup>すがた</sup>なりける。

五

千<sup>ち</sup>代<sup>よ</sup>八<sup>や</sup>千<sup>ち</sup>代<sup>よ</sup>變<sup>かは</sup>らぬ瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>光<sup>ひかり</sup>は  
此<sup>この</sup>世<sup>よ</sup>を救<sup>すく</sup>ふ珍<sup>うづ</sup>の御<sup>み</sup>寶<sup>たから</sup>。

第二九三

一

永とこしへ久への身みの住す所みかこそ天あま津つく國くにの  
夜よるなき花はなの神み園そのとぞ知しる。

二

高たかき名なも珍うづの寶たからもヨルダンの  
流ながれに浮うかぶ瑞みづの月つき影かげ。

三

夢醒めて朝日の影はさしにけり  
ねむりをさませ惑ふ人達。

四

現世を離れて元の故郷に  
歸らむ時の神は御力。

第二九四

一

千萬の仇攻め圍み寄るとも

いかで恐れむ綾の高天原は。

二

わが胸の奥の間深く聞えけり  
目を醒せよと神の御聲。

三

世の人を救はむために美はしき  
神の都を築きたまひぬ。

四

丹波あかなみの巖いづの聖地せいちに登のぼりなば  
知らしず知らしずしに日ひはたちてゆく。

五

皇神すめかみの巖いづの光ひかりは八衢やちまたも  
雲くも晴はれゆきて花園はなぞのとなる。

第二九五

一

皇神すめかみは卑いやしき人ひとの身みに下くだり

百ももの神業かむわざと遂とげさせたまふ。

二

村むら肝きもの心こころの奥おくを掃はき清きよめ  
鎮しづまり居ゐます天津神あまつかみ等たち。

三

新あたらしく神かみの姿すがたにつくりかへて  
導みちびきたまへ榮さかえの園そのに。

第二九六

一

現身うつそみの世よはいろいろに變かはるとも  
神かみのめぐみは永久とこしへにます。

二

花はなは散ちりよしや青葉あをばは枯かるとも  
幹みきと頼たのみし神かみに離はなれじ。

三

世よの旅たびに疲つかれ果はてたる人ひとの身みも  
神かみの御許みもとに憩いこひ榮さかえむ。

四

世よの中なかの希望のぞみは絶たえて果はつるとも  
榮さかえの神かみは恵めぐみますかも。

五

風かぜ荒すさみ雨あめ降ふりあれて亡ほろぶとも  
神かみの御蔭みかげに寄よらばやすけし。

第二九七

一

わが爲ために千座ちくらの置戸おきどを負おひましし  
瑞みづの御靈みたまは誠まことの御親みおやぞ。

二

土塊つちくれに似にたるわが身みを清きよめつつ  
神國みくにのものとなさしめたまへ。

三

神勅みことのり幾度いくたび聞きけど悟さとり得えず  
心こころにもなき御名みなを汚けがしつ。

四

かく迄までも曲まがれるわれを捨すてずして  
救すくはせたまふ更生き主みぞ尊たふとき。

第二九八

一

日ひの下もとの嚴いづの聖せい地ちをやはられて  
自おの凝ころ島しまに渡わたりたまひぬ。

二

自おの凝ころの島しまの眞ま秀ほ良ら場ば四よ尾つ山やまに

かくれてこの世をしろしめします。

三

瑞御靈メソポタミヤの顯恩郷に

かくれて神代をまちたまふなり。

四

瑞御靈元つ御國の日の下に

天降ります代は近づきにけり。

第二九九

一

古いにしへの神かみの開ひらきしエルサレムは  
ふたたび舊もとに返かへらむとするも。

二

イスラエル十二じふにの流ながれは悉じつじつく  
ヨルダン川がはに注そそぎ入いるなり。

三

天あめ地つちの元もとつ御み祖おやはやらはれて  
珍うづの御み子こたち世よに迷まよひぬる。

四

時とき來くれば四方よもの國くにより集あつまりて  
神かみの御み稜い威づを稱たたへ唱うたはむ。

五

此この時ときゆ天津あまつ使つかひは星ほしのごと  
神みやこ都この空そらに降くだり祝ほぐらむ。

第三〇〇

一

三五あななひの神かみの教をしへの廣ひろければ  
狭せまき心こころのいかに知しるべき。

二

頬杖ほほじょうをついて何程なにほど調しらぶとも  
隆光たかひかる神かみの胸むねは分わからじ。

三

目めに皺しわを寄よせて吐息といきをつきながら  
悟さとらむとする人ひとのをかしさ。

四

惟かむながららかみ  
神の御み胸むねをさとらむと  
思おもへば元もとの赤あか子ことなれ。

五

頼たよりなき智ち慧ゑや力ちからを頼たのみとし  
千ちとせ年ねんふるとも悟さとり得えざらめ。

六

此この經し綸ぐみ早はやく世よ人びとに解わかりなば  
神かみの希のぞ望みは永とこ久しへに立たたず。

第三〇一

一

永とこ久とはに育はぐみたまへ風かぜの日ひも  
雨あめの夕ゆふへも變かはりたまはず。

二

世よの中なかの罪つみにみちたる樂たのしみを  
捨すてて御みもと許とに往ゆく日ひ嬉うれしき。

三

さまざまの世の誘ひに打ち勝ちて  
清き大道を進ませ給へ。

四

闇の世を放れて昇る旭影  
迎へむ吉き日近づきにけり。

五

日出る神の建てたる神國に  
常磐の教主は生まれましにけり。

六

雲くもにの乗のり波なみを分わけつつ出いで來きたる  
東あづまのき教き主みをむか迎むかふうれ嬉うれしさ。

七

此この教き主みや天あめ地つち諸ももの神かみ人びとを  
治をさむる永と久はの御み柱はしらなりけり。

（大正一二・五・一〇 舊三・二五 於松雲閣 明子録）

第二篇 桶をけ伏ふせの山やま

第六章 神榮〔一五八一〕

第三〇二

一

浮世さへさながら神代の心地せり  
神に任せし吾身吾魂。

二

村肝の心の暗を晴されし  
嚴の恵を稱へまつらむ。

三

惟かむ任ながらしまきかつまたる心こころには  
神かみのさ榮かえ光あをおのづか自みらみむ。

四

奇くしびめくなるかみ神めくのあさ惠ゆのふ朝あ夕ゆに  
下くだらせたま玉たふおもと思おもへうればうれ嬉うれしき。

五

喜よろこびしのしら調しらべめく惠めくみおとのおと訪とれは  
天あま津つ御み風かぜにおく送おくらきたれきたるも。

六

われもなく現世もなく只一人  
神の御前に平伏し拜まむ。

七

わが胸の波治まりて村肝の  
心の空に月照り渡る。

第三〇三

一

思おもふさへなつかしき教き主みの神みす姿がたを  
仰あふげば如何いかに樂たのしかるらむ。

二

瑞みづ御み靈たま生いの命ちの主きみに勝まさりたる  
美うるはしき名なを誰たれか謳うたはむ。

三

只ひた管すらに神かみに從したがふ現うつ身そみの  
その歡よろこ喜びは底そこひ知しられじ。

四

わが教主の仁慈大徳さとりなば  
幸ひの花たちまち開かむ。

五

永久に榮えつきせぬわが教主の  
御前に遊ぶ身こそ樂しき。

第三〇四

一

天津御空に聞え來る

清き尊き歌の音に

あは 合せて 謳ふ 信徒が  
うきよ 浮世の 難み 歎きさへ  
しなど 科戸の 風に 散る 如く

みたま 身魂の 樂しみ 如何ばかり  
あした 朝の 深霧 夕霧の  
は 晴れ 渡り たる 心地なり。

二

あやめ 黒白も 分かぬ 暗の 夜も  
なに 何か 恐れむ 神國魂

まこと 誠の 榮光は 神にあり。  
をしへ 教の 主と 共なれば

三

うきよ 浮世の 榮光と 歡喜は  
うた 謠へよ 謠へ 神の 愛

たちま 忽ち 消えて 跡もなし  
ほ 讚めよ 稱へよ 神の 稜威。

四

浮世を包む村肝は  
嚴の御魂に照されて

日に日に泡と消え失せむ  
朝の深霧夕霧は

科戸の風に晴れ渡り  
行く手に輝く永久の

光は吾等が身魂をば  
いとおだやかに照すなり

仰げよ仰げ神の愛  
讚めよ稱へよ神の稜威。

第三〇五

一

村肝の胸の小琴に御言葉の

奏<sup>しら</sup>べ涼<sup>すず</sup>しく合<sup>あ</sup>ふぞ嬉<sup>うれ</sup>しき。

二

動<sup>うご</sup>きなき心<sup>こころ</sup>の海<sup>うみ</sup>に波<sup>なみ</sup>はなし  
これぞ平<sup>へい</sup>和<sup>わ</sup>の礎<sup>いしずえ</sup>と知<sup>し</sup>る。

三

瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>教<sup>をしへ</sup>の主<sup>きみ</sup>を仰<sup>あふ</sup>ぎなば  
惠<sup>めぐみ</sup>の露<sup>つゆ</sup>は身<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>うるほす。

四

仇波あだなみの立たち騒さわがざる身魂みたまこそ  
海うみより深ふかき心こころなるらむ。

第三〇六

一

永とこ久しへの生いの命ちと榮さか光えを與あたへます  
瑞みづの御み靈たまを親おやとし仰あふげ。

二

亡ほろび行ゆくわが魂たましひを生いかしつつ

神國の民とならしめ玉へ。

三

限りなき嚴の御恵知らずして  
過せし中に守ります神。

四

世を救ふ神の御旨に背きたる  
われは知らずに罪人となりぬ。

第三〇七

一

幸多さちおほき生業なりはひなりとも皇神すめかみの  
御許みゆるしなくば吾われはなすまじ。

二

すぐれたる人ひとの賢さかしき教をしへをも  
御旨みむねならずば吾われは學まなばじ。

三

友垣ともがきの如何いかに誘いざなふ道みちあるも  
神かみに背そむきし方かたに行ゆくまじ。

四

天津國如何に楽しくあるとても  
教主坐まさずば吾は上らじ。

第三〇八

一

罪も苦も朝な夕なに消え果てて  
榮光輝く御側に行かむ。

二

瑞御靈永久の恵に守られて  
知らず知らずに御前に進みぬ。

三

晝となく夜とはなしにわが教主の  
清き恵に守られて生く。

四

何處にも神の御跡は現れぬ  
憂ひ悲しみ百の艱みに。

五

癒いされぬ病やまひもあらず幸さちならぬ  
曲まがもなきこそ神代かみよなりけり。

六

皇神すめかみと俱ともにありせば如何いかならむ  
なやみに遭あふも苦くるしからまじ。

第三〇九

一

大空おほぞらを渡わたる日影ひかげにまさるべし

心に充てる神の光は。

二

輝ける神姿を胸にうつすこそ  
教の主の光なりけり。

三

限りなき稱への歌は胸に充てるを  
口には言はね神は聞きまさむ。

四

花はな薰かをり小鳥ことりは清きよく啼なき渡わたる  
春はるの景けしき色しきは神國みくにの姿すがたぞ。

五

喜よろこびの心こころに充みつる曉あかつきは  
思おもはず知しらず歌うたとなりぬる。

第三一〇

一

黄たそ昏がれて行ゆく手ては遠とほき野の路ぢの旅たび

杖つゑと頼たのむは神計かみばかりなり。

二

一人ひとり寝ねの淋さびしき夜半よはも皇神すめかみは  
俱ともに居ゐまして哺育はぐくみ玉たまふ。

三

わが友ともは先立さきだち行ゆきて淋さびしくも  
神かみを思おもへばいとど樂たのしき。

四

玉たまの緒をの生命いのちの影かげは薄うすれ行ゆきぬ  
神國みくにに上のぼるも近ちかくやあるらむ。

五

やすやすと静しづの寢ねむりに就つかせ玉たまへ  
天津神國あまつみくにに覺さむる時ときまで。

第三一一

一

よき事ことも又また曲事まがこともわが更生き主みの

よさし玉たまひし御事みわざとぞ知る。

二

身みも魂たまも恵めぐみの御手みてに委ゆたねつつ  
夜よるなき國くにに上のぼる樂たのしさ。

三

悲かなしみの涙なみだの雨あめは袖そでに降ふり  
憂うれひの雲くもは胸むねを包つつみぬ。

四

さりながら天津神國あまつみくにに上のぼるてふ  
希望のぞみは盡つきじ神かみましませば。

五

現世うつしよも又また靈界かくりよも皇神すめかみの  
清きよき御旨みむねに任まかしまつらむ。

（大正一二・五・一一 舊三・二六 於龍宮館 隆光録）

第七章 神降しんかう（一五八二）

第三一二（エルサレムは至聖地の意なり）

一

浮世うきよの闇やみにさまよひて  
身みも魂たましひも疲つかれたる  
悲かなしき人ひとよとく來きたれ  
救すくひの神かみは日ひの下もとの  
神かみのよさしのエルサレム  
自おの轉ころ倒じま島の聖せい場ぢやうに  
雨あめの如ごとくに天あも降もりませり。

二

高たか天あま原はらの神かみ國くにの  
巖いづの住すま居ゐはいと廣ひろし  
常とこよ世よの春はるの樂たのしみは  
花はな咲さき匂にほひ鳥とり歌うたひ  
玉たまの小を琴ことは時ときじくに  
床ゆかしく響ひびき天よき人ひとの

清きよき御み歌うたの聲こゑすなり。

三

類たぐひも知しらぬ天あまつ津つ國くに  
見みし事こともななき花はな薰かをり  
生いのち命の清しみづ水は永とこ久しへに  
あゝ美うるはししき神かみの國くに

嚴いづの御み園そのは現うつ世しよに  
榮さか光え歡よろ喜こび充みち溢あふれ  
泉いづみの如ごとく湧わき立たてり  
あゝたのもししき神かみの園その。

第三一三

一

故郷ふるさとの高原たかあまはらを眺ながむれば  
憂愁うれひに曇くもる目めも晴はれ渡わたる。

二

限かぎりなき醜しこの仇あだものよく防ふせぎ  
飛とび來くる火ひ矢やも怯おぢなく立たたむ。

三

わが惱なやみ波なみとも打うたば打うてよかし  
惠めぐみの眞帆まほをかけて渡わたらむ。

四

わが憂愁雨とも降らば降れよかし  
恵の傘を開き進まむ。

五

故郷の清き家路に歸り行く  
身は恐れむや百の艱難を。

六

疲れたるわが魂を永久に  
休むる神國に吹く嵐なし。

第三一四

一

何事なにごとも神かみに任まかせて身みの幸さちを  
賜たまへかしとは祈いのりまつらじ。

二

わが負おへる罪つみの重荷おもにを取とりてよと  
祈いのらずとても守まもらせたまへる。

三

さりながら祈りにまさる寶なし  
夢な迷ひそ祈りの道を。

四

我神は麻柱まつる魂を  
花咲く道に進ませ玉ふ。

五

紅の花咲き薫る鬼薊  
手折らむとする風流男もなし。

六

鬼おに薊あざみ花はな咲さかずともわがき教主は  
床とこのかざ飾りと愛めでさせ玉たまふ。

七

皇すめ神かみのめぐみ惠の露つゆはくま隈もなく  
百もものくさき草木をうるほ潤はせ玉たまふ。

八

皇すめ神かみのうつ珍の光ひかりにみちび導きて  
暗くらきこころ心を照てらさせ玉たまへ。

九

足<sup>あし</sup>曳<sup>びき</sup>の山<sup>やま</sup>にも野<sup>の</sup>にも皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の  
惠<sup>めぐみ</sup>の露<sup>つゆ</sup>は濺<sup>そそ</sup>ぎ充<sup>み</sup>ちぬる。

一〇

夜<sup>よ</sup>の初<sup>はじ</sup>めさやかに知<sup>し</sup>らす曙<sup>あけ</sup>の星<sup>ほし</sup>の  
清<sup>きよ</sup>き姿<sup>すがた</sup>を仰<sup>あふ</sup>ぐ嬉<sup>うれ</sup>しさ。

一一

現<sup>うつし</sup>世<sup>よ</sup>は暮<sup>く</sup>れやすけれど天<sup>あま</sup>津<sup>つ</sup>國<sup>くに</sup>は  
空<sup>そら</sup>澄<sup>す</sup>み渡<sup>わた</sup>る東<sup>しの</sup>雲<sup>のめ</sup>に似<sup>に</sup>たり。

一二

静しづかなる朝あしたの景色けしき眺ながむれば  
神かみの御國みくにの俣しのばるかな。

第三一五

一

神かみによりしわが言ことの葉はも爲なす業わざも  
皆みな喜びよろこびのおとづれとなる。

二

襲おそひ來くる醜しこの仇あだ草くさ薙なぎ拂はらひ

神かみの御前みまへに勝鬨かちどきあげむ。

三

許こ々こ多た久くの妬ねたみ汚けがれを打うち棄すてて  
誠まことの道みちに進すすみ入いりてむ。

四

神かみの代よの現あらはれ來きたる日ひを待またむ  
嚴いづの御言みこと葉力はちからとなして。

第三一六

一

麻柱あななひの救すくひの道みちを遠をち近こちに  
神かみに習ならひて開ひらかせたまへ。

二

許こ々こ多た久くの罪つみや穢けがれに沈しづみたる  
世よ人びとを救すくふ瑞みづの大神おほかみ。

三

たのもしき家いへに波風なみかぜ起おこすものは  
皆みな悉ごとく罪つみの鬼おになり。

四

いと猛く強き悪魔に勝鬨を  
あけて進まむ神のまにまに。

五

御恵の鎧甲を身につけて  
曲言向くる神の御使。

六

永久に荒び騒ぎし戦ひの  
日も暮れ果てて朝日輝よふ。

七

矢叫びの聲は御歌と變りけり  
瑞の御靈の清き御名にて。

第三一七

一

試鍊に勝つ度毎に強くならむ  
惠の鎧身にまとひつつ。

二

攻め来る仇を雄々しく防ぎつつ  
平和の國に進ませ玉へ。

三

御恵をたえず求むる信徒の  
心に宿る嚴の大神。

四

ねぢけたる心の友に交らで  
神の教を友とし敬へ。

五

眞心の矛たづさへて道の爲  
進む行く手にさやる枉なし。

六

皇神に習ふ武士一度は  
倒れ伏すともやがて起たなむ。

七

神軍に従ひ勇み戦へば  
木の葉の如く仇は散り行く。

第三一八

一

春はるの花はなよ蝶てふよと愛めでしいとし子こを  
後あとに残のこして上のぼる苦くるしさ。

二

たのみなき浮世うきよの旅たびにさまよひて  
花はな散ちる暮くれに會あふは悲かなしき。

三

心こころゆくばかり御前みまへに平伏ひれふして  
わが子この爲ために幸さちを祈いのりぬ。

四

大空おほぞらをひた翔かけり行く雁かりがねに  
わが子この便たより聞きかまほしかな。

五

大空おほぞらの天津御國あまつみくにに上のぼりたる  
子こは如何いかにぞと歎なげき悲かなしむ。

六

皇神すめかみの御使みつかひと見みしいとし子この  
今いまは夜よるなき國くにに上のぼりぬ。

七

現世うつしよの父ちちと母ははとを後あとにして  
彌いや永久とこしへの親おやに會あひけむ。

八

雪ゆきの朝雨あしたあめの夕ゆふべに思おもふかな  
逝ゆきしわが子この魂たまや如何いかにと。

第三一九

一

夜よる深ふかき獄ひと舎やに眠ねむる瑞みづ御み靈たまを  
照てらし玉たまへる嚴いづの大神おほかみ。

二

萬よろづよ代よの齡よはひを保たもつ御み使つかひに  
鐵くろがねの門かども安やすく開ひらけり。

三

くろがね  
鐵の垣根の内に鬼はなし  
そと  
外にさまよふ人鬼多きも。

四

よく  
欲の川に溺れ苦しむ友垣を  
かほ  
おほ  
くる  
ともがき  
みづ  
瑞の御國へ上らせ玉へ。  
みくに  
のぼ  
たま

五

おそ  
恐ろしき獄舎の夢も覺めにけり  
ひとや  
ゆめ  
さ  
ひので  
日出の神の光仰ぎて。  
かみ  
ひかりあふ

第三二〇

一

誰たれも彼かも千ち代よの榮さか光えを望のぞまざる  
されど波なみ風かぜ荒あき世よなれば。

二

足あしはなえ手ては折をるとも皇すめ神かみの  
めぐみの光ひかりわが身みを守まもらす。

三

永久とこしへの誠まことの親おやにまみゆべき  
五み六ろ七くの御世みよは近ちかづきにけり。

四

世よの中なかにいとも弱よわきは人ひとにこそ  
神かみにすがりて神力みちからを得えよ。

五

わが弱よわき心こころをつなぐ鎖くさりまで  
断たち切きらむとする枉まが忌ゆ々ゆしかり。

第三二一

一

焦こげやすき黄よ泉みぢを走はる火ひの車くるま  
乗のり行ゆく人ひとの聲こゑ悲かなしかり。

二

御み教をしへの舟ふねに棹さし罪つみの海うみに  
溺おぼる人ひとを救すくふ御み使つかひ。

三

荒波あらなみに溺おぼる友ともの聲こゑ聞きけば  
投なげむと思おもふ救すくひの綱つなを。

四

罪つみの海うみに浮うきつ沈しづみつ叫さけぶ友ともを  
救すくふは誠まことの人ひとなりにけり。

五

常暗とこやみの夜よは來きたるとも御光みひかりの  
充みち足たらひたる神かみは助たすくる。

六

嚴御靈投げさせ玉ふ御綱こそ  
生命をつなぐ力なりけり。

（大正一二・五・一一 舊三・二六 於龍宮館 隆光録）

第八章 神生（一五八三）

第三二二

—

貧しくば人に捨てられさげしまる

力ちからとなるは神かみばかりなり。

二

花はなさへも散ちりては杣そま人に倒たふされて  
賤しづが伏ふせ家の薪たきぎとぞなる。

三

玉たまの緒をの命いのちは草くさにおく露つゆの  
其その果は敢かなさを知しらぬ人ひとあり。

四

千年まで此世に命あるものと  
醜のたぶれが罪造るなり。

五

父は去り母又逝きて淋しさの  
枕に通ふ神の御光。

六

唯神の愛の袂にすぎるより  
わが身慰むものはあるまじ。

七

苦しみの憂世を渡る月日さへ  
花咲く春を待つが楽しき。

第三二三

一

惟神結び合うたる友垣の  
其の親しみは同胞にまさる。

二

信徒の睦び親しむ有様は

天津御國の天人に似たり。

三

村肝の心睦べば言靈も  
一つになりて大前に祈る。

四

皇神の道に集ひし友垣の  
其交はりは永久變らず。

第三二四

一

皇神すめかみの道歩みちあゆみ行ゆく友垣ともがきは  
同胞はらからよりも樂たのしかりけり。

二

恐おそれをもまた希望のぞみをもまごころを  
籠こめて祈いのらむ神かみの御前みまへに。

三

妹いもと背せが互たがひに忍しのぶ苦くるしみも  
神かみの恵めぐみに消きえ失うせて行ゆく。

四

よき友ともに別わかるる時ときはつらけれど  
又また遇あふ日ひをば祈いのり待まつなり。

五

罪つみ憂うれひなき國くにの永久とこしへの  
靈たまの榮さかえを祈いのりつつ經ふる。

第三二五

一

村<sup>むら</sup>肝<sup>きも</sup>の心<sup>こころ</sup>一つに睦<sup>むつ</sup>び合<sup>あ</sup>ひて  
神<sup>かみ</sup>の御前<sup>みまへ</sup>に仕<sup>つか</sup>ふる信<sup>まめ</sup>徒<sup>ひと</sup>。

二

争<sup>あらし</sup>ひし醜<sup>しこ</sup>の荒<sup>すさ</sup>びは跡<sup>あと</sup>もなく  
消<sup>き</sup>え失<sup>う</sup>せにけり神<sup>かみ</sup>の光<sup>ひかり</sup>に。

三

瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>自<sup>おの</sup>が頭<sup>かしら</sup>に頂<sup>いただ</sup>きて  
醜<sup>しこ</sup>の戦<sup>たたか</sup>ひ終<sup>をは</sup>るまで進<sup>すす</sup>め。

四

村<sup>むら</sup>肝<sup>きも</sup>の心<sup>こころ</sup>勇<sup>いさ</sup>みに勇<sup>いさ</sup>みつつ  
神<sup>かみ</sup>の言<sup>ことば</sup>葉<sup>は</sup>に進<sup>すす</sup>む益<sup>ます</sup>良<sup>す</sup>夫<sup>ら</sup>。

五

皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の珍<sup>うづ</sup>の御<sup>み</sup>門<sup>かど</sup>に勝<sup>かち</sup>鬨<sup>どき</sup>を  
あぐる時<sup>とき</sup>まで進<sup>すす</sup>み往<sup>ゆ</sup>かまし。

第三二六

一

病<sup>や</sup>みふせる床<sup>とこ</sup>にも高<sup>たか</sup>き惠<sup>めぐみ</sup>あり

千座ちくらを負おひし神かみの御み稜いづ威づに。

二

瑞みづ御み靈たま其その神かむ業わざを思おもひ見みれば  
痛いたみ悩なやみも消きえ失うするなり。

三

如い何かならむ涙なみだの中なかに沈しづむとも  
夢ゆめな忘わすれそ神かみのめぐみを。

四

いと清きよき神かみの下しも僕へと仕つかへむと  
思おもへば百ももの苦くるしみ來きたる。

五

苦くるしみの時ときも喜よろこびの榮さかえあり  
如何いかで忘わすれむ神かみの惠めぐみを。

六

わが身み魂たま焼やく許ばかりなる苦くるしみも  
千ち座くら思おもへばいと涼すずしき。

第三二七

一

皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の力<sup>ちから</sup>に癒<sup>いや</sup>し盡<sup>つく</sup>されぬ  
歎<sup>なげ</sup>き悲<sup>かな</sup>しみ地<sup>ち</sup>の上<sup>うへ</sup>になし。

二

味<sup>あぢ</sup>氣<sup>き</sup>なき身<sup>み</sup>の宿<sup>すく</sup>縁<sup>せ</sup>をば悔<sup>く</sup>むまじ  
神<sup>かみ</sup>の此<sup>この</sup>世<sup>よ</sup>に在<sup>いま</sup>す限<sup>かぎ</sup>りは。

三

永とこ久はの命いのちの水みづは湧わき出いでぬ  
瑞みづの御み靈たまの清きよき勳いさをに。

第三二八

一

病いたづきの身みにしあれども天あまつ津つく國くに  
思おもひ出いだせば頼たのもしきかな。

二

わが胸むねに嘯ささやきたまふ愛あいの聲こゑは

いと懐なつかしく頼たのもしきかも。

三

世よの人ひとを遍あまねく救すくひ助たすけむと  
宣のらせたまひし尊たふとき神かみはや。

四

皇すめかみ神かみの教をしへを固かたく守まもる身みは  
昨きのふ日も今けふ日も樂たのしかりけり。

第三二九

一

身みに餘あまる其その悲かなしみは圓まる山やまの  
峰みねの麓ふもとに埋うづめて進すすまへ。

二

逸いち早はやく惱なやみ苦くるしみ打うちすてて  
來きたれ信まめ徒ひと高たか天あま原はらに。

三

煩わづらひの雲くも霧きり拂はらひ救すくひます  
神かみは高たか天あま原はらに現あれましにけり。

四

村<sup>むら</sup>肝<sup>ぎも</sup>の心<sup>こころ</sup>の闇<sup>やみ</sup>も晴<sup>は</sup>れぬらむ  
綾<sup>あや</sup>の高<sup>た</sup>天<sup>か</sup>原<sup>ま</sup>に參<sup>まゐ</sup>る身<sup>み</sup>なれば。

五

御<sup>み</sup>惠<sup>めぐみ</sup>を身<sup>み</sup>に受<sup>う</sup>けし人<sup>ひと</sup>は逸<sup>いちはや</sup>早く  
神<sup>かみ</sup>の勳<sup>いさを</sup>を世<sup>よ</sup>に傳<sup>つた</sup>へ行<sup>ゆ</sup>け。

六

嚴<sup>いづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>の御<sup>み</sup>勳<sup>いさを</sup>を  
まだ悟<sup>さと</sup>り得<sup>え</sup>ぬ人<sup>ひと</sup>の多<sup>おほ</sup>かり。

第三三〇

一

苦しみの中にも神の恵あり  
悩みなき身を幸とな思ひそ。

二

憂き涙神の恵によるこびの  
笑とかはるは有難きかな。

三

憂うきなやみひとよ一夜の夢ゆめと過すぎ去さりて  
旭あさひかがやく喜よろこびとなる。

四

悲かなしみはよしや吾胸わがむねをやぶるとも  
こころ挫くじくな御心みこころなれば。

五

苦くるしみも涙なみだももれず數かずへたて  
瑞みづの大神おほかみ酬むくいたまはむ。

第三三一

一

何<sup>なに</sup>人<sup>びと</sup>も此<sup>この</sup>世<sup>よ</sup>にしばし生<sup>おひ</sup>立<sup>た</sup>ちて  
やがて眠<sup>ねむ</sup>らむ奥<sup>おく</sup>城<sup>つき</sup>静<sup>しづか</sup>に。

二

皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の法<sup>のり</sup>に身<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>を清<sup>きよ</sup>めつつ  
神<sup>みく</sup>國<sup>くに</sup>に至<sup>いた</sup>る準<sup>そ</sup>備<sup>なへ</sup>せよかし。

三

今いま暫しばし嵐あらし吹ふけどもやがて又また  
花はな咲さき匂におふ春はるや來きたらむ。

四

雨あめと降ふる涙なみだもやがて拭ぬぐはれむ  
朝あさ日ひかかやく御み代よ近ちかづきて。

五

更かう生せい主しゆ再ふたび下くだりて現うつ世しよを  
平や和すく治をさむる時とき近ちかづきぬ。

（大正一二・五・一一 舊三・二六 於龍宮館 明子録）

第九章 神子（一五八四）

第三三二

一

幸<sup>さち</sup>薄<sup>うす</sup>く果<sup>は</sup>敢<sup>か</sup>なき夢<sup>ゆめ</sup>の浮<sup>うき</sup>世<sup>よ</sup>にも  
神<sup>かみ</sup>としあれば樂<sup>たの</sup>しかりけり。

二

風かぜ荒すさみ雨あめしきりなる闇やみの夜よも  
如何いかで怖おそれむ神かみとしあれば。

三

外そとよりは諸ももの誘いざな惑な内うちに罪つみ  
汚けがれの絶たえぬ此この世よなりけり。

四

人ひとの世よはほほ笑ゑむ目めにも涙なみだあり  
泣ないて樂たのしき神かみの御み教しへ。

五

恐<sup>おそ</sup>ろしき死<sup>し</sup>出<sup>で</sup>の山<sup>やま</sup>路<sup>ぢ</sup>も何<sup>なに</sup>かあらむ  
教<sup>き</sup>主<sup>み</sup>も一<sup>ひと</sup>度<sup>たび</sup>いでまさむ道<sup>みち</sup>。

六

皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の珍<sup>うづ</sup>の御<sup>み</sup>聲<sup>こゑ</sup>に眼<sup>め</sup>を醒<sup>さま</sup>せ  
ねむりの深<sup>ふか</sup>き罪<sup>つみ</sup>の闇<sup>ねや</sup>より。

七

我<sup>わが</sup>神<sup>かみ</sup>に遠<sup>とほ</sup>く放<sup>はな</sup>れて現<sup>うつ</sup>身<sup>そみ</sup>の  
憂<sup>うき</sup>世<sup>よ</sup>に住<sup>す</sup>めば苦<sup>くる</sup>しかるらむ。

八

幸さち流ながれ喜よろこび溢あふるるヨルダンの  
水みづこそ瑞みづの御みたま靈たまなりけり。

九

愛あい善ぜんの徳とくにみたされ圓まど滿やかに  
暮くらすは天津あまつく國くに人びとなりけり。

一〇

花はなのごと晴はれて曇くもらぬわが教き主みの  
瑞みづのみもとの頼たのもしきかな。

第三三三

一

神かみの手てにねむる正ただしき信まめ徒ひとの  
いまはの面おもの美うるはしきかな。

二

引ひく汐しほの静しづかなるごと逝ゆく人ひとの  
面おもざし見みれば神かみと俱ともにあり。

三

生死いきしにの恐れおそもしらぬ天津國あまつくにの  
その長閑のどかさは春はるの花はな園その。

四

光ひかり闇やみ行き交かふ世よをば後あとにして  
天津御國あまつみにに昇のぼるは安やすけし。

五

天地あめつちの神かみも祝ことほぎたまふらむ  
信徒まめひと達の最後いまはの床ゆかしさを。

第三三四

一

春雨はるさめのそぼふる梢うれに菱しほみたる  
花はなの姿すがたのいとど床ゆかしき。

二

春はるの夜よの短みじかき夢ゆめにも似にたるかな  
露つゆの命いのちの散ちるを思おもへば。

三

秋風あきかぜに揺ゆらるる萩はぎの露つゆのごと  
おちて消きえ行く人ひとの玉たまの緒を。

四

花はなと匂におひ玉たまと榮さかえし人ひとの身みの  
消きゆるを見みれば果敢はかなかりけり。

五

山やまに野のに河かはの畔ほとりに祈いのりてし  
昔むかしの友とものいとど戀こひしき。

六

奥津城おくつぎに淋さびしく眠ねむるわが友ともは  
天津御國あまつみくにに榮さかえますなり。

七

死し出での山調やましらべの川かはも手てを曳ひいて  
導みちびきたまはむ瑞みづの大神おほかみ。

第三三五

一

人ひとはただ此世このよの命いのちのみならば

如何いかに悲かなしきものところぞ知しれ。

二

身みはたとへ朽くち果はつるとも靈たま魂しひは  
天津あまつ御み國くにに永と久はに榮さかえむ。

三

死しの神かみも襲おそひ來きたらぬ神かみの國くには  
わが玉たまの緒をの住す所みかなりけり。

四

妹いもと背せの契ちぎりも永と久はに動うごかざる  
神かみの國くにこそ樂たのしかるらめ。

五

村むら肝きもの心こころ直すくなる人ひとの家いへは  
夜よるなき國くにの園そのに立たちおり。

六

喜よろこびの絶たえせぬ歌うたは神かみ國くにの  
御み殿とのの門かどに非とき時じくひびくも。

七

朝あさ日ひ影かげに消きえしと見みえし月つき星ほしは  
消きえしにあらで隠かくれたるなり。

第三三六

一

皇すめ神かみの永と久はにまします故ふる郷さとに  
歸かへり行ゆく身みは死しせしにあらず。

二

涙なみだをば絞しぼる眼まなこは閉とづれども

榮さかえに醒さむるをなど死しと云いはむ。

三

世よの中なかの醜しこの羈きづ絆なをときはなし  
天あま翔かけり往ゆく天あは晴れ靈たま魂しひ。

四

皇すめ神かみの嚴いづの言こと葉はに招まねかれし  
身みは永とこ久しへに天あめに榮さかゆく。

第三三七

一

親おやと子こを後あとに残のこして死まかる身みも  
いと安やすらけし御みくに國におも思へば。

二

何なに事ことも神かみの御みむね旨ねと仰あふぎつ  
空むなしき別わかれを歎なげかざらまし。

三

永とこ久とはに滅ほろびず朽くちぬ神かみ國くにの  
惠めぐみ思おもへば頼たのもしきかな。

四

わが命神いのちかみに受うけつつつ又また神かみに  
召めさるも惠めぐみの御旨みむねと仰あふがむ。

第三三八

一

醜雲しこぐもの四方よもに閉とざせる世よを捨すてて  
愛兒いとしこ逝ゆきぬ天津御國あまつみくにへ。

二

皇神すめかみの愛あいの燈火ともしびきらめきて  
愛兒いとしごの路みち照てらさせたまひぬ。

三

愛兒いとしごは天津あまつ乙女をとめの懷ふところに  
笑ゑみつつ永久とほの花園はなぞのに往ゆきぬ。

四

天使みつかひの歌うたや小琴をことの音ねの響ひびきに  
慰なぐさめたまふ逝ゆきし愛兒まなごを。

五

逝ゆきし子こは天津あまつ乙女をとめに抱いだかれて  
夜よるなき國くにに生おひ立ちて行ゆく。

六

美うるはしき天津あまつ乙女をとめに抱いだかるる  
其その喜よろこびは如何いかに深ふかけむ。

七

御み心こころのままになりしか愛いと兒しごは  
夢ゆめのごとくに現うつ世しよ去さりぬ。

八

皇神すめかみは生命いのちの元もとにましまさば  
與あたへたまはむ愛兒いとしごの命いのち。

第三三九

一

懷なつかしくいと慕したはしく思おもふかな  
天津御國あまつみくににゆけるわが子こを。

二

父母ちちははを後あとに見捨みすててわが御子みこは

夜なき國に昇りけるかな。

三

火に焼けず水に流れぬ天津國の  
永久の家路に住むか愛兒。

四

現世に老いて艱める吾さへも  
若きに歸らむ神の國には。

五

行く先は唯白露の命なれど  
神としあらば永久に榮えむ。

六

思はざる嵐に遇ひて愛兒は  
夜なき國に歸りけるかな。

七

死の川や暗の山路を打越えて  
神の御國にわが子昇りし。

八

浪なみの上うへ救すくひの船ふねをさしむけて  
拾ひろはせたまへ愛いと兒しこの靈たまを。

第三四〇

一

春はるの花はな夢ゆめと去さり往ゆき紅もみぢ葉ぢ散ちらす  
風かぜも身みにしむ人ひとの果は敢かなさ。

二

花はなを愛めで月つきを賞ほめつつつゑらぎてし

友ともに甲か斐ひなく今は別いまわかれぬ。

三

わが友ともの昇のぼりし後あとは遙はるけしと  
思おもひし空そらも近ちかくなりけり。

四

天地あめつちは離はなれ居をれども皇すめかみ神かみを  
稱たたへまつるに隔へだてこそなき。

第三四一

一

夜<sup>よ</sup>も晝<sup>ひる</sup>も天津<sup>あまつ</sup>御<sup>み</sup>國<sup>くに</sup>の幸<sup>さち</sup>を  
胸<sup>むね</sup>にうかべて送<sup>おく</sup>る樂<sup>たの</sup>しさ。

二

天<sup>あまつ</sup>使<sup>つかひ</sup>稱<sup>たた</sup>への歌<sup>うた</sup>は海<sup>うみ</sup>山<sup>やま</sup>に  
みち溢<sup>あふ</sup>れけり夜<sup>よ</sup>も日<sup>ひ</sup>もたえず。

三

慰<sup>なぐさ</sup>めの珍<sup>うづ</sup>の御<sup>み</sup>聲<sup>こゑ</sup>は故<sup>ふる</sup>郷<sup>さと</sup>に  
旅<sup>たび</sup>立つ人<sup>ひと</sup>の力<sup>ちから</sup>とぞなる。

四

言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>の祝<sup>のり</sup>詞<sup>と</sup>の聲<sup>こゑ</sup>は天地<sup>あめつち</sup>に  
響<sup>ひび</sup>きて靈<sup>たま</sup>魂<sup>ま</sup>は神<sup>みく</sup>國<sup>くに</sup>に榮<sup>さか</sup>えつ。

五

太<sup>ふ</sup>祝<sup>との</sup>詞<sup>り</sup>嚴<sup>といづ</sup>の言<sup>こと</sup>葉<sup>は</sup>に守<sup>まも</sup>られて  
安<sup>やす</sup>く御<sup>み</sup>許<sup>もと</sup>に行<sup>ゆ</sup>くぞ嬉<sup>うれ</sup>しき。

六

瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>惠<sup>めぐみ</sup>の聲<sup>こゑ</sup>を聞<sup>き</sup>く時<sup>とき</sup>は  
嶮<sup>け</sup>しき山<sup>やま</sup>路<sup>ぢ</sup>もやすく渡<sup>わた</sup>らむ。

七

疲<sup>つか</sup>れたる人の靈<sup>みたま</sup>魂<sup>たま</sup>もわが教<sup>き</sup>主<sup>み</sup>の  
聲<sup>こゑ</sup>をしるべに喜<sup>よろこ</sup>び進<sup>すす</sup>まむ。

八

天<sup>みつ</sup>使<sup>かひ</sup>の清<sup>きよ</sup>き御<sup>み</sup>歌<sup>うた</sup>を聞<sup>き</sup>く時<sup>とき</sup>は  
盡<sup>つ</sup>きぬ希<sup>のぞ</sup>望<sup>み</sup>の胸<sup>むね</sup>に溢<sup>あふ</sup>るる。

九

暗<sup>くら</sup>き夜<sup>よ</sup>の雲<sup>くも</sup>晴<sup>は</sup>れ渡<sup>わた</sup>り天<sup>あま</sup>津<sup>つ</sup>日<sup>ひ</sup>の  
輝<sup>かが</sup>く日<sup>ひ</sup>まで忍<sup>しの</sup>ばせたまへ。

(大正一二・五・一一 舊三・二六 於教主殿 明子録)

第一〇章 神宮〔一五八五〕

第三四二

一

皇神すめかみのいづの宮居みやゐは喜びよろこの  
眞玉まだま白玉しらたまもちて造つくれる。

二

世の人の知らぬ樂しみ輝く榮え  
神の御國は永久に充ちぬる。

三

天津神國貴の宮居に集れる  
道の司の面かがやけり。

四

道のため生命ささげしあかし人の  
伊寄り集へる天津神國。

五

白銀しろがねの衣ころもまとひしつはものは  
神かみの御國みくにの門かどを守まもれる。

六

天津國あまつくにのうたげの席せきに招まねかれて  
神かみの御稜威みいづを夜よる晝ひるうたふ。

七

天津國あまつくに都みやこのまちに立たち竝ならぶ  
珍うづの住家すみかは永とこ久しへに榮さかゆ。

八

夜よるもなく冬ふゆなき國くににわが魂たまを  
昇のぼらせ玉たまへ御心みこころのままに。

第三四三

一

うつし世よは破やぶれ亂みだる事ことあるも  
永と久はに動うごかぬ神かみの坐ます國くに。

二

言こと靈たまの天照國あまてるくには山海やまうみも

草木も君の御稜威をうたふ。

三

大空を包みかくせし村雲も  
聖の君の御水火に晴れつつ。

四

八重霞伊行きはばかり散り失せぬ  
我日の御子のいづの伊吹に。

五

日ひのもと下のみ御たて楯たとなりしつ軍は卒ものを  
稱たへたたまひぬ日ひのみ御こ子のこ聲こゑ。

六

鶴つる巢すぐふ千ち代よ田だのもり森に天あま津つ日ひの  
影かげさしそへて萬よろづよ代をてらす。

七

大おほ君きみのめぐ惠みのつゆ露にうるほひて  
四よ方ものきぐさ木も草も彌いや茂しげるなり。

八

平たいけく心こ安ららけく住すむ月つき日ひ  
はみや三ち千と年せの君きみの御み惠めぐみ。

### 第三四四

一

大おほ君きみの御み代よ知し食ろす神か國くには  
天あま津つ御み國くにの姿すがたなりけり。

二

心こ安らく國くに民たみこぞり榮さえ行ゆくも

天津あまつ日ひの御み子こ知し食ろす世しめは。

三

四よ方もの國くに浪なみ立たち騒さわぐ世よの中なかに  
君きみの御み代よこそ静しづかなりけり。

四

諸もろ々もろの醜しこの嵐あらしの吹ふき來くとも  
神かみの御み國くには永と久はに静しづけし。

五

大君おほきみの光ひかりをあびて心安うらやすく  
世よを渡わたるこそ樂たのしき國民くにたみ。

六

日ひの御子みこの御祖みおやの坐います天津國あまつくには  
百姓おほみたらの永と久はの住處すみかぞ。

第三四五

一

日ひの御子みこの天降あもりましたる日ひの國くには

天津神國の姿なりけり。

二

小雲川の水底深く影うつす  
桶伏山は神の御在所。

三

天地と共に搖ぎなき  
日本は御子の高御座なり。

四

神かみの守もる我わが日ひの下もとはもろもろの  
なやみくるしみ知らぬ眞ま秀ほ良ら場ば。

五

野のに山やまに千ち歳とせを祝いはふ聲こゑすなり  
天あま津つ日ひの御み子こ知しらす御み國くには。

六

現うつし世よはかりの浮うき世よと稱とへつつ  
目めに見みぬ國くにのみ慕したふあはれさ。

第三四六

一

月つきも日ひも流ながれて變かはる世よの中なかに  
天津日嗣あまつひつぎの道みちはとこしへ。

二

皇神すめかみの貴うづの教をしへにヨルダンの  
あなたあなたの岸きしに渡わたる信徒まめひと。

三

現<sup>うつ</sup>し世<sup>よ</sup>も天<sup>あま</sup>津<sup>つ</sup>御<sup>み</sup>國<sup>くに</sup>もおしなべて  
神<sup>かみ</sup>の惠<sup>めぐみ</sup>の花<sup>はな</sup>は匂<sup>にお</sup>へる。

四

身<sup>からだ</sup>體<sup>たま</sup>はよし果<sup>は</sup>つるとも天<sup>あま</sup>津<sup>つ</sup>國<sup>くに</sup>の  
榮<sup>さか</sup>えの園<sup>その</sup>に永<sup>と</sup>久<sup>は</sup>に榮<sup>さか</sup>えむ。

第三四七

一

清<sup>きよ</sup>き身<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>の歡<sup>よろこ</sup>ぎ住<sup>す</sup>む

神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>國<sup>くに</sup>は永<sup>とこ</sup>久<sup>しへ</sup>の

晴<sup>は</sup>れて長<sup>の</sup>閑<sup>ど</sup>な春<sup>は</sup>の園<sup>その</sup>  
彼<sup>あ</sup>方<sup>なた</sup>此<sup>こ</sup>方<sup>なた</sup>に咲<sup>さ</sup>き匂<sup>にほ</sup>ひ  
黄<sup>こ</sup>金<sup>が</sup>の野<sup>の</sup>邊<sup>べ</sup>を潤<sup>うる</sup>して

何<sup>なん</sup>のなやみも白<sup>しろ</sup>梅<sup>うめ</sup>の  
生<sup>い</sup>命<sup>のち</sup>の清<sup>しみ</sup>水<sup>づ</sup>は限<sup>かぎ</sup>りなく  
四<sup>よ</sup>方<sup>も</sup>の景<sup>け</sup>色<sup>しき</sup>もいと清<sup>きよ</sup>し。

二

神<sup>か</sup>の恵<sup>めぐ</sup>みにヨルダンの  
川<sup>かは</sup>の流<sup>なが</sup>れは波<sup>なみ</sup>立<sup>た</sup>たず  
いとおだやかに見<sup>み</sup>えぬれど  
尚<sup>なほ</sup>も岸<sup>きし</sup>邊<sup>べ</sup>に落<sup>おち</sup>惑<sup>まど</sup>ひ  
渡<sup>わた</sup>りかねつつ罪<sup>つみ</sup>人<sup>びと</sup>の  
立<sup>た</sup>ちて眺<sup>なが</sup>むる憐<sup>あは</sup>れさよ  
救<sup>すく</sup>はせ玉<sup>たま</sup>へ瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>。

三

天<sup>てん</sup>教<sup>けう</sup>山<sup>ざん</sup>の高<sup>たか</sup>嶺<sup>ね</sup>より

木<sup>この</sup>花<sup>は</sup>咲<sup>な</sup>耶<sup>さく</sup>姫<sup>やひめ</sup>のごと

天津神國の有様を  
波立ち狂ふ比沼眞名井  
神の守りに勇み立ち  
守らせ玉へ嚴御靈。  
樂しく望み眺むれば  
進み神國に渡り行かむ  
岸に渡るもいと安き

第三四八

一

ヨルダンの川の岸邊に暫し立ちて  
神の御國を仰ぐ樂しさ。

二

岩いはばしる川かはの流ながれも何なにかあらむ  
巖いづの御み靈たまの守まもりありせば。

三

水みづ清きよく野の山やまは青あをく花はな薰かをり  
乳ちちは流ながれぬ天あま津つ神かみ國くに。

四

美うるはしき神かみのあれます元もと津つ國くには  
野のにも山やまにも結むす實ゆた豊たけし。

五

打<sup>うち</sup>仰<sup>あふ</sup>ぐ限<sup>かぎ</sup>り廣<sup>ひろ</sup>野<sup>の</sup>に永<sup>とこ</sup>久<sup>しへ</sup>に  
天<sup>あま</sup>津<sup>つ</sup>日<sup>ひ</sup>影<sup>かげ</sup>は照<sup>て</sup>り輝<sup>かが</sup>けり。

六

瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>此<sup>この</sup>珍<sup>うづ</sup>國<sup>くに</sup>を諸<sup>もろ</sup>人<sup>びと</sup>に  
祖<sup>そ</sup>國<sup>こく</sup>と切<sup>せつ</sup>に教<sup>をし</sup>へ給<sup>たま</sup>ひぬ。

七

美<sup>う</sup>はしき神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>國<sup>くに</sup>にまひ上<sup>のほ</sup>り  
また永<sup>とこ</sup>久<sup>しへ</sup>の勤<sup>つと</sup>め勵<sup>はげ</sup>まむ。

八

ヨルダンの川波如何に高くとも  
神の恵に安く渡らむ。

第三四九

一

塵の世を深くおほへる雲間より  
天津光はかがやきにけり。

二

日の光打仰ぎつつ人々の

喜ぶ聲は神園に響く。

三

わが魂を待てるわが友と會ふ時は  
別れの嘆き永久にあるなし。

四

雨と降る涙しのびて大空に  
朝日さすまで祈りてぞ待つ。

五

死しの暗やみの假たとへ令わがわが身みを吞のむとても  
やがては覺さめむ神かみの光ひかりに。

六

永とこしへ久への魂たまの命いのちを與あたへむと  
待またせ給たまひぬ彼かなた方の岸きしに。

七

わが魂たまを招まねかせ給たまふ教き主みの聲こゑの  
聞きこえし時ときや樂たのしかるらむ。

第三五〇

一

天津神國の御榮光に  
 やがては入りて友垣と  
 會ふ時こそは村肝の  
 心の空に暗もなし  
 災多き現し世の  
 醜の戦の雲晴れて  
 朝日の豊榮昇ります  
 珍の寶座を仰ぐなり。

二

御稜威輝く皇神の  
 御許にやがてまひ上り  
 朝な夕なに限りなく  
 受けし恵を思ひ出でて  
 いとも樂しき聲合せ  
 謠ひ舞ひつつ瑞御靈

救すくひの御み名なを稱たふべし。

三

憂うれひなやみも夜よも冬ふゆも  
神かみの御み園そのに住すみきりて  
知しらぬ幸さちをば蒙かからむ  
統すべ知しる食しめす神かみ國くには

涙なみだの雨あめも露つゆ知らぬ  
世よの人ひと々の夢ゆめにだも  
嚴いづの御み靈たまや瑞みづ御み靈たま  
平やす安きと榮さか光え限かぎりなし。

第三五一

一

暗やみの夜よのとばり漸やっやく開ひらかれて  
天津あまつほの曙あけぼの現あらはれにけり。

二

イスラエル清きよき流ながれは天津あまつ日ひの  
光ひかりに照てりて輝かがやきにけり。

三

巖いはほなす神かみの御み身まより湧わき出いづる  
生命いのちの水みづの流ながれとこしへ。

四

静しづかなる海うみの面おもては五十いす鈴ず川が  
清きよき流ながれの集あつまりと知しれ。

五

白しろ妙たへの清きよき衣ころもをまとひたる  
神かみの使つかひの言ことの葉はを聞きけ。

六

神み使つかひと共ともに佇たたずみヨルダンの  
清きよき流ながれに魂たまを浸ひたさむ。

(大正一二・五・一二 舊三・二七 於龍宮館 隆光録)

第三篇 四尾よつをの嶺みね

第一章 神勳しんくん〔一五八六〕

第三五二

一

善よき友ともの打うち集つどひつつ皇神すめかみの

勳いさをたたたるいさこやま聲勇こゑしも。

二

喜よろこびよてい生命いのちの主きみの御前おんまへに  
伊い寄より集つどへるかみ神人びとの群むれ。

三

疑うたがはずこころ心迷まよはずかみためすすめかし  
神かみの大おほ路ほぢにとく進すすめかし。

四

限りなき人の靈魂の楽しみは  
神の御園に比ぶるものなし。

五

皇神の道によりての交はりは  
親しみ長くうつる事なし。

六

生みの子のいやつきつきに相傳へ  
神の大道を守りゆくべし。

第三五三

一

皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>と共<sup>むた</sup>永<sup>とこ</sup>久<sup>しへ</sup>に限<sup>かぎ</sup>りなき  
珍<sup>うづ</sup>の生<sup>いの</sup>命<sup>のち</sup>の榮<sup>さか</sup>え嬉<sup>うれ</sup>しき。

二

賤<sup>しづ</sup>の身<sup>み</sup>も清<sup>きよ</sup>き生<sup>いの</sup>命<sup>のち</sup>を永<sup>とこ</sup>久<sup>しへ</sup>に  
與<sup>あた</sup>へたまひし尊<sup>たふと</sup>き神<sup>かみ</sup>はも。

三

荒野あらの往ゆく淋さびしき旅たびも夜よる毎ごとに  
近ちかづきにけり元もとのわが家やに。

四

霞かすみの奥おく雲くもの彼あなた方に皇すめ神かみの  
黄金こがねの御み門かどはえ初そめにけり。

五

永とこ久しへの珍うづの命いのちをたまひてし  
瑞みづの御み靈たまの惠めぐみかしこし。

六

今<sup>いま</sup>ぞ知る<sup>し</sup>嚴<sup>いづ</sup>の御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>の御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>の御<sup>おん</sup>勳<sup>いさを</sup>  
瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>の深<sup>ふか</sup>き惠<sup>めぐみ</sup>を。

### 第三五四

一

人<sup>ひと</sup>の目<sup>め</sup>に見<sup>み</sup>えずかからず永<sup>とこ</sup>久<sup>しへ</sup>に  
光<sup>ひか</sup>り輝<sup>かがや</sup>く神<sup>みく</sup>國<sup>くに</sup>ありけり。

二

憂<sup>うれ</sup>き雲<sup>くも</sup>もあとなく晴<sup>は</sup>れて苦<sup>くる</sup>しみの

雨さへ降らぬ皇神の園。

三

幸流れ喜び溢れ御榮の  
盡きぬは神の御園なりけり。

四

瑞御靈黄金の樞引きあけて  
待たせたまへど恐れて入らず。

五

天使あまつかひと疾とく下くだり來きてわが弱よわき  
魂たまを導みちびけ神かみの御園みそのへ。

六

大空おほぞらに清きよく聞きこゆる歌うたの聲こゑは  
天津聖あまつひじりの稱たたふるなるらむ。

第三五五

一

世よの塵ちりをはき清きよめつつ選えらまれし

清<sup>きよ</sup>けき民<sup>たみ</sup>の群<sup>むれ</sup>に入<sup>い</sup>らばや。

二

心<sup>こころ</sup>安<sup>やす</sup>く宴<sup>うたげ</sup>會<sup>かい</sup>の筵<sup>むしろ</sup>に招<sup>まね</sup>かれて  
玉<sup>たま</sup>の御<sup>み</sup>歌<sup>うた</sup>を聞<sup>き</sup>くはうれしき。

三

綾<sup>あや</sup>錦<sup>にしき</sup>ミロク<sup>の</sup>の殿<sup>との</sup>の直<sup>なほ</sup>會<sup>らひ</sup>に  
遇<sup>あ</sup>ひし昔<sup>むかし</sup>のなつかしきかな。

四

未<sup>いま</sup>だみぬ盡<sup>つ</sup>きぬ御<sup>み</sup>幸<sup>さち</sup>のおぼろげに  
うつるも畏<sup>かしこ</sup>しミロク<sup>と</sup>の殿<sup>どの</sup>は。

五

瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>生<sup>いの</sup>命<sup>のち</sup>の主<sup>きみ</sup>と仰<sup>あふ</sup>ぎつつ  
誠<sup>まこと</sup>の御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>は集<sup>あつ</sup>まり來<sup>きた</sup>るも。

六

過<sup>す</sup>ぎ去<sup>さ</sup>りし憂<sup>うれ</sup>ひ惱<sup>なや</sup>みも今<sup>いま</sup>ははや  
よろこび事<sup>ごと</sup>の種<sup>たね</sup>となりぬる。

七

瑞御靈其勳を高らかに  
親しくほむる日こそ待たるる。

第三五六

一

老いゆきて夕日影なすわが命  
失するも悔いじ神とありせば。

二

黄金なす翅にのりて故郷に

勇<sup>いさ</sup>みて往<sup>ゆ</sup>かむ神<sup>かみ</sup>の守<sup>まも</sup>りに。

三

ヨルダンの岸<sup>きし</sup>邊<sup>へ</sup>の露<sup>つゆ</sup>を踏<sup>ふ</sup>みわけて  
神<sup>みくに</sup>國<sup>に</sup>に昇<sup>のぼ</sup>る日<sup>ひ</sup>は近<sup>ちか</sup>づきぬ。

四

天<sup>あまつ</sup>使<sup>つか</sup>下<sup>くだ</sup>り來<sup>き</sup>ますか黄<sup>こ</sup>金<sup>がね</sup>なす  
翅<sup>つばさ</sup>の音<sup>おと</sup>の聞<sup>きこ</sup>え來<sup>き</sup>にけり。

五

綾錦嚴の都にあれませる  
教主に遇ふ日を待ちわびにけり。

第三五七

一

錆腐り失せ往く寶何かあらむ  
誠の寶を神國に積まばや。

二

何よりもわが求むるは天津國の

夜よるなき園そのの清すがど所なりなりけり。

三

わが名なをも記しるさせたまへ天津國あまつくにの  
清きよき御文みふみに輝かがやくばかり。

四

天あめの星ほし眞砂まさごの數かずの罪咎つみとがを  
拂はらはせたまへ瑞みづの大神おほかみ。

五

八千座の置戸を負ひて世の人を  
救ひやらむと誓ひしわが教主。

六

わが名をば生命の文に記されしと  
天津たよりに聞く日嬉しき。

七

天津國に澄み渡りたる諸聲は  
清き御靈の謠ふなるらむ。

八

露つゆばかり亂みだれ滅ほろびも無なき國くにの  
都みやこに至いたると思おもへばうれしき。

第三五八

一

打うち仰あふぐ天あま津つ御み空そらに輝かがやける  
樂たのしき住す所みかありと知しらずや。

二

わが魂たまは輝かがやく神かみの御み國くににて

親したしき友ともと共にとも語かたらむ。

三

諸もろもろ々の嘆なげき苦くるしみ打うち忘わすれ  
御み民たみとなりて神み業わざに勵いそしめ。

四

豊ゆたかなる神かみの恵めぐみを永とこ久しへ  
歡よろこぎ樂たのしむ天あま津つ國くに人びと。

第三五九

一

嬉うれしさの涙なみだかわきて頼たのもしく  
悲かなしくありし身みはくれてゆく。

二

現うつ身の命いのちの消きゆる其その日まで  
神かみは安やすけく守まもりましけり。

三

新あたらしく天津御國あまつみくにに甦よみがへり  
盡つきぬ命いのちをまたも賜たまはる。

四

汚けがれたる諸もろ人びと達の罪つみを許ゆるし  
御み禊そぎの業わざに救すくはせたまへ。

五

日ひに夜よるに諸ももの汚けがれを掃はき清きよめ  
長のど閑かな春はるに遇あふ日ひ嬉うれしき。

六

皇すめ神かみの惠めぐみの中なかにやすらひて  
天あま津つ使つかひとともに仕つかへむ。

第三六〇

一

夢ゆめのま間につきひ月日はたちてとしお年老いぬ  
ただこ此の上うへはかみ神のまにまに。

二

人ひとのよ世の命いのちは如何いかに長ながくとも  
百年もとせ越こゆるものはまれ稀なり。

三

振り返り歩みし道を眺むれば  
罪と汚れの足跡のみなる。

四

悲しみし心は重荷となり果てて  
行き難むほど年は暮れけり。

五

わが魂を清め澄して皇神の  
姿をうつす鏡となせよ。

六

新あたらしあしたきむか晨あらたをむか迎あらたへあらたてあらた新あらたなる  
春はるのひか光ひかりにあ遇あはあさせあたまあへ。

第三六一

一

とえどめつきひ得あゆぬあゆ月あゆ日あゆのあゆ歩あゆみあゆ早あゆけあゆれば  
わみがみ身みのはな花はなはあうあつあろあひあにあけあり。

二

行ゆくあき秋あきのもみぢ紅もみぢ葉もみぢのいろ色いろもいろはいろやいろあいろせいろて

冬も間近ふゆ まぢかなくなりかにけるかな。

三

振り返りふりかへ過ぎす来し方かたを眺むながれば  
雲くもに閃ひらめく電いなづまの如ごとし。

四

行く水ゆ みづの面おもてに浮うかぶ水泡うたかたの  
わが身みの果はては影かげも止とどめず。

五

水泡うたかたの水み玉たまと消きえしわが魂たまは  
夜よるなき國くにに甦よみがへりつつ。

六

永とこ久しへに盡つきぬ命いのちを保もちながら  
夢ゆめの浮うき世よと云いひて夢ゆめ見みつ。

（大正一二・五・一二 舊三・二七 於教主殿 明子録）

第一二章 神教しんけつ（一五八七）

第三六二

一

この年も神の御業の御爲に  
捧げまつらむ許させたまへ。

二

たとへ身に幸あらずとも世の爲に  
盡す身魂となさしめたまへ。

三

いとし子の身に幸のあれかしと  
祈るは親の心なりけり。

四

明日の日は如何にならむと村肝の  
心なやめず今日を樂しめ。

五

御恵の露はわが身におきそひて  
神の大道にさきくあれかし。

六

御教みをしへの珍うづの言靈力ことたまちからにて  
世よに現あらはさむ神かみの御稜威みいづを。

七

村雲むらくものよしやわが日常よを包つつむとも  
忽たちまち晴はれむ神かみの光ひかりに。

八

安河やすかはに誓約うけひたまひしわが主きみを  
俣しのびまつりて身みをや盡つくさむ。

第三六三

一

世よをしらす我わが皇すめ神かみの珍うづの手てに  
絶すがれば世よには恐おそるべきなし。

二

新あたらしき春はるは長のど閑かに廻めぐり來きぬ  
神かみの惠めぐみのとこしへにして。

三

旅枕草たびまくらぐさの褥しとねにねむるとも  
守まもらせたまひぬ瑞みづの大神おほかみ。

四

わが往ゆかむ道みちに塞ふさがる深霧ふかぎりを  
吹ふきはらひませ科戸邊しなどべの神かみ。

五

夜晝よるひるの常つねに行ゆき交かふ世よの中なかは  
神かみより外ほかに頼たよるべきなし。

六

わが身魂榮ゆる時も衰ふる  
折にも神は見捨て給はず。

第三六四

一

皇神の御前に寝ぬる安けさは  
夢の浮世に知る人もなし。

二

死出の山過ぎ行く時も巖御靈

瑞みづの御み靈たまの御み名なに安やすけき。

三

我わが神かみと俱ともにありせば幸さち深ふかし  
恐おそれ難なやみも逃にげ失うせゆくなり。

四

安やすらかに病やまひの床とこに臥ふしながら  
生いのち命ちの國くにを望のぞむ樂たのしき。

五

御教みをしへに眼まなこさむるぞ嬉うれしけれ  
甦よみがへり往ゆくわが身み思おもへば。

### 第三六五

一

世よを去さりし友ともの身みの上うへ悲かなしむな  
死しこそ神國みくにに昇のぼる架橋かけはし。

二

死しの影かげの襲おそひ來きたるも厭いとはまじ

永とほのやすみは神國みくににありせば。

三

先さき立だちし親おやこ子はらから兄と弟も友が垣きに  
廻めぐりあふ日ひの死し出での旅たびなり。

四

末すゑの日ひの迫せまり來きたらば墓はかを蹴けり  
甦よみがへりつつ榮さかえを受けむ。

五

死しのねむり醒さます御聲みこゑを待まちわびて  
埋うづむる友ともを涙なみだに送おくる。

### 第三六六

一

世よに下くだり世よの憂うき事ことをまつぶさに  
嘗なめさせたまふ瑞みづの大神おほかみ。

二

かへり來こぬ人ひとを慕したひて泣なく時ときに

慰<sup>なぐさ</sup>めたまふ神<sup>かみ</sup>の御<sup>おん</sup>聲<sup>こゑ</sup>。

三

千<sup>ち</sup>座<sup>くら</sup>をば身<sup>み</sup>に負<sup>お</sup>ひながら嘲<sup>あざ</sup>罵<sup>けり</sup>や  
虐<sup>しひ</sup>げうけし瑞<sup>みづ</sup>の大<sup>おほ</sup>神<sup>かみ</sup>。

四

わが罪<sup>つみ</sup>を憂<sup>うれ</sup>ひ悲<sup>かな</sup>しむ時<sup>とき</sup>こそは  
瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>おん</sup>靈<sup>たま</sup>の助<sup>たす</sup>けありけり。

五

千座ちくらをば負おはせたまひて許こ々こ多た久くの  
苦くをしのびてし尊たふとき教き主みなり。

六

神かみの代よの審判さばきを受うくる其その時ときに  
惠めぐませたまへ瑞みづの大神おほかみ。

第三六七

一

今いまは早はや難なやみのあとも留とどめずに

御手に曳かれて御園へ進むも。

二

現世の荒き浪風切り抜けて  
永久に長閑な岸に渡らむ。

三

死に行くも此世にありて働くも  
神の恵に漏るることなし。

第三六八

一

世よを去さりし友垣ともがき跡あとを偲しのぶれば  
心こころ淋しみしくなり勝まさりゆく。

二

身からだ體たまは藻も脱ぬけのからとなるとても  
靈たまは神みくに國くにに生いきて榮さかえむ。

三

皇すめ神かみの清きよき大おほ道みちを辿たどりつつ  
まめに仕つかへし人ひとの幸さちなる。

四

世よの中なかに残のこしおきたる善よき事ことの  
花はな咲さき出いでて實みのる神かみ國くに。

五

浪なみ風かぜの荒あらく寄よせ來くる其その日ひをも  
吾われ等らがために守まもらせたまふ。

六

神かみに寄よりて難なやみに堪たへし心こころこそ  
いいや永とこ久しへの實みを結むすぶなり。

七

現<sup>うつ</sup>し世<sup>よ</sup>に學<sup>まな</sup>びし知<sup>ち</sup>恵<sup>ゑ</sup>は剥<sup>は</sup>ぎ取<sup>と</sup>られ  
富<sup>とみ</sup>は消<sup>き</sup>えゆく元<sup>もと</sup>つ神<sup>みくに</sup>國<sup>くに</sup>なり。

八

唯<sup>ただ</sup>神<sup>かみ</sup>の言<sup>ことば</sup>葉<sup>は</sup>によりて悟<sup>さと</sup>り得<sup>え</sup>し  
智<sup>ち</sup>慧<sup>ゑ</sup>と富<sup>とみ</sup>とは永<sup>と</sup>久<sup>は</sup>に榮<sup>さか</sup>えむ。

第三六九

一

選えらまれし世よびと人のために築きづかれし  
神みくに國の殿とのに入る日ひ嬉うれしも。

二

輝かがやける神かみの御みくに國の花はな園そのに  
待まつわが友ともと逢あふは嬉うれしき。

三

皇すめ神かみの御みもと許とへ昇のぼるわが靈たまを  
引ひきな止とどめそ神かみのまにまに。

四

いろいろとかけし望みも散る花の  
果敢なき此世と思へばうたてき。

五

永久の御榮に入る魂の  
留まるべしやはここに暫しも。

六

涙なく苦しみもなく喜びの  
盡きぬ神國に昇るは樂しも。

七

瑞御靈嚴の功を天人と  
謳ふよき日の待たれぬるかな。

第三七〇

一

雷を笛の音となし電を  
劍となして天地しらす。

二

天地を豊にしらす皇神の

光ひかりは平和やすきを下くだしたまひぬ。

三

正ただしきを守まもり平和やすきを守まもります  
神かみの懐ふところいとどゆたけし。

四

神かみの法のり捨すてて大道おほぢに逆さからひし  
吾われにも神かみはやすきをたまへり。

五

御怒りを放ちたまはで親の如  
恵ませたまひぬ元津御神は。

六

青雲の棚曳く極み白雲の  
むかふす限り御名を稱へむ。

第三七一

一

天津神嚴の御座に現れまして

葦原あしはらの國くにを守まもらせたまへり。

二

大前おほまへに御み稜いづ威かしこ畏み伏ふし拜をがむ  
其言そのことの葉はに喜よろこびあふるる。

三

喜よろこびを如いか何かに包つつまむ術すべもなし  
神かみのみやびの言ことの葉はのかげ。

四

蝦夷えぞ千島ちしま高砂島たかさごしまの外そとまでも

わが大君おほきみの恵めぐみあまねし。

五

國民くにたみは君きみの御功みいさををあがめつつ

とこしへなれとひたに祈いのるも。

六

大空おほぞらに聳そびゆる富士ふじの高山たかやまも  
地ちに伏ふす谷たにも君きみの食をす國くに。

七

瑞枝みづえさす林はやしも共ともに御言葉みことばの  
光ひかりに遇あひて實みを結むすぶなり。

八

鄙都ひなみやこへだてもあらにわが主きみの  
御稜威みいづを謠うたふ聲こゑうるはしも。

（大正一二・五・一二 舊三・二七 於教主殿 明子録）

第一三章 神祈しんき（一五八八）

第三七二

一

天あめの下した四方よもの國くに々くに安やすかれと  
日ひ毎ごとに祈いのる外ほかなかりけり。

二

わが愛めづるうましき國くにを朝あさ夕ゆふに  
惠めぐませ玉たまふ元もと津つ大神おほかみ。

三

内うちは安やすく外そとより襲おそふ仇あだもなく  
御國みくに穩おだひに進すすませ玉たまへ。

四

神かみに出いでし誠まことの智ち慧ゑに充みち溢あふれ  
御國みくにの花はなと匂におはせ玉たまへ。

五

常とこ永と久はに我わが神國かみくにの生いの命ちとなりて  
惠めぐみの露つゆに潤うるほし玉たまへ。

第三七三

一

國々の幸を祈らむとりわけて  
わが日本の行末の幸を。

二

四の海波風立たず浦安く  
田畑は稔る珍の神國よ。

三

鄙都恵ひなみやめぐみに隔へだてあらねども  
民たみの心こころに差別けぢめあるかな。

四

神かみの子このこそりて神かみに仕つかへつつ  
御代みよを祝ことほぐ聲聞こゑきかまほし。

五

願ねがはくば元津御神もとつみかみの御教みをしへを  
普あまねく四方よもに知しらせたきもの。

六

野のも山やまも響ひびき渡わたれり言こと靈たまの  
珍うづの御み聲こゑはいと爽さはやかに。

七

岩いはよりも堅かたき神かみ代よに住すみながら  
何なに驚おどろくか神かみ國くにの民たみ。

第三七四

一

磯し輪わ垣がきの秀ほ妻づまの國くにを朝あさ夕ゆふに

守まもらせたまへ伊い勢せの大神おほかみ。

二

打うち寄よする荒あらぶる波なみをな凪なぎ拂はらひ  
治をさめたまはれ大おほきみ君きみの國くにを。

三

四しかい海なみ波なみいと静しづかに治をさまれる  
自おのこ轉ろじ倒しま島まは神かみの御み舍あらか殿か。

四

日ひのもと下のいづ稜つ威ひかりのよ光もをよ四も方の國くにに  
輝てらしたま玉へり伊い勢せのおほ大かみ神。

五

四よ方ものくに國みな皆はら同から胞と睦むつ比あ合ひ  
神みくに國の民たみとなる日ひ待またるる。

第三七五

一

雪ゆきをもておほ被ひかくしつ雨あめをそそぎ

育はぐくみ玉たまふ畑はたの種たな物もの。

二

天あま津つ日ひに暖あため盡つきぬ露つゆ下くだし  
風かぜを送おくりて恵めぐませ玉たまふ。

三

朝あさ夕ゆふに耕たが作やし勤つとむる狭さ田だ長なが田た  
稻いな穂ほの波なみは神かみの御み恵めぐみ。

四

よきものは皆御空より下り來ぬ  
神かみの恵めぐみを讚ほめよ稱たたへよ。

五

雨風あめかぜをよき折をり々に起おこしつ  
種子物たなつものをはぐくら育たまみ玉たまふ。

六

花咲はなさかせ鳥とりを養やしなひ種子物たなつものを  
茂しげらせたまふ瑞みづの大神おほかみ。

七

吾等われらをも御子みこと稱となへて朝夕あさゆふに  
與あたへたまひぬ生命いのちの糧かてを。

八

永久とこしへの魂たまの生命いのちも身みの幸さちも  
種子物たなつもの皆みな神かみの賜物たまもの。

九

村肝むらきもの清きよけき赤あかき心こころもて  
珍うづの御前みまへに御饌みけ奉けたてまつれ。

第三七六

一

春<sup>はる</sup>は去<sup>は</sup>り夏<sup>なつ</sup>過<sup>す</sup>ぎ秋<sup>あき</sup>の稔<sup>みの</sup>り見<sup>み</sup>て  
冬<sup>ふゆ</sup>籠<sup>こも</sup>りせむ神<sup>かみ</sup>の館<sup>やかた</sup>に。

二

秋<sup>あき</sup>の田<sup>た</sup>の稻<sup>とし</sup>は豊<sup>ゆた</sup>けし百<sup>ひゃく</sup>姓<sup>せい</sup>の  
野<sup>の</sup>邊<sup>へ</sup>に謠<sup>うた</sup>へる聲<sup>こゑ</sup>は澄<sup>す</sup>みけり。

三

日の光月の露にて育みし  
秋の田の面に黄金の波立つ。

四

御恵に山々躍り谷謡ひ  
恵の露は玉とかがよふ。

五

生業を勵しむ民を愛でたまひ  
生命の種子を豊に賜へる。

六

皇神すめかみに初穂はつほ捧ささげて御恵みめぐみの  
千重ちへの一重ひとへに酬むくいまつらな。

### 第三七七

一

いざ共ともに天津祝詞あまつのりとを奏となへつつ  
神かみの御稜威いづを祝いはひ奉まつらな。

二

皇神すめかみの造り玉たまひし天地あめつちは

榮光さかえ歡喜よろこび充みち溢あふれたり。

三

わが母ははの懷ふところにありしその日ひより  
踏ふみて來きにけむ麻柱あななひの道みち。

四

今いまの世よも又また後の世のちも災わざはひを  
除のぞきて神かみは守まもり玉たまはむ。

五

神かみの子こと生うまれあひたる人ひと草ぐさは  
神かみを除のぞきて如何いかで榮さかえむ。

六

村むら肝きもの心こころの迷まよひ洗あらひ去さり  
惠めぐませ玉たまふ麻あな柱なひの神かみ。

七

元もと津つ神かみ嚴いづと瑞みづとの二ふた柱はしらに  
御み榮さ光かえあれと祈いのる神かみの子こ。

第三七八

一

萬有は榮え輝き喜びに  
充ちて美はし神の御國は。

二

御恵の光輝き四方の國  
百の草木も生立ちて行く。

三

あぢきななき浮世うきよの中に瑞御靈みづみたま  
希望のぞみがかへて下りくだましけり。

四

誘惑いざなひの暗やみの黒雲くろくもかかるとも  
行くゆ先明さきあかし神かみの大道おほぢは。

五

澄すみ渡る清きよき御空みそらを仰あふぎ見みよ  
瑞みづの御靈みたまの貴うづの神姿みすがたと。

第三七九

一

雪霜ゆきしもの烈はげしき冬ふゆに先さき立ちて  
秋あきの田たの面もに黄金こがねの波なみ打うつ。

二

喜よろこびて勇いさみ收かり穫いれ田た人ひと等らが  
珍うづの御前みまへに初穂はつほささぐる。

三

顯うつし世よは神かみの御國みくにの田畑たはたなれば  
畏おそれ愼つしみ日ひ々びに勵はげめよ。

四

よき種たね子を神かみの畑はたけに蒔まくならば  
豊ゆたに稔みのらむ千穎ちかひ八千穎やちかひ。

五

大本おほもとは神かみの教をしへの田畑たはたなり  
獸けもの來きたりて荒あらさむとせり。

六

種子たね蒔まけば朝あさな夕ゆふなに氣きを配くばれ  
鴉からすき來きたりて實みをや拾ひろはむ。

七

よき種子たねを蒔まけばよき花はなよき稔みのり  
惡あしき種子たねをな夢ゆめにも蒔まきそ。

八

八束やつか穂ほの瑞穂みづほの稻いねを刈かり入いる  
秋あきこそ待またため御使みつかひと共ともに。

第三八〇

一

大前おほまへに今いま立たち祈いのる妹いもと背せを  
恵めぐませ玉たまへいや永とこしへ久へに。

二

妹いもと背せの愛あいの衣ころもの破やぶれじと  
守まもらせ玉たまへ彌いや永とこしへ久へに。

三

皇神すめかみの恵めぐみの露つゆのなかりせば  
安やすけからまじ妹いもと背せの道みち。

四

八重やへむぐら葎らかこ圍かこめる賤しづの伏屋ふせやにも  
愛あいの光ひかりの樂たのしみは充みつ。

五

妹いもと背せが互たがひに助たすけ救すくひ合あひ  
渡わたらせ玉たまへ浮世うきよの旅たびを。

六

相あひと共ともに神かみの道おほぢに手てをとりて  
進すすませ玉たまへ清きよく正ただしく。

七

皇すめ神かみの嚴いづの御み楯たてと選えらまれて  
今け日ふ妹いもと背せを契ちぎる嬉うれしさ。

第三八一

一

妹いもと背せを契ちぎる伏ふ屋せやの神かむ床どこに

臨のぞませ玉たまふ須す勢せり理ひ姫めの神かみ。

二

那な岐ぎ那な美みの稜いづ威づの心こころになりませる  
祝いはひの席むしろひら開ひらく目め出で度たさ。

三

大おほ前まへに立たち竝ならびつつつ慎つしみて  
結むすぶ契ちぎりは動うごかざらまし。

四

眞心の限りを盡し妹と背が  
神の大道に永久に仕へむ。

五

妹と背の愛の礎固く据ゑて  
平和の柱永久に樹てむ。

六

何事も神に従ひ進みなば  
妹背の道も久しかるらむ。

七

妹いもと背せの清きよき正ただしき交まじはりは  
彌いや永とこ久しへに樂たのしみ盡つきず。

八

苦くるしみを互たがひに分わかち擔になひつ  
勇いさみて進すすめ神かみの道おほちぢに。

（大正一二・五・一二 舊三・二七 於龍宮館 隆光録）

第一四章 神幸（一五八九）

第三八二

一

三月三日の桃の花

五月五日の桃の實

菖蒲の花の咲き匂ふ

嚴の吉き日は來りけり

遠き神代の昔より

彌永久に定まれる

神の光は妹と背の

生代を契る神柱

祝の日とぞなりにける。

二

山と山の谷間を

流るる水の底清く

菖蒲の花は朝夕に

妙なる薰りを放ちつつ

わが庭前の池の面に  
影をば映す水鏡  
上と下とは紫の花と花との妹と背が  
睦びし如く映るへり。

三

此世の憂きも悩みをも  
又喜びも樂しみも  
共におひつつ睦じく  
嚴の榮光の神園をば  
望みて進む妹と背の  
正しき道の樂しさよ。

四

八千代と壽ぐ百鳥の  
歌の調も長閑なり  
神の御庭に集まりし  
珍の信徒睦び合ひ

花はなのむしろ庭に嬉うれしげに  
うごなはり居る有様は  
天津あまつ使つかひのごと如くにて  
妹いも背せのさち幸を祈いのるなり  
あゝ惟かむ神ながら々かむ々ながら  
恩みたま頼のふゆをね願ぎ奉まつる。

第三八三

一

妹いもと背せのみち道を開ひらきし那な岐な那な美みの  
神かみのみこ御こ聲ゑはいま今なほ尚きこ聞ゆも。

二

嚴<sup>いづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>の下<sup>くだ</sup>り來<sup>き</sup>て  
今<sup>け</sup>日<sup>ふ</sup>の喜<sup>よろこ</sup>び幸<sup>さち</sup>はひ給<sup>たま</sup>はむ。

三

現<sup>うつ</sup>し世<sup>よ</sup>に立<sup>た</sup>ちて働<sup>はたら</sup>くわが友<sup>とも</sup>を  
與<sup>あた</sup>へ給<sup>たま</sup>はれ妹<sup>いも</sup>と背<sup>せ</sup>の道<sup>みち</sup>。

四

須<sup>す</sup>勢<sup>せり</sup>理<sup>ひ</sup>姫<sup>め</sup>出<sup>いづ</sup>雲<sup>も</sup>の神<sup>かみ</sup>とならばして  
結<sup>むす</sup>び給<sup>たま</sup>ひぬ妹<sup>いも</sup>背<sup>せ</sup>の道<sup>みち</sup>を。

五

産土うぶすなの神かみの恵めぐみのとりなしに  
結びむす終をはりぬ妹いもせ背みせの道みちを。

六

幾いくちよ千代ちよも幸さちはひ給たまへ大御神おほみかみ  
産土神うぶすながみと力ちから協あはせて。

第三八四

一

元津神もとつかみ嚴いづと瑞みづとの二柱ふたはしらに

仕つかふる家やぬち内ちは永と久はに樂たのしき。

二

兄はら弟からも家う族から親や族からも親したしみて  
喜よろこび分わかつ家いへの樂たのしさ。

三

朝あさ夕ゆふに業わざ勤いそしみて皇すめ神かみの  
御み榮さか光えあれと祈いのる朝あさ宵よひ。

四

霜しも枯がれし浮う世きよに住すめど樂たのもしき  
常とこ世よの春はるの心こ地ちするなり。

### 第三八五

一

天あま津つ國くに花はなの御み園そのに建たつ家いへは  
黄こ金がねの墓いら四か邊あたりまばゆき。

二

火ひに焼やかれ水みづに流ながるる現うつし世よの

家居いへゐは夢ゆめの果敢はなきをし知れ。

三

八重やへむぐら葎らかど門かどを鎖とぎせし賤しづヶ家がやも  
祝詞のりと聞きえて宮居みやゐとなれり。

四

逸はやりてし己おのが心こころを笑わらひつつ  
今いま落おち着つきぬ神かみの言葉ことばに。

五

湧くままに野中の清水掬びつつ  
瑞の御靈の恵さとりぬ。

六

玉の井に宿る月影いと清し  
魂を研けと教へ給ふか。

第三八六

一

芝垣の一重の中も樂しけれ

神かみをたた讃たへて世よをわた渡る身みは。

二

わが妹いもは花はなと笑ゑみつついとし子こは  
鳥とりと歌うたひて神かみをたた稱たへり。

三

圓まる山やまに登のぼりて四よ方もを眺ながむれば  
神かみの榮さか光えは目まのあたり見みゆ。

四

橄欖かんらんの花はな咲さきにほふまる圓山やまに  
胸むねをどるかもみづがき瑞垣の跡あと。

五

皇神すめかみの珍うづの宮居みやゐの碎くだかれし  
跡あと見みるたび度に涙なみだこぼるる。

六

八重葎やへむぐら茂しげれるしづ賤がケふせ伏家ふせやにも  
月つきはまど窓より覗のぞかせたま給ふ。

七

御<sup>み</sup>惠<sup>めぐ</sup>の雨<sup>あめ</sup>は樞<sup>とほそ</sup>を潤<sup>うるほ</sup>して  
生<sup>いの</sup>命<sup>のち</sup>の水<sup>みづ</sup>をそそがせ玉<sup>たま</sup>へり。

八

わが家<sup>いへ</sup>は皇<sup>すめ</sup>大神<sup>おほかみ</sup>の御<sup>おん</sup>住<sup>す</sup>居<sup>まゐ</sup>  
珍<sup>うづ</sup>の宮<sup>みや</sup>居<sup>ゐ</sup>と尊<sup>たふと</sup>み守<sup>まも</sup>らへ。

第三八七

一

ほのぼのと東<sup>あづま</sup>の空<sup>そら</sup>は明<sup>あ</sup>けにけり

はや昇のぼるらし待ちわびし日は。

二

大空おほぞらにかすみし月つきも奇くしびなる  
光ひかりを放はなつ夜よとはなりぬる。

三

冬籠ふゆごもり春待はるまちわびし白梅しらつめの  
神かみの御園みそのに身みをひそめ居ゐつ。

四

聲こゑ高たかく鶯うぐいすひばり雲雀の野のに叫さけぶは  
神かみの御み稜いづ威づを謳うたふなるらむ。

五

梅つめ柳やなぎ花はな橘たちばなの色いろ清きよく  
主きみの榮さかえを粧よそひぬるかな。

六

皇すめ神かみの同おなじ身み魂たまを受うくる身みは  
男をのこ女をみなの区わか別ちあるなし。

七

珍めづらしき花はな匂におふなる庭にはの面もに  
導みちびかれ行くも神かみのまにまに。

第三八八

一

時ほととぎす鳥み深山やまの奥おくに身みをかくし  
瑞みづえ枝さか榮さかゆる夏なつを待まちつつ。

二

時ほととぎす鳥み泣なく音ねに醒さめて起おき出いづれば

有明ありあけの月つきかがやき渡わたらふ。

三

花はな蓮はちす白梅しらうめの如ごと薰かをりつつ  
神かみの御旨みむねを教をしへ示しめせり。

四

月つき涼すずし秋あき亦また涼すずし野のも山やまも  
涼すずしき空そらに月つきは輝かがやく。

五

旅たび人びとのなやむ眞ま晝ひるの夕ゆふ立たちに  
心こころの塵ちりは洗あらはれにけり。

六

皇すめ神かみの御み稜い威づ稱たふる珍うづの聲こゑは  
天あま津つ御み空そらの神かみに通かよはむ。

第三八九

一

皇すめ神かみの教のりに交まじらふ友とも垣がきは

兄弟はらからよりも親したしかりけり。

二

來きたります主きみ待ちまわびて長なが月の  
消息たよりをきくの花はな菫むしろかな。

三

麻あな柱なひの赤あかき心こころは紅もみぢ葉はの  
奇くき色いろ香かに通かよひぬるかな。

四

永久とこしへの神かみの望のぞみはさやかなる  
御空みそらの月つきにさも似にたるかな。

五

田たの面おもに稔みのる稻穂いなほを鏡かがみとし  
謙遜へりくだりつつ御世みよを渡わたらへ。

六

秋あきの夜よの蟲むしの泣なく音ねに合あはせつつ  
小琴せうごの調しらべに御代みよを謳うたはむ。

第三九〇

一

日は流れ月つきは歩あゆみて星ほし移うつり  
今年ことしも餘あまり尠すくなくなりぬ。

二

御みめぐみ惠みの深ふかきも知しらず白しら雪ゆきの  
中なかにまよふも夢ゆめ心地こころして。

三

野<sup>の</sup>も山<sup>やま</sup>もはや冬<sup>ふゆ</sup>枯<sup>が</sup>れて見<sup>み</sup>る目<sup>め</sup>淋<sup>さび</sup>し  
頼<sup>たよ</sup>りとするは御<sup>み</sup>光<sup>ひかり</sup>のみなる。

四

皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の教<sup>をしへ</sup>の場<sup>には</sup>の睦<sup>むつ</sup>びこそ  
花<sup>はな</sup>咲<sup>さ</sup>き匂<sup>におほ</sup>ふ永<sup>と</sup>久<sup>は</sup>の春<sup>はる</sup>かも。

五

いと清<sup>きよ</sup>き教<sup>をしへ</sup>の友<sup>とも</sup>の交<sup>まじ</sup>らひは  
後<sup>のち</sup>の世<sup>よ</sup>かけて變<sup>かは</sup>らざらまし。

六

埋火の深き心を知らずして  
煙の如くさまよひ巡るも。

第三九一

一

豊榮昇る朝日影 さすや迷ひの雲晴れて  
天津御國に永久にあれ  
御稜威は四方に輝きぬ 神の御子なる人草の  
打仰ぎつつ御空をば 戀慕ふこそ床しけれ。

二

瑞みづの御み靈たまの下くだします  
罪つみや穢けがれに萎しれたる  
再ふたび花はなを咲さかしむる  
仰あふぎ敬うやまへ神かみの德とく。  
惠めぐみの露つゆを身みに受うけて  
青あを人ひと草くさに御み榮さか光えの  
目め出で度たき時ときは近ちかづきぬ

三

神かみの御み稜いづ威つを譬たとふれば  
雲くももかからぬ秋あきの月つき  
いと明あきかに天あめ地つちに  
仰あふぎ敬うやまへ大おほ稜みいづ威つ  
慕したひまつれよ神かみの愛あい。  
風かぜも誘さそはぬ春はるの花はな  
朝あさ日ひの豊とよ榮さか昇のぼる如ごとく  
彌いや永とこ久しへに榮さかえます

四

神かみの御前みまへに集つどひ來きて  
 瑞みづの御聲みこゑを聞きく時ときは  
 心こころの底そこより勇いさみ立たち  
 果はてしも知しらぬ嬉うれしさ  
 包つつむ術すべなき薄衣うすころも  
 疊たたむも惜をしき心こころ地ちかな  
 仰あふぎ敬うやまへ神かみの稜威いづ  
 慕したひまつれよ神かみの愛あい。

(大正一二・五・一二 舊三・二七 於龍宮館 隆光録)

第一五章 神情しんじやう〔一五九〇〕

第三九二

—

西にしの果東はてあづまの國くにに至いたるとも  
同おなじ雲井くもゐの月つきを見みるかな。

二

山やま變かはり人ひと異ことれど村肝むらきもの  
心こころの色いろに變かはりなきかな。

三

わが友ともの遠とほき御國みくにに別わかれ行ゆく  
影かげ見み送おくりて神かみに祈いのりつ。

四

皇神すめかみの情なさけの御手みてに任まかしたる  
君きみを送りおくて嘆なげき喜よろこぶ。

五

別わかれ行くゆ親したしき友とももわが身みをも  
いと健すこやかに守まもらせたまへ。

六

誘惑いざなひのしげき世よなれば心こころして  
さだめの國くにに進すすみませ君きみ。

第三九三

一

あゝ神かみよ友ともを守まもりて往ゆく道みちに  
つつむ事ことなく進すすませたまへ。

二

禍わざはひの雲くも吹ふき拂はらひ任まけの國くにに  
進すすませたまへと祈いのる今け日ふかな。

三

わが友ともに再ふたび遇あはむ其その日ひまで  
守まもらせたまへ惠めぐみの御手みに。

四

荒野あらの原はら通かよふ時ときしも嵐あらし吹ふく  
寒さむけき日ひをも惠めぐみませたまへ。

五

雲霧くもぎりの如何いかに行手ゆくてを塞ふさぐとも  
天津あまつ御光みひかり照てらさせたまへ。

六

いつくしみ廣き翅の懷に  
育みたまへ疲れたる身を。

### 第三九四

一

皇大神の賜ひてし 心の玉を研き上げ  
學びのかこひを立ち出でて 各自々々に進み往く  
いづくの里に到るとも 皇大神の御教の  
清き光を世に照し 神の榮えを委曲に  
彌永久に現さめ。

二

日頃なれにし學び舎の窓を忘れず御教の  
 親の恵をよく思ひ尊き神の御榮を  
 四方の國々輝かせ親しき友や兄弟に  
 誠の功を現して限りも知らぬ神の愛  
 故郷の土産となせよかし。

三

學び館の窓の内互に固く結びたる  
 睦びの紐は永久に解けて離るる事もなし  
 遠き海山打越えて其身は如何に離るとも  
 清き心と宣り言は互に伊行き交らひて

御國みくにのために盡つくさまし  
世よに生うまれたる務つとめなれ。

これぞ吾等われらが人ひととして

### 第三九五

一

宮柱みやばしら太敷ふとし立てて千木ちぎ高たかく  
嚴いづの惠めぐみをひたすら祈いのる。

二

一本ひともとの三みつの位くらゐの皇神すめがみの

榮えを四方に現しまつらむ。

三

打ち嘆く心あはれみ給ひつつ  
注ぎたまはれ溢るる恵を。

四

御言葉にならひて清く明けき  
天津御殿に昇り往かばや。

第三九六

一

宮柱みやばしら太敷ふとしき立てて彌高いやたかく  
仕つかへまつりし今日けふの嬉うれしさ。

二

礎いしずを底そこつ岩根いはねに突つき固かため  
据すゑし今日けふこそ樂たのしきろかも。

三

親石おやいしを上津岩根うはついはねにつき凝こらし  
礎固いしずかたく定さだまりにけり。

四

大殿おほとのを造つくらむとして斧をの初はしめ  
祝いはふも嬉うれし今日けふの御みまつり祭まつり。

五

人ひとの住すむ家いへてふ家いへは多おほけれど  
枕まくらする間まもなきは悲かなしき。

六

わが家やなき子この宿やどりにと親おや神がみの  
造つくりたまひし神かみ國くにの家いへ。

七

棟<sup>むね</sup>高<sup>たか</sup>く柱<sup>はしら</sup>太<sup>ふと</sup>くはあらねども  
天津<sup>あまつ</sup>御<sup>み</sup>殿<sup>との</sup>の面<sup>おも</sup>影<sup>かげ</sup>寫<sup>うつ</sup>せり。

八

三<sup>み</sup>つ御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>鎮<sup>しづ</sup>まりたまふ珍<sup>うづ</sup>の宮<sup>みや</sup>に  
詣<sup>まう</sup>で行<sup>ゆ</sup>く身<sup>み</sup>は樂<sup>たの</sup>しかりけり。

第三九七

一

人の手の業になりてし宮居にも  
鎮まりたまへ元津大神。

二

永久に鎮まりたまへ礎の  
固きが上に立てる宮居に。

三

眞木柱太敷立てし此宮に  
黄金輝く千木や松魚木。

四

海原うなばらに舟ふねうちつづけ送り來おくる  
眞木まきの柱はしらは御代みよの礎いしずえ。

五

飛驒ひだ工たく石工いしくの業わざも御心みこころの  
あれますままに使つかはせたまへ。

第三九八

一

珍宮うづみやに鎮しづまりまして永久とこしへに

奇くすしき御業みわざを現あらはしたまへ。

二

奇くしびなる御みのりを祝しゆくし御力みちからを  
四よ方の國くに々示しめさせたまへ。

三

罪つみ人の諸もの願ねがひも聞きこし召めせ  
千座ちくらを負おひし惠めぐみの主きみよ。

四

元津御祖嚴と瑞との御柱も  
鎮まりたまへ珍の宮居に。

五

宮のみか清き身魂の心をも  
宮居となして鎮まりたまへ。

第三九九

一

やけ氣味になつた男の吹く息を

うるほしたまへ瑞みづの大神おほかみ。

二

わが家いへにわが魂たましひに永久とこしへの  
平和へいわの水みづをわかしめたまへ。

三

瑞御靈安みづみたまやすの河原かはらに溢あふれ出いでて  
常世とこよの海うみに流ながれ往ゆくかも。

四

砕くだかれし珍うづの宮居みやゐの立たて直なほし  
信徒まめひととも共に祈いのりけるかな。

五

珍うづの宮みやに「あらず」憎にくむもの立たちにけり  
窺うかがひ知りぬ暗やみよ世よの終をはりを。

第四〇〇

一

天地あめつちを珍うづの宮居みやゐとなしたまふ

尊たふとき神かみも此この宮みやにませ。

二

大おほまへ前に額ぬかづき拜をがむ信まめひと徒とを  
みたさせたまへ清きよき御みたま靈たまに。

三

疑うたがひの雲くも晴はれゆきて大おほぞら空そらゆ  
日ひの御みひかり光かりもさし添そひにけり。

四

潰つぶされし宮みやを眺ながめて信徒まめひとの  
心こころの空そらに涙なみだの雨あめふる。

五

今いま暫しばし待まてよ信徒まめひと御空みそらより  
榮さかえの月つき日ひ輝かがやき給たまはむ。

第四〇一

一

天あめ地つちの神かみのまします珍宮うつつみやを

むごく碎くだきぬ醜しこの司つかさら。

二

大前おほまへに集つどふ御民みたみを勇いさませて  
謠うたはせ給たまへ心こころゆくまで。

三

圓山まるやまの其頂そのただしに立たてられし  
宮居みやゐの跡あとを見みるは悲かなしも。

四

天地あめつちの神かみも怒いからせたまふらむ  
萬代よろづよまでも醜しこの仕しわざを。

五

天地あめつちの神かみの宮居みやゐを取り壊こぼち  
身みを滅ほろぼせし司つかさもありけり。

六

世よを救すくふ神かみの鎮しづまる御殿みとのまで  
打うち壊こぼしたる人ひとの憐あはれさ。

七

願ねがはくは醜しこの司つかさを憐あはれみて  
赦ゆるさせたまへ廣ひろき心こころに。

（大正一二・五・一二 舊三・二七 於教主殿 明子録）

第四篇 彌みせ仙せんの峰みね

第一六章 神しん息そく（一五九一）

第四〇二

一

言こと靈たまの只ただ一ひと息いきに天あめ地つちを  
造つくり玉たまひし元もと津つ大おほ神かみ。

二

肉にくにある人ひとの造つくりし宮みや居やゐなれど  
心こころ安やすけく鎮しづまり玉たまへ。

三

眞ま心こころをこめて仕つかへし御み民たみ等らの  
この宮みや殿どのを愛めでさせ玉たまへ。

四

三あななひ五かみの神の教をしへに従したがひて  
祈いのる心こころに宿やどらせ玉たまへ。

五

清きよき赤あかき心こころをこめて捧ささげたる  
この社み殿あらかを愛めでさせ玉たまへ。

六

御み榮さ光かえの雲くも棚たな引なびきて永とこ久しに  
たえぬ燈あかし火あかしとなりぬべきかな。

七

嚴いづみ御み靈たま御み名なによりつつ固かためたる  
此この礎いしずゑは千ち代よも動うごかじ。

八

許こ々こ多た久くの罪つみの荒あ波ら寄なせ來よとも  
拂ははせ玉たまへ嚴いづみの大おほ神かみ。

九

邪よこ惡しまの嵐あらしは猛たけり狂くるふとも  
瑞みづの御み靈たまによりて安やすけし。

第四〇三

一

天津神四方の民草憐みて  
嚴の清所を造り玉ひぬ。

二

昔より今も變らぬ御惠の  
露は世人の命なりけり。

三

永久とこしへに恵めぐみの神かみの住すみ玉たまふ  
清きよき宮居みやゐを拜をがむ嬉うれしさ。

四

幾いくちよ千代ちよも變かはらざれかし大前おほまへに  
拜をろがみまつる今日けふの歡喜よろこび。

五

天津あまつくに國くにの珍うづの宮居みやゐを地ちの上うへに  
うつし奉まつりし御殿みとのは尊たふとし。

六

御<sup>み</sup>舎<sup>あらか</sup>を打<sup>うち</sup>壊<sup>こは</sup>されし古<sup>いにしへ</sup>を  
俣<sup>しの</sup>べばいとど口<sup>く</sup>惜<sup>や</sup>しかりけり。

七

われと俱<sup>とも</sup>に永<sup>と</sup>久<sup>は</sup>にまします聖<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>こそ  
闇<sup>く</sup>きを照<sup>て</sup>す光<sup>ひかり</sup>なりけり。

八

村<sup>むら</sup>肝<sup>きも</sup>の心<sup>こころ</sup>の宮<sup>みや</sup>に此<sup>この</sup>宮<sup>みや</sup>に  
永<sup>と</sup>久<sup>は</sup>に鎮<sup>しづ</sup>まり輝<sup>かが</sup>き玉<sup>たま</sup>へ。

第四〇四

一

大本おほもとの神かみの御み稜いづ威づを畏かしこみて  
心こころ盡つくして建たてし宮みやはも。

二

幾いくとせ年の祈いのりと誠まことを重かさね來きし  
末すゑに建たてたる圓まる山やまの宮みや。

三

圓山まるやまの宮みやをこはせし醜司しこうさきの  
今いまや根底ねそこの國くにに落おちたる。

四

皇神すめがみの尊たふとき御名みなはふさはねど  
心協こころあはして建たてし此宮このみや。

五

漸やうやくに建たて上あがりたる新宮にひみやを  
取とりこぼちたる枉まがの名な失うせじ。

第四〇五

一

神かむばしら柱つく造り玉たまひし元もと津つか神かみ  
聞きこし召めしませ清きよき祈いのりを。

二

御み名なの爲ために言こと靈たま軍いくさに出いで立たちて  
枉まがの軍いくさを退やらふ樂たのしさ。

三

枉まが神かみの軍いくさも神かみの御み子こならば  
如何いかで憎にくまむ神かみの心こころに。

四

朝あさ夕ゆふに神かみの神み業わざに習ならひつつ  
わが身み惜をしまぬ神み柱しらとならむ。

五

宣み傳つかひ使ひの教をしふるまままに正まさ道みちを  
歩あゆむ身みなれば枉まが事こともなし。

六

踏<sup>ふ</sup>み迷<sup>まよ</sup>ひ暗<sup>やみ</sup>に陥<sup>おちい</sup>る人<sup>ひと</sup>の子<sup>こ</sup>は  
神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>後<sup>あと</sup>をふまぬ故<sup>ゆゑ</sup>なり。

第四〇六

一

野<sup>の</sup>も山<sup>やま</sup>も惠<sup>めぐみ</sup>の露<sup>つゆ</sup>の玉<sup>たま</sup>照<sup>て</sup>りて  
いと美<sup>うる</sup>はしき神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>代<sup>よ</sup>かな。

二

やはらぎの道<sup>みち</sup>を傳<sup>つた</sup>ふる宣<sup>み</sup>傳<sup>つか</sup>使<sup>ひ</sup>は

善言美詞を朝夕に宣れ。

三

亂れ覆ふ醜の村雲吹き拂ひ  
平和の光を照させ玉へ。

四

玉の緒の命の若草生立ちぬ  
心を閉ぢし雪霜の解けて。

五

安河に天地諸の民草の  
罪を清めし神の勳よ。

第四〇七

一

天津國の焰と輝く神靈  
降らせ玉へ人の身魂に。

二

分靈光と輝き玉の緒の

永<sup>なが</sup>き生<sup>いの</sup>命<sup>のち</sup>と現<sup>あら</sup>はれ玉<sup>たま</sup>へ。

三

朝<sup>あさ</sup>夕<sup>ゆふ</sup>に涙<sup>なみだ</sup>に曇<sup>くも</sup>る眼<sup>まなこ</sup>をば  
乾<sup>かわ</sup>かせ玉<sup>たま</sup>へ嚴<sup>いづ</sup>の光<sup>ひかり</sup>に。

四

枉<sup>まが</sup>神<sup>かみ</sup>の仇<sup>あだ</sup>を退<sup>しりぞ</sup>けわが身<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>  
進<sup>すす</sup>ませ玉<sup>たま</sup>へ神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>園<sup>その</sup>に。

五

瑞御靈御稜威稱ふる歌の聲は  
天と地とに永久に響く。

第四〇八

一

果てもなき大海原を知食す  
神の御稜威に榮え行くなり。

二

吹き荒ぶ疾風を鎮め荒浪を

凧ながせ玉たまひし瑞みづの大神おほかみ。

三

八潮路やしほぢの浪路なみぢを遠とほく行ゆく友ともを  
安やすく彼方あなたに渡わたらせ玉たまへ。

四

荒浪あらなみの立たち狂くるふなる海原うなばらも  
神かみの御稜威いづに安やすく渡わたらむ。

第四〇九

遠き神代の昔より

變らせ玉はず天地を

統べ守ります大御神

教の友の身の上を

安く守らせ玉ひつつ

いとも嶮しき山路をも

荒風猛る海路をも

嚴の御靈の御光に

安く越えさせ玉へかし。

麓の霧をふみ碎き

高嶺の雲を押分けて

昇る朝日の影清く

嚴の御靈の御光に

嶮しき道も平けく

珍の力を與へまし

進ませ玉へと願ぎ奉る。

潮しほのや八百路ほちのや八潮路しほちを

漕こぎわ分け進すすむわが船ふねは

逆さか捲まく波なみに襲おそはれて

危あやふき事ことのありとても

嚴いづの御靈みたまの御光みひかりと

瑞みづの御靈みたまの御惠みめぐみに

嵐あらしを鎮しづめ波なみを凧なぎ

彼方あなの岸きしに心安うらやすく

進すすませ玉たまへ惟神かむながら

御靈みたまの限かぎり願ねぎ奉まつる。

第四一〇

足曳あしびきの山路やまぢを越こえて只ただ一人ひとり

行く身も安し神としあれば。

二

松の嵐谷の流れも神使の  
御歌も玉の琴の音と聞く。

三

澄み渡る心の空に雲もなし  
清きは嶺の白雪と見む。

四

足<sup>あし</sup>曳<sup>び</sup>の山<sup>やま</sup>路<sup>ぢ</sup>嶮<sup>け</sup>しく前<sup>ゆ</sup>途<sup>くて</sup>遠<sup>とほ</sup>し  
何<sup>い</sup>時<sup>つ</sup>かは着<sup>つ</sup>かむ珍<sup>うづ</sup>の都<sup>みやこ</sup>に。

五

荒<sup>あ</sup>野<sup>らの</sup>行<sup>ゆ</sup>く淋<sup>さ</sup>しき一<sup>ひ</sup>人<sup>とり</sup>旅<sup>たび</sup>なれど  
神<sup>か</sup>と大<sup>お</sup>道<sup>ほ</sup>はいとも安<sup>やす</sup>けし。

六

黄<sup>た</sup>昏<sup>そ</sup>れて草<sup>く</sup>の褥<sup>しと</sup>に石<sup>い</sup>枕<sup>はまくら</sup>  
假<sup>か</sup>寝<sup>り</sup>の夢<sup>ゆめ</sup>にも神<sup>か</sup>は忘<sup>わ</sup>れじ。

第四一

一

雷いかづちの轟とどろき渡わたり海うみは鳴なり  
黒雲くろくも塞ふさぐ世よは近ちかづきぬ。

二

さり乍ながら恵めぐみの神かみは何い時つまでも  
拂はらはでおかむやこれの災難なやみを。

三

待ち望む星は彼方の大空に  
きらめきにけり心清めよ。

四

大空を呑みつつ寄せ来る荒浪は  
日毎夜毎に迫り来れり。

五

わが身魂照して救ふ平和の  
星は御空にほほえみ出でぬ。

六

荒浪あらなみに木この葉はの如ごとく揺ゆられたる  
御舟みふねの上うへもわれは恐おそれじ。

七

わが身み魂たま照てらさむとして大空おほぞらに  
輝かがやき玉たまふ瑞みづの三みつ星ぼし。

（大正一二・五・一三 舊三・二八 隆光録）

第十七章 神心しんしん（一五九二）

第四一二

一

わが身みたま逆さかまく浪なみに吞のまれむとす  
出いださせたまへ救すくひの船ふねを。

二

日ひは沈しづみ四よ方もの海原うなばら物もの凄すこし  
照てらさせたまへ嚴いづの光ひかりを。

三

海<sup>うみ</sup>も陸<sup>くわ</sup>も神<sup>かみ</sup>の御<sup>おん</sup>手<sup>て</sup>にある上<sup>うへ</sup>は  
如何<sup>いか</sup>で恐<sup>おそ</sup>れむ神<sup>かみ</sup>のまにまに。

四

沓<sup>めし</sup>島<sup>まが</sup>瀉<sup>が</sup>伊<sup>いた</sup>猛<sup>たけ</sup>る浪<sup>なみ</sup>をしづめてし  
瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>を友<sup>とも</sup>とし往<sup>ゆ</sup>かむ。

五

皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の珍<sup>うづ</sup>の御<sup>み</sup>言<sup>こと</sup>を畏<sup>かしこ</sup>みて  
朝<sup>あさ</sup>な夕<sup>ゆふ</sup>なに闇<sup>やみ</sup>夜<sup>よ</sup>をわたらむ。

第四一三

一

大宮おほみやの燈火ともしび影かげは暗くらくして  
静しづけさやぶる御聲みこゑ聞きえぬ。

二

大宮おほみやはよし毀こほたれて跡あとなくも  
神かみの御國みくにに嚴おごそかに立たてり。

三

罪<sup>つみ</sup>知らぬ<sup>をし</sup>幼<sup>をさな</sup>き童<sup>わらへ</sup>は朝<sup>あさ</sup>夕<sup>ゆふ</sup>に  
神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>聲<sup>こゑ</sup>を確<sup>たし</sup>に聞<sup>き</sup>くなり。

四

静<sup>しづ</sup>かなる<sup>る</sup>珍<sup>うづ</sup>の御<sup>み</sup>聲<sup>こゑ</sup>を聞<sup>き</sup>く時<sup>とき</sup>は  
心<sup>こころ</sup>に天<sup>あま</sup>津<sup>つ</sup>神<sup>かみ</sup>國<sup>くに</sup>開<sup>ひら</sup>くも。

五

皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の大<sup>おほ</sup>御<sup>み</sup>心<sup>こころ</sup>を心<sup>こころ</sup>とし  
仇<sup>あだ</sup>し思<sup>おも</sup>ひを去<sup>さ</sup>らさせたまへ。

六

世よの聖夢ひじりゆめにも知らぬみこと勅のり  
幼をさなき童わらへの耳みみに聞きこゆる。

第四一四

一

夕ゆふ日ひ落おち埒ねぐらに急いそぐ諸鳥ももどりの  
聲こゑ悲かなしげに聞きこえ來くるかな。

二

花はなねむり星ほしは御空みそらに閃ひらめきて

四邊あたりにしづ靜しづけき夜よるは來きにけり。

三

夜よもすがらめぐみ惠めぐみの神かみよ懷ふとこころに  
抱だかれて眠ねむる心こころ安やすけし。

四

夢ゆめ路ぢにも照てり輝かがやきし御み姿すがたを  
拜をがませたまへいづ嚴いづの大神おほかみ。

五

小路をぢを往ゆく旅人たびびと浪なみにのる船人ふなびと

ともにとこやみの夜よるにもおぢず

進すすませたまへ神かみの光ひかりに神かみの恵めぐみに。

六

御使みつかひの黄金こがねの翅はねに抱いだかれて

いと勇いさましく御國みくにへ昇のぼるも。

第四一五

一

新緑しんりよくの萌もえたつ野の邊べにわが魂たまを  
導みちびきたまへ瑞みづの大神おほかみ。

二

わが魂たまを育はぐくみましていと安やすく  
永と久はの榮さかえに入いらしめたまへ。

三

わが魂たまの力ちからの友ともとなりまして  
導みちびきたまへ綾あやの聖地せいちへ。

四

ねぎごとをいと平かにうけ給へ  
御神に頼る外なきわれを。

五

許々多久の罪や汚れを清めます  
力は神の御稜威なりけり。

六

わが罪を贖ひ永久の生命を  
守りたまへる瑞の大神。

七

御心みこころをわれにみたして常世とこよゆく  
闇夜やみよの燈火あかしとなさしめたまへ。

八

いや深ふかき恵めぐみの露つゆを浴あびながら  
花はな咲さき匂におふ野邊のべを往ゆくかな。

第四一六

一

幼子をさなごの心こころに返かへりしわが魂たまを

あはれ  
憐み御子と恵ませたまへ。

二

教主の如く優しくあらばほほゑみて  
わが頭邊を撫でさせたまはむ。

三

わが教主の御子とならむと朝夕に  
幼心を培ひて往く。

四

朝あさななさななな御み心こころ慕したひひ御み惠めぐみに  
育そだちちてて輝かがやくく玉たまととなりなりけるける。

五

わがわが教き主みのの珍うづのの使つかひととならならばばややと  
奇くし神かみよ代よのの御み文ふみよよむむなりなり。

六

珍めづららししきき奇くし神かみよ代よのの物もの語がたり  
己おのがが身み魂たまのの礎いしずえととなりなり。

七

御文は雲の八百路を踏みわけて  
神國に至る棊なりけり。

#### 第四一七

一

賤の家に産聲あげし幼子も  
天津使の業をいそしむ。

二

諸人の救ひの柱と生れながら

汚<sup>け</sup>れし人<sup>ひと</sup>の中<sup>なか</sup>に居<sup>ゐ</sup>るなり。

三

忠<sup>まめ</sup>實<sup>やか</sup>に親<sup>おや</sup>に仕<sup>つか</sup>へて敬<sup>うやま</sup>ひつ  
人<sup>ひと</sup>の務<sup>つと</sup>めの法<sup>のり</sup>となれかし。

四

世<sup>よ</sup>の様<sup>さま</sup>をい<sup>い</sup>やことごと<sup>し</sup>に知<sup>し</sup>る教<sup>き</sup>主<sup>み</sup>は  
日<sup>ひ</sup>に夜<sup>よ</sup>に神<sup>かみ</sup>の智<sup>ち</sup>慧<sup>ゑ</sup>をう<sup>う</sup>けつ<sup>つ</sup>。

五

身體からだは現身うつそみの世よにありとても  
神かみと俱ともなり清きよき御靈みたまは。

六

よき事ことを務つとめはげみて頼たのもしき  
神國みくにに昇のぼる人ひとは人ひとなり。

第四一八

一

山やまに河かはに草木くさきすべての物もの皆みなに

宿やどらせたまふいづ嚴いづの大神おほかみ。

二

終よもすがら夜わが吾身み吾魂わがたまを守りまもつつ

東雲しのめの空そら待たせたまひぬ。

三

駒こまの聲こゑ響くつの音ねにもにこやかに  
笑えませたまひぬみつ瑞みつの大神おほかみ。

第四一九

一

永久とことはに強つよくましますわが主きみを  
慕したひまつらむ弱よわきわが身みは。

二

地ちの上うへの罪つみを清きよめて救すくふために  
榮さかえを捨すてて天あも降りましけり。

三

白銀しろがねや黄金こがねの門かどをうち開ひらき  
待またせたまひぬ清きよき御靈みたまを。

四

ヨルダンの清き流れに御禊して  
御國のために功樹てばや。

第四二〇

一

世を教ふ神の御文を讀みてより  
深き御稜威を廣く悟りぬ。

二

懐<sup>なつ</sup>かしくいとも尊<sup>たふと</sup>くなりけり  
神<sup>みふみ</sup>書見しよりわが神<sup>かみ</sup>の嚴<sup>いづ</sup>。

三

罪<sup>つみ</sup>のため神<sup>かみ</sup>の御許<sup>みもと</sup>を離<sup>はな</sup>れしも  
咎<sup>とが</sup>めたまはず守<sup>まも</sup>らせたまひぬ。

四

歌<sup>うた</sup>心<sup>こころ</sup>無<sup>な</sup>きわが身<sup>み</sup>にも皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の  
惠<sup>めぐみ</sup>に打<sup>う</sup>たれ歌<sup>うた</sup>わき出<sup>い</sup>づる。

第四二一

一

罪<sup>つみ</sup>知らぬ清<sup>きよ</sup>き幼<sup>をさなご</sup>子<sup>こ</sup>よび集<sup>あつ</sup>め  
御<sup>み</sup>許<sup>もと</sup>に遊<sup>あそ</sup>ばせたまふ嬉<sup>うれ</sup>しきさ。

二

わが靈<sup>たま</sup>を勞<sup>いたは</sup>りたまふ皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の  
面<sup>おもて</sup>を見<sup>み</sup>れば慕<sup>した</sup>はしくなりぬ。

三

目に見えぬ神の面も赤心の  
光に照りて今日は拜みぬ。

四

教主が召す神國の園に行かばやと  
備へをなして月日待ちぬる。

五

選ばれし御靈の永久に住む家は  
天津御國に備はりてあり。

六

幼子の數多集ひて天津國の  
御園に主と共に遊べる。

（大正一二・五・一三 舊三・二八 於教主殿 明子録）

第一章 神園（一五九三）

第四二二

一

幼子の群がり集ふ神の園に

いともやさしき母神の聲。

二

美はしくいと懐かしき聲すなり  
瑞の御靈のあれし花園に。

三

御心に従ひまつりわが魂を  
清めて御許に宮仕へせむ。

四

幼子をさなごの弱よわきを御手みてに抱いだきつつ  
哺育はぐくみ玉たまへ御心みこころのままに。

第四二三

一

わが身み魂たまは育はぐくみまして樂たのもしき  
珍うづの御園みそのへ遊あそばせ玉たまへ。

二

今日けふも亦また神かみの惠めぐみに暮くれにけり

恵めぐませ玉たまへまた來きたる日ひを。

三

住すむ家いへも食物をしももの着物きものも賜たまはりし  
瑞みづの御靈みたまの恵めぐみ尊たふとき。

四

あやまちを宣のり直なほしつつ吉よき夢ゆめを  
結むすばせ玉たまへ世よの悉ことごとに。

第四二四

一

日の下の珍の都に下ります  
佳き日待ちつつ魂を研かむ。

二

大空の星と輝き我神の  
冠の玉とつかはせ玉へ。

三

天津國の青人草と數へらるる  
人の身魂に露汚れなし。

四

世よの穢けがれ夢ゆめにも知しらぬ幼をさな兒こは  
神かみの御み國くにの花はなにぞありける。

第四二五

一

春はるの野のにほほゑむ堇すみれ花はなの姿すがた見みれば  
萎しをれし胸むねも潤うるほひにけり。

二

夏草なつぐさの茂しげれる中なかに撫子なでしこの  
姿すがたやさしき花はなもありけり。

三

しづしづと平和へいわの道みちを歩あゆむ稚兒ちごの  
姿すがたを見みれば心こころ和やはらぐ。

四

皇神すめかみの惠めぐみの綱つなにひかるとも  
知しらで高天原たかまのほに上のぼり來きにけり。

五

咲さきにほ匂にほふはるの春野の花はなもいつしかに  
色いろか香か褪あせゆ行くとき時はき來きぬらむ。

六

人ひとの世よの災わざはひいかに多おほくとも  
神かみと俱ともなる身みこそ安やすけき。

七

皇すめ神かみの御み後あと踏ふみ分わけ進すすむ身みは  
醜しこの枉まが靈ひの襲おそふことなし。

第四二六

一

千<sup>ち</sup>早<sup>はや</sup>振<sup>ふ</sup>る神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>祖<sup>おや</sup>の御<sup>み</sup>惠<sup>めぐみ</sup>は  
いと豊<sup>ゆた</sup>かなり天<sup>あめ</sup>と地<sup>つち</sup>とに。

二

皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>は嚴<sup>いづ</sup>の涙<sup>なみだ</sup>を湛<sup>たた</sup>へつつ  
罪<sup>つみ</sup>の御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>等<sup>ら</sup>を導<sup>みちび</sup>き玉<sup>たま</sup>ふ。

三

幼兒をさなごの心こころは神かみに等ひとしけれ  
その言靈ことたまの淀よどみなければ。

## 第四二七

一

神かみつ代よの事ことつばらかに記しるしたる  
書ふみよむ度たびに神かみを悟さとりぬ。

二

千早ちはや振ふる神かみを知らざる罪つみの子こは

仇あだに暮くらしぬ珍うづの月つき日をひ。

三

神かみをし知らぬ同はら胞からの身みをあは憐はれみて  
朝あさ夕ゆふ祈いのれ神かみの御みま前へに。

四

小こ羊ひつじをめぐ恵めぐみ育そだつる瑞みづ御み靈たまは  
恵めぐみ普あまねき坤ひつじさるの神かみ。

五

夕ゆふべごと毎み五ろ六く七ののとの殿ににまゐつど參ま集あひ  
聖ひじりもし知しらぬぬのり教ををき聞きくかなかな。

六

憂うきなや惱なみみ身ににしの忍びびつつつ人ひとのた爲めに  
天あ降もりましたる神かみをあ崇がめよよ。

第四二八

一

春はる夏なつのあ朝した涼すずしくま蒔まくた種た子ねの

稔<sup>みの</sup>り豊<sup>ゆた</sup>けき秋<sup>あき</sup>は來<sup>きた</sup>りぬ。

二

空<sup>そら</sup>かすむ永<sup>なが</sup>き春<sup>はる</sup>日<sup>ひ</sup>の眠<sup>ねむ</sup>たさを  
忍<sup>しの</sup>びて述<sup>の</sup>ぶるこれの靈<sup>か</sup>界<sup>み</sup>物<sup>ふ</sup>語<sup>み</sup>。

三

いそしみて朝<sup>あさ</sup>な夕<sup>ゆふ</sup>なに述<sup>の</sup>べ傳<sup>つた</sup>ふ  
この物<sup>ものがたり</sup>語<sup>と</sup>永<sup>と</sup>久<sup>は</sup>に榮<sup>さか</sup>えむ。

四

身<sup>み</sup>も魂<sup>たま</sup>も神<sup>かみ</sup>の大道<sup>おほぢ</sup>に捧<sup>ささ</sup>げつつ  
筆<sup>ふで</sup>に任<sup>まか</sup>せて物語<sup>みふみ</sup>を記<sup>しる</sup>す。

第四二九

一

ささやけき葉<sup>はず</sup>末<sup>ゑ</sup>の露<sup>つゆ</sup>も流<sup>なが</sup>れ行<sup>ゆ</sup>けば  
はてしも知<sup>し</sup>らぬ海<sup>うみ</sup>となり行<sup>ゆ</sup>く。

二

こまやかな濱<sup>はま</sup>の眞<sup>まさ</sup>砂<sup>ご</sup>も年<sup>とし</sup>を經<sup>へ</sup>て

積つもれば遂つひに山やまとなりぬる。

三

徒いたづらに空むなしく過すこす束つかの間まも  
己おのが生いのち命の一ひと節ふしなりける。

四

塵ちり程ほどの罪つみ過あやまちも重かさなれば  
身みを亡ほろぼすの種たねとなるらむ。

五

かすかなる道みちに叶かなひしよき業わざも  
積つもり積つもりて神業みわざとなるも。

第四三〇

一

時ときは來きぬ神かみの御教みのりの廣庭ひろにはに  
急いそぎ進すすめよ選えらまれし人ひと。

二

美うるはしき主きみの御言葉みことば目のあたり

聞かむ佳き日は迫り來にけり。

三

神の道學ぶ館をわれ一と  
先を争ひ進みてぞ行け。

四

三柱の嚴の稱への御聲の  
聞ゆる中に急げ世の人。

五

矢やの如ごとく月つき日の駒こまの速はやければ  
空むなしく過すこすな惜をしき此この世よを。

第四三一

一

問とはまほし濱はま邊べの眞ま砂さ行ゆく水みづの  
落おち行ゆく先さきは何いづれの海うみと。

二

川かはの邊べにいさりつきたる眞ま砂ささへ

朝あさな夕ゆふなに神かみを稱たたへつ。

三

美うるはしき千草ちぐさの花はなに言問こととはむ  
妙たへなる色香いろか誰たが爲ために咲さく。

四

皇神すめかみの惠めぐみの花はなの薰かをりをば  
世よに示しめさむと日毎ひごと咲さくなり。

五

聲こゑ清きよき野の邊べの小鳥ことりに言問こととはむ  
樂たのしき歌うたは何人なにびとのため。

六

皇神すめかみの惠めぐみの節ふしを示しめさむと  
朝あさな夕ゆふなに野山のやまに謠うたふ。

七

御榮光みさかえは永久とほに絶たえせず御惠みめぐみの  
豊ゆたけき神かみの御稜威み稱づへむ。

(大正一二・五・一三 舊三・二八 隆光録)

第十九章 神水しんすい〔一五九四〕

第四三二

一

大空おほぞらにきらめく星ほしの數かず限りなく  
御手みてに造りつくし神かみぞ崇あがめよ。

二

野のに山やまに限りかぎも知らず咲さき満みつる  
花はなの數々かずかず匂におはせたまふ。

三

草くさや木きに置くおく白露しらつゆの數知かずしれず  
宿やどらせ玉たまふ月つきの御光みひかり。

四

數々かずかずの濱はまの眞砂まさごも一々いちいちに  
知しりたまひけり神かみの眼まなこは。

五

垂乳根の親の恵の深きをば  
人の子如何に悟りうべきか。

六

垂乳根の親をたまひし神こそは  
永久の恵の親の親なり。

第四三三

一

湧き出づる生命の清水永久に

流ながれて世よをば霑うるほしたまふ。

二

眞ま清し水みづを汲くみてし飲のまば村むら肝きもの  
心こころのかわき覺おぼえざるらむ。

三

宮みや川かはの谷たにの清し水みづに御み禊そぎして  
代よをうるほせし御み祖おやは畏かしこし。

四

世の人の靈の住家を備へつつ  
待たせたまひぬ元津御神は。

五

彌生空閑に匂ふ御惠の  
花こそ清き御胸なるらむ。

六

御惠の涼しき風の吹き渡る  
綾の高天原は慕はしきかな。

第四三四

一

闇やみの夜よの影かげは漸やうやく消きえにけり  
巖いづの御靈みたまの朝日あさひ昇のぼりて。

二

皇神すめかみの巖いづの御前みまへに現あらはれて  
仰あふぎ奉まつらむ清きよき御顔みかほを。

三

足<sup>あし</sup>曳<sup>びき</sup>の山<sup>やま</sup>にも野<sup>の</sup>にも夜<sup>よる</sup>の幕<sup>まく</sup>  
かかれる時<sup>とき</sup>ぞ淋<sup>さび</sup>しかりけり。

四

夜<sup>よ</sup>の帳<sup>とばり</sup>かかげて昇<sup>のぼ</sup>る朝<sup>あさ</sup>日<sup>ひ</sup>子<sup>こ</sup>は  
いづの御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>の惠<sup>めぐみ</sup>なりけり。

五

御<sup>み</sup>惠<sup>めぐみ</sup>に天<sup>あま</sup>津<sup>つ</sup>日<sup>ひ</sup>影<sup>かげ</sup>を照<sup>てら</sup>しつつ  
迷<sup>まよ</sup>ひの雲<sup>くも</sup>を晴<sup>は</sup>らさせたまへ。

六

疾とく起おきて勤つとむる術わざも神かみしなくば  
水みづに繪えをかく如ごとくなるらむ。

七

人ひとの業わざはもう一ひと息いきと云いふ時ときに  
破やぶられ易やすし神かみに祈いのれよ。

八

荒あ金らの地つちの中なかまで照てらしゆく  
神かみの光ひかりを夢ゆめなうとみそ。

九

嚴御靈瑞の御靈の傳へましし  
その言の葉に心ひらけよ。

一〇

闇消えて常夜の晨となるならば  
疾く起き出でよ神に倣ひて。

#### 第四三五

一

日の御影天の御影とかくろひて

謙遜へりくだりつつ道みちに仕つかへむ。

二

朝夕あさゆふに宣のる言靈ことたまを平たひらけく  
聞きこし召めしませ耳みみふり立たてて。

三

小牡鹿さしかの耳みみふり立たてて聞きこし召めせ  
心清こころきよめて宣のる言靈ことたまを。

四

世よの塵ちりに暫しばし離はなれて天津國あまつくにの  
景色けしきしのびし時ときの樂たのしさ。

五

わが靈たまを御座みくらとなして正義ただしきと  
平和へいわの満みてる宮みやとなしませ。

六

わづらひも仇あだし望のぞみも消きえ失うせて  
神かみの使つかひと今いまはなりぬる。

第四三六

一

言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>の御<sup>み</sup>水<sup>い</sup>火<sup>き</sup>によりて天地<sup>あめつち</sup>を  
造<sup>つく</sup>り固<sup>かた</sup>めし常<sup>とこ</sup>立<sup>たち</sup>の神<sup>かみ</sup>。

二

素<sup>す</sup>盞<sup>さ</sup>鳴<sup>の</sup>の神<sup>かみ</sup>の功<sup>いさを</sup>を言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>の  
限<sup>かぎ</sup>り盡<sup>つく</sup>せど稱<sup>たた</sup>へあまりぬ。

三

大前おほまへに額ぬかづき奉まつる民草たみぐさの  
稱たたへの聲こゑは長閑のどかなりけり。

第四三七

一

御稜威みいづあれ御榮みさかえあれと皇神すめかみの  
御前みまへに祈いのる今朝けさの樂たのしさ。

二

月つきも日ひも大地くぬち草木くさきもおしなべて

元津御神の御稜威たたへつ。

三

瑞御靈神の心に叶ひなば  
世に襲ひ來る仇神はなし。

四

いと高く清けき神の御恵に  
抱かれながら榮ゆもろもろ。

五

罪<sup>つみ</sup>汚<sup>け</sup>れ諸<sup>も</sup>のなやみも安<sup>やす</sup>河<sup>かは</sup>の  
御<sup>み</sup>禊<sup>そぎ</sup>のわざに洗<sup>あら</sup>はれにけり。

第四三八

一

わが力<sup>ちから</sup>知<sup>ち</sup>恵<sup>ゑ</sup>を頼<sup>たの</sup>みとせし人<sup>ひと</sup>も  
神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>前<sup>まへ</sup>には顔<sup>かん</sup>色<sup>ばせ</sup>もなし。

二

仇<sup>あだ</sup>人<sup>びと</sup>の怪<sup>け</sup>しき卑<sup>いや</sup>しき教<sup>をし</sup>草<sup>くさ</sup>

薙なぎ拂はらひ行ゆかむ月つきの利とが鎌まに。

三

如い何か程ほどに力ちから強つよくも永とこ久しへの  
頼たのみならむや人ひとにしあれば。

四

遠とほからず朽くち果はつるべきこの生いの命ち  
救すくはせたまへ永とこ久しへの神みくに國くにに。

五

身みの中うちに嚴いづの御靈みたまのましまさば  
醜しこの曲靈まがひの如何いかでさやらむ。

六

根ねの國くにの醜しこの兵つはものほ吠ほえ猛たけり  
迫せまり來くるとも拂はらふ神風かみかぜ。

七

曲神まがかみの力ちからの限かぎり攻せめ來くとも  
防ふせぎやはむ嚴いづの言靈ことたま。

八

わが命いのちわが妻つま子こまで奪うばはむと  
攻せめ來くる仇あだを打うち退しりぞくる法のり。

第四三九

一

大おほ本もとの惠めぐみの神かみは世よの人ひとを  
救すくはむとして御み子こを下くだしぬ。

二

八やち千くら座らの責せめ苦くにあひて瑞みづ御み靈たま

生命いのちの主きみと現あれましにけり。

三

日ひの御神みかみ月の御神みかみと相あ共ひとに  
降ふらせたまひぬ惠めぐみの雨あめを。

第四四〇

一

玉たまの井いの清きよき眞ま清しみ水みづ完ま全つに  
瑞みづの御靈みたまの昔むかしを語かたりつ。

二

空<sup>そら</sup>高く<sup>たか</sup>太<sup>ふと</sup>き<sup>き</sup>櫛<sup>け</sup>は<sup>や</sup>囁<sup>ささ</sup>き<sup>や</sup>ぬ  
瑞<sup>みづ</sup>の<sup>み</sup>御<sup>たま</sup>靈<sup>ま</sup>の<sup>あ</sup>生<sup>あ</sup>れ<sup>し</sup>昔<sup>むかし</sup>を<sup>を</sup>。

三

限<sup>かぎ</sup>り<sup>な</sup>き<sup>い</sup>生<sup>いの</sup>命<sup>のち</sup>の<sup>し</sup>清<sup>みづ</sup>水<sup>とこ</sup>永<sup>し</sup>久<sup>へ</sup>に  
湧<sup>わ</sup>きて<sup>つ</sup>盡<sup>つ</sup>き<sup>せ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>これ<sup>の</sup>玉<sup>たま</sup>の<sup>あ</sup>井<sup>い</sup>。

四

冬<sup>ふゆ</sup>枯<sup>が</sup>れ<sup>し</sup>世<sup>よ</sup>の<sup>あ</sup>有<sup>り</sup>様<sup>さま</sup>を<sup>す</sup>救<sup>く</sup>は<sup>む</sup>と  
長<sup>の</sup>閑<sup>ど</sup>な<sup>か</sup>春<sup>はる</sup>の<sup>う</sup>梅<sup>め</sup>馨<sup>か</sup>る<sup>な</sup>り。

第四四一

一

奥津城おくつぎにかくれたまひし御惠みめぐみの  
花咲はなさく春はるも近ちかづきにけり。

二

わが教祖おやは生命いのちの元もとにましますば  
いや永久とこしへに榮さかえますかも。

三

奥津城おくつぎの見みえぬ根底ねそこに下くだりまして  
救すくひの道みちを傳つたへたまひぬ。

四

稚比賣わかひめの神かみの御靈みたまは御空みそらより  
天降あもりて千代ちよの礎いしずえとなりぬ。

（大正一二・五・一三 舊三・二八 於教主殿 明子録）

第二〇章 神香しんかう（一五九五）

第四四二

一

さまよへる罪つみの人の子こ求まぎ集つどひ  
清きよき薙むしろに導みちびく宣み傳つか使ひ。

二

八束やつか髭かひげわが胸むな先さきに垂たるるまで  
嘆なげき玉たまひひぬ天地あめつちの爲ために。

三

ヨルダンの清き流れもわが魂を  
洗ふ由なきまでに曇りぬ。

四

穢れたるわが魂も清まりぬ  
神の教にヨルダンの川。

第四四三

一

瑞御靈世の枉神に勝ちけりと

嚴いづの御靈みたまの珍うづの御聲おんこゑ。

二

言靈ことたまの珍うづの軍いくさを整ととのへて  
待まち玉たまひたる神軍みいくさ強つよし。

三

言靈ことたまの軍いくさの司つかさ勇いさみ立たち  
勝鬨かちどぎ擧あぐる時ときは來きにけり。

四

枉<sup>まが</sup>神<sup>かみ</sup>の稜<sup>い</sup>威<sup>づ</sup>の根<sup>ね</sup>城<sup>しろ</sup>も震<sup>ふる</sup>ひけり  
鍛<sup>きた</sup>へに鍛<sup>きた</sup>へし直<sup>な</sup>日<sup>ほひ</sup>の靈<sup>たま</sup>に。

五

言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>の軍<sup>いくさ</sup>の前<sup>まへ</sup>に仇<sup>あだ</sup>もなく  
進<sup>すす</sup>むにつれて勝<sup>かち</sup>鬨<sup>どき</sup>の聲<sup>こゑ</sup>。

六

山<sup>やま</sup>々<sup>やま</sup>の伊<sup>い</sup>保<sup>ほ</sup>理<sup>り</sup>を分<sup>わ</sup>けて百<sup>もも</sup>の神<sup>かみ</sup>  
加<sup>くわ</sup>はり玉<sup>たま</sup>はむ言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>軍<sup>いくさ</sup>に。

七

選えらまれし御み民たみの勇いさむ時ときは來きぬ  
瑞みづの御み靈たまの勝かち鬨どきの聲こゑ。

## 第四四四

一

如い何かにせむと惱なやみ迷まよひし村むら肝きもの  
心こゝろに聞きゆる御み教をしへの聲こゑ。

二

迷まよふものよ早はやく來きたれと手てを延のべて

長閑のどかな顔かほに招まねかせ玉たまふ。

三

村雲むらくもは心こころの空そらに塞ふさがりて  
見みえ分わかぬまで眼まなこくらめり。

四

村肝むらぎもの心こころの眼押まなこおし開ひらき  
救すくはむとして出いでましにけり。

五

何人なにびとが吾われを招まねくと辿たどり行ゆけば  
瑞みづの御靈みたまの立たち玉たまふ影かげ。

六

近寄ちかよりて勇いさみ喜よろこぶ耳みみの中うちに  
入いりしは愛あいの御聲みこゑなりけり。

七

浅間あさましきわが心根こころねを知しり玉たまふ  
神かみの御前みまへの恥はづかしきかな。

八

皇神すめかみに捨すてられむかと煩わづらひつ  
進すすみて見みれば御聲みこゑ變かはらず。

九

瑞御靈聲みづみたまこゑもやさしく世よの中なかに  
迷まよひし聖人ひじりを教をしへ玉たまへる。

第四四五

一

神代かみよより秘ひめ置おかれたる綾あやの里さとに

御教みをしへを聞きく今日けふの樂たのししさ。

二

枉まが神かみの醜しこの企たくみも災わざはひも  
知しららずずに過すこす神かみの花園はなその。

三

玉たまの井いの嚴いづの眞まし清しみ水づ汲くみあ上あげて  
渴かわきし魂たまを癒いやし玉たまひぬ。

四

類たぐひなき世よの喜よろこびは御みめぐみ惠の  
神かみと静しづかに憩いこふ時ときなる。

五

譯わけもなき願ねが言ごとさへも忍しのびつ  
受うけさせ玉たまふ救すくひの御みかみ神よ。

六

あやまてる世よ人ひとに教のりを垂たれ玉たまひ  
餓うゑし心こころに力ちからを賜たまふ。

七

定<sup>さだ</sup>めなき浮<sup>うき</sup>雲<sup>ぐも</sup>の世<sup>よ</sup>を後<sup>あと</sup>にして  
秘<sup>ひ</sup>め置<sup>お</sup>かれたる花<sup>はな</sup>園<sup>ぞの</sup>に行<sup>ゆ</sup>かむ。

八

御<sup>み</sup>惠<sup>めぐみ</sup>の清<sup>きよ</sup>き神<sup>すがた</sup>姿<sup>た</sup>の玉<sup>たま</sup>の井<sup>ゐ</sup>に  
映<sup>うつ</sup>るも嬉<sup>うれ</sup>し月<sup>つき</sup>の大<sup>おほ</sup>神<sup>かみ</sup>。

第四四六

一

わが魂<sup>たま</sup>を惠<sup>めぐ</sup>ませ玉<sup>たま</sup>ふ瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>

天津港へみちびき玉へ。

二

風荒び波高まりてわが船は  
沈まむとす救はせ玉へ大神。

三

頼るべき方だにもなきわが魂を  
恵ませたまへ仁慈の神。

四

御<sup>み</sup>惠<sup>めぐ</sup>の珍<sup>うづ</sup>の翼<sup>つばさ</sup>の下<sup>した</sup>影<sup>かげ</sup>に  
抱<sup>いだ</sup>かれし身<sup>み</sup>は樂<sup>たの</sup>しかりけり。

五

曇<sup>くも</sup>りたる世<sup>よ</sup>人<sup>びと</sup>のため<sup>に</sup>に瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>  
救<sup>すく</sup>はむとして下<sup>くだ</sup>りましけり。

六

疲<sup>つか</sup>れたる魂<sup>たま</sup>を慰<sup>なぐさ</sup>め玉<sup>たま</sup>ひけり  
内<sup>うち</sup>と外<sup>そと</sup>とを清<sup>きよ</sup>めすまして。

七

玉たまの緒をの命いのちのもととあれませる  
元津御神もとつみかみに會あはせ給たまはれ。

八

枯かれ果はてしわが魂たましひを潤うるして  
榮光さかえを賜たまふ瑞みづの大おほ神かみ。

第四四七

一

姉妹おとどいの天あめの眞名井まなゐの御み禊そぎより

現あらはれましし瑞みづの大神おほかみ。

二

瀧たき津つ瀬せの涙なみだも百ももの詫言わびごとも  
罪つみを償つぐなふ力ちからだになし。

三

只ただ神かみの恵めぐみの露つゆに恵めぐまれて  
重おもき罪つみ科とが赦ゆるさるるのみ。

四

嚴<sup>いづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>のまさざれば  
われは生<sup>い</sup>くべき力<sup>ちから</sup>だになし。

五

現<sup>うつ</sup>世<sup>しよ</sup>も亦<sup>また</sup>靈<sup>かく</sup>界<sup>りよ</sup>も隔<sup>へ</sup>てなく  
守<sup>まも</sup>らせ玉<sup>たま</sup>ふ元<sup>もと</sup>津<sup>つ</sup>大神<sup>おほかみ</sup>。

第四四八

一

災<sup>わざはひ</sup>に惱<sup>なや</sup>む諸<sup>もろ</sup>人<sup>びと</sup>はや來<sup>きた</sup>れ

救すくひの神かみはここにあれます。

二

言こと靈たまの御み水い火きに迷まよひの夢ゆめ覺さめて  
日ひは輝かがきぬ心こころの空そらに。

三

武もの士のふの猛たけき心こころも和やはらぎて  
嚴いづの御み前まへに太ふ祝との詞りと宣のる。

四

泡沫うたかたの水みな泡わと消きゆる名なを捨すてて  
醜しこの博士も大前のしりおほまへに伏ふせ。

五

遣やる瀬せなき老おいさらばひし人ひとさへも  
神かみの御前みまへに笑ゑみ榮さかゆなり。

第四四九

一

世よの務つとめ果はてて神國みくにに歸かへりなば

愛の御聲をかけさせ玉へ。

二

常久に果てしも知らに榮え行く  
神の御園は樂しき住家よ。

三

疑の雲もあとなく晴れぬらむ  
嚴の御靈の下りましなば。

四

東雲しののめの雲くもに跨またがり元津都もとつくにに  
下くだらせ玉たまふ瑞みづの大神おほかみ。

第四五〇

一

朝あさ咲さきて夕ゆふへも待またぬ朝顔あさがほの  
萎しをるる花はなに迷まよふ人ひとあり。

二

春はるの雨あめ秋あきの夕ゆふへの露つゆ時し雨ぐれ

涙<sup>なみだ</sup>とともに祈<sup>いの</sup>る母<sup>はは</sup>神<sup>がみ</sup>。

三

垂<sup>た</sup>乳<sup>ら</sup>根<sup>ちね</sup>の恵<sup>めぐみ</sup>の胸<sup>むね</sup>に抱<sup>いだ</sup>かれて  
哺<sup>はぐ</sup>育<sup>く</sup>まれたる昔<sup>むかし</sup>忘<sup>わす</sup>るな。

四

村<sup>むら</sup>肝<sup>きも</sup>の心<sup>こころ</sup>を千<sup>ち</sup>々<sup>ぢ</sup>に碎<sup>くだ</sup>きたる  
報<sup>むく</sup>いありしと喜<sup>よろこ</sup>ばせ母<sup>はは</sup>を。

五

漸やうやくに世よに立たつ身み魂たまとなりぬれば  
母ははの惠めぐみを忘わする凡ただびと俗と。

六

母はは神がみの此この世よに居ゐます其その中うちに  
御み袖そでに縫すがれ四よ方もの民たみ草ぐさ。

第四五一

一

御み惠めぐみの雨あめは静しづかに降ふり來きたり

雪霜消えて山は笑ひぬ。

二

御言葉に春の花まで頷きて  
旭長閑に匂ひけるかな。

三

夕立の早過ぎ行きて勇み立つ  
木草の葉末に月はほほ笑む。

四

雨あめと露つゆに苗潤なへうるほせば秋あきの田たの  
黄金こがねの垂穂たりほ浪打なみうち寄よするも。

五

春はる生いかし夏なつには育そだて秋稔あきみのらせ  
冬休ふゆやすまする洽あまねき恵めぐみよ。

(大正一二・五・一三 舊三・二八 隆光録)

第五篇 金龍世界きんりうせかい

第二章 神悟（一五九六）

第四五二

一

あかつきつ  
曉告ぐる笛の聲

とえう  
十曜の御旗翩翩と

あまつみかぜ  
天津御風に翻り

かみ  
神の御稜威を現せり

うづ  
珍の言靈畏みて

にしき  
錦の御旗十曜の旗

せんとう  
先頭に押し立て

いくさ  
軍に向つて進む聲

あまつそら  
天津空より聞え來る

いざ  
いざ立て進め御軍よ。

二

怪しき諸の疑ひに  
 神の御園に翻る  
 誠の軍の勝鬨を  
 誠の法の判るまで  
 仇の虜となり果てし  
 救へや救へ諸共に  
 取圍まれし十曜の旗  
 益良猛夫よいざ進め  
 あげて御國の大神の  
 いざいざ進めいざ進め  
 神の御子をば逸早く  
 神は汝と俱にあり。

三

仇は漸く色めきて  
 わが御軍の勝鬨は  
 疲れはてたる兵士よ  
 喉潤はせ仇神の  
 籠る根城に言靈の  
 進めよ進めよいざ進め  
 旗色悪しくなり往きぬ  
 今日目の當り近づきぬ  
 瑞の御靈の眞清水に  
 進めよ進めよいざ進め

神かみは汝なんぢと俱ともにあり。

第四五三

一

関とぎの聲こゑ松まつ吹ふく風かぜとなりにけり  
十曜とえうの御旗みはた翻ひるる朝あさ。

二

言こと靈たまの軍いくさの主きみの勇いさましく  
進すすむを見みれば惟かむ神ながらならめ。

三

戦<sup>たたか</sup>はぬ先に<sup>さき</sup>に<sup>あだ</sup>仇をば呑<sup>の</sup>み盡<sup>つく</sup>す  
神<sup>かみ</sup>の軍<sup>いくさ</sup>の勇<sup>いさ</sup>ましきかな。

四

御旗<sup>みはた</sup>かざし千座<sup>ちくら</sup>を負<sup>お</sup>ひて進<sup>すす</sup>み往<sup>ゆ</sup>く  
兵士<sup>もののふ</sup>の歌<sup>うた</sup>勇<sup>いさ</sup>ましく聞<sup>きこ</sup>ゆ。

五

言<sup>こと</sup>霊<sup>たま</sup>の嚴<sup>いづ</sup>の鋭<sup>すど</sup>き鉾<sup>ほこ</sup>先に<sup>さき</sup>に  
當<sup>あた</sup>るべきかは仇<sup>あだ</sup>の司<sup>つかさ</sup>も。

六

神かみの名なにふさはしからむ功いさをしを  
樹たて貫つらぬけよ神軍人みいくさびとよ。

七

永とこしへ久への勝かちを望のぞみて進すすめかし  
嚴言いづことたま靈たまに刃はむか向むかふ仇あだなし。

第四五四

一

慈愛いつくしみの珍うづの眞清ましみづ水溢あふれつつ  
賤しづの身みをさへ露つゆほしたまふ。

二

御姿みすがたを眞名まな井いにうつせ瑞御靈みづみたま  
道みちの鏡かがみとのぞき見るまで。

三

天津國あまつくにの永久とほの榮さかえは湧わき出いづる  
生命いのちの水みづに現あらはれにけり。

四

御顔かんばせを仰あふぎまつりて恐おそれなく  
父ちちよ母ははよと慕したひまつりぬ。

五

皇神すめかみの御姿みすがたの儘ままに生あれ出いでし  
人ひとは神かみの子こ神かみの宮居みやゐぞ。

第四五五

一

隔へだてなく人ひとをなぐさめ慈いづくしむ

清きよき心こころは神かみにぞありける。

二

身みを忘わすれ力ちから限かぎりに大おほ道みちに  
仕つかへまつれよ珍うづの御み子こ達たち。

三

村むら肝きもの心こころ一ひとつに固かためつつ  
身みも棚たなしらに仕つかへまつらむ。

四

彌榮いやさかに榮さかえ目めで出度たき神かみの園そのは  
常磐ときはの松まつケ枝がえ水みづに浮うかべり。

第四五六

一

宣傳つかひ使び手てに手てに御旗みはたかざしつ  
登のぼり行ゆくかも神路かみぢの山やまへ。

二

宣傳みつかひ使まへの前まへには炎ほのほも消きえてゆく

神かみの御み稜い威づの身みに満みちぬれば。

三

太た刀ち劍つるぎ脆もろく碎くだけて跡あともなし  
攻せめあぐみたる曲まがの砦とりでは。

四

神かみ旗はたをば驕かざして進すすめ言こと靈たまの  
軍いくさの君きみよ怯おめず臆おくせず。

五

御光みひかりに包つつまれながら花はな匂にほふ  
春野はるのを通かよふ言こと靈たま軍いくさよ。

## 第四五七

一

天あまの河かはいと安やすらけく渡わた會らひの  
神かみの御み許もとに進すすむ嬉うれしさ。

二

天あ降もります日ひを數かぞへつつ教のりの友ともは

仰あふぎまつらむ玉たまの御門みかどに。

三

一ひと度は絶たえし縁えにしも故郷ふるさとに  
いと頼たのもしく遇あはむとぞ思おもふ。

四

消きえ往ゆきし星ほしは再ふたび輝かがきて  
望のぞみし道みちも明あかくなりぬる。

五

親おやと子こと妹いも背せと友ともと歡よろこぎあふ  
目め出で度た國くには神かみの在ます國くに。

六

雲くもは散ちり霧きりは跡あとなく消きえ果はてて  
同おなじ姿すがたをうつす神かみ國くに。

第四五八

一

身からだ體たまはよし奥おく津つ城きにねむるとも

魂たまは醒さめなむ元津神國もとつみにに。

二

行ゆく魂たまを救すくひ助たすけて元津國もとつくにに  
導みちびきたまふ天津御使あまつみつかひ。

三

一ひとたび度は死し出での山路やまぢを渡わたりつつ  
墓はかの彼方あなたの神國みくにに入いらむ。

四

御みめぐみ惠の露つゆ奥おく津つ城きに眠ねむりたる  
人ひとを慕したひて信まめ徒ひとの泣なく。

## 第四五九

一

身からだ體たまは底そこ津つ岩いは根はねに魂たましひは  
神みくに國の園そのに永と久はに納をさまる。

二

人ひとの身みは生いくるも死まかるも惟かむ神ながら

御旨みむねのままに任まかす外ほかなし。

三

兄弟はらからは遺骸なきがらを見て悲かなしめど  
天津使あまつつかひは喜よろこび迎むかふる。

四

天津日あまつひの輝かがやき渡わたる神園かみそのに  
茂しげる木草きぐさの麗うるはしきかな。

五

繫つながれし浮世うきよの枷かせは碎くだかれて  
慈愛めぐみの主きみと住すまむ樂たのしさ。

六

死しに行ゆきしわが同はら胞からと喜よろこびて  
相見あひみむ折をりを與あたへませ教き主み。

第四六〇

一

瑞御靈みづみたま天降あもりたまひてエルサレムに

教をしへの庭にはを開ひらきたまへる。

二

世よを審判さばくために遙々はるばる下くだります  
教主きみの心こころに叶かなひたきもの。

三

永とこしへ久くの神かみの御國みくにの民たみとして  
恵めぐませたまへ瑞みづの大神おほかみ。

四

日ひに夜よるに御み稜いづ威づ稱たたふる歌うたの聲こゑを  
主きみは漏もれなく聞きこし召めすらむ。

五

今け日ふの日ひも罪つみ汚けがれなく穩おたかに  
榮さかえと共ともに送おくらせたまへ。

六

御み心こころにまかせまつりしわが魂たまを  
惠めぐませたまへ彌いや永久とこしへに。

第四六一

一

天津使國津使も諸共に  
惠あふるる御神を稱へよ。

二

天地に惠溢るる皇神の  
御名の榮えを祈る信徒。

三

父ちちと子こと清きよき御み靈たまの大おほ前まへに  
堅かき磐は常とき磐はの榮さかえあれかし。

四

天あめが下したに住すむ民たみ草ぐさは聲こゑを合あはせ  
嚴いづの榮さかえを稱たたへまつれよ。

五

精せい靈れいの嚴いづの力ちからと瑞みづ御み靈たま  
元もと津つ御み神かみの惠めぐみ永と久はなれ。

六

天地の民悉く三柱の  
神の御稜威を稱へまつれよ。

（大正一二・五・一三 舊三・二八 於教主殿 明子録）

第二章 神樹（一五九七）

第四六二

—

葦原の瑞穂の國のことごとくは

天津御神の御許に仕ふ。

二

天地のすべてを造り玉ひたる  
神の御前に山河寄り來む。

三

山河も皇大神の大前に  
より來仕ふる御代ぞ尊き。

四

言<sup>こと</sup>の葉<sup>は</sup>も胸<sup>むね</sup>の思<sup>おも</sup>ひもよるこびも  
みな皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>のめぐみし賜<sup>たま</sup>もの。

五

大<sup>おほ</sup>前<sup>まへ</sup>に地<sup>くに</sup>のことごと集<sup>あつ</sup>まりて  
みいづ稱<sup>た</sup>へむ日<sup>ひ</sup>は近<sup>ちか</sup>づきぬ。

六

石<sup>いそ</sup>の上<sup>かみ</sup>ふるき神<sup>かみ</sup>代<sup>よ</sup>の初<sup>はじ</sup>めより  
神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>國<sup>くに</sup>とえらまれし大<sup>く</sup>和<sup>に</sup>。

七

神かみの民たみとえりぬかれたる國くに人のびと  
さすらひの夢ゆめも今いまは醒さめけり。

八

葦原あしはらの中津御國なかつみくにに降くだります  
教をしへの主きみを仰あふぎつつ待まつ。

九

よろこびを胸むねにたたへて皇神すめがみの  
いづの救すくひをまつの代よのたみ。

わが魂たまよ貴うづの教をしへによみがへり  
雲くもより來きたる神かみにならへよ。

第四六三

一

限かぎりなき教をしへの神かみの御み恵めぐみを  
心こころにとめて夢ゆめな忘わすれそ。

二

いたづきの身みもやすかれと朝夕あさゆふに

わが皇神はわづらひたまふ。

三

ほろびゆく生命を救ひ愛の雨を  
そそがせ玉ふ瑞の大神。

四

ゆたかなる恵の雨の降りそそぎて  
怒のちりを清めさせたまひぬ。

五

とこしへに怒いからせたまふ事こともなく  
せむることなき瑞みづの大神おほかみ。

六

人ひとの罪つみを數かぞへたまはず憎にくみまさず  
只ただ愛あいのみを御身みまとなしたまふ。

七

天津空あまつそらの高たかきがごとく皇神すめかみの  
みいづはスメール山ざんも及およばじ。

八

東西ひがしにしわか分わかるるごとくわが罪つみを  
遠とほざけたまふ仁愛みろくの大神おほかみ。

九

始はじめなく終をはりも知しらに榮さかえませ  
すべてを造つくり守まもる大神おほかみ。

第四六四

一

千引岩動ちびきいはうごかぬ主きみの御惠みめぐみを

ちから  
力となして進む嬉しさ。

二

よしみ  
喜びの聲を揃へて皇神の  
あれます都を讃め稱へかし。

三

あめつち  
天地の總ての神を統べ玉ふ  
まこと  
誠の神は嚴の大神。

四

足<sup>あし</sup>曳<sup>びき</sup>の山<sup>やま</sup>の頂<sup>いただ</sup>き海<sup>うみ</sup>の底<sup>そこ</sup>も  
皆<sup>みな</sup>皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>手<sup>て</sup>にありけり。

五

海<sup>うみ</sup>陸<sup>く</sup>を造<sup>つく</sup>り玉<sup>たま</sup>ひし皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の  
御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>と生<sup>うま</sup>れし人<sup>ひと</sup>は神<sup>かみ</sup>なり。

六

跪<sup>ひざまじ</sup>きてわが身<sup>み</sup>生<sup>う</sup>ましし元<sup>もと</sup>津<sup>つ</sup>祖<sup>おや</sup>を  
綾<sup>あや</sup>の高<sup>た</sup>天<sup>か</sup>原<sup>ま</sup>に伏<sup>ふ</sup>し拜<sup>をが</sup>むかな。

七

むらきも  
村肝こころの心の清きよき供物そなへもの  
受けさせ玉たまへ元津大神もとつおほかみ。

八

ち  
地の限かぎりその大前おほまへに畏かしこみて  
いと美うつくしく稱たたへまつれよ。

九

ただ  
正ただしきと誠まことをもちて諸々もろもろの  
民たみを審さばかせ玉たまふ時とき來きぬ。

元津御祖嚴と瑞との二柱の  
御稜威常磐にあれと祈りつ。

## 第四六五

一

神國には御榮光あれや地の上は  
平穩あれよ恵みあれかし。

二

皇神を讃めつ稱へつ拜みつ

御み榮さ光かえ仰あふぎて御み稜いづ威づを崇あがむ。

三

天あめにます大おほく國に常とこ立たち大おほ神かみは  
總すべてのもののまこと誠まことのおや祖おやなり。

四

祖おや神がみは瑞みづのみたま御み靈たまのみづ瑞みづのこ子こを  
下くだしてよ世よをすくば救すくはせ玉たまふ。

五

世よの罪つみをわが身み一つひとに引受ひきうけし  
瑞みづの御靈みたまの恵めぐみ畏かしこし。

六

穢けがれたるわが魂たましひを洗あらへかし  
瑞みづの御靈みたまの教をしへの主きみよ。

七

皇神すめかみの右みぎにまします瑞御靈みづみたま  
わが祈いのりをも受うけさせ玉たまへ。

八

いと清く尊き瑞の神靈  
嚴の御靈は世を生かしますも。

九

嚴御靈瑞の御靈は祖神の  
榮光の中にいや榮え玉ふ。

第四六六

一

神路山五十鈴の川の水上に

世よを照てらします神かみはましけり。

二

暗くらき世よを照てらさむ爲ために嚴いづ御み靈たま  
教祖みおやの宮みやに下くだりましけり。

三

更かう生せい主しゆの魂たまに宿やどりて天あめ地つちの  
奇くしき誠まことを諭さとし玉たまへり。

四

攻め来る醜の仇さへ憎まずに  
言向和す瑞の大神。

五

遠津祖世々の祖等に仕へよと  
教へ玉ひぬ瑞の御靈は。

六

世を照す油の教主はあれましぬ  
古き誓ひを證しせむため。

七

御教みをしへの聖きよき義ただしき言ことの葉はに  
仕つかふる身みこそ樂たのしかりけり。

八

精靈せいれいを充みたし玉たまひて更かう生せい主しゆに  
天あ降もりし國くにの常とこ立たちの神かみ。

九

老おいの身みを賤しづが伏ふ屋せやに横よこたへて  
明あかき尊たふとき道みちを宣のべけり。

皇神すめかみの深ふかき惠めぐみに罪人つみびとを  
救すくはむとして下くだりましけり。

一一

御惠みめぐみの珍うづの光ひかりは死しの影かげと  
暗くらき身み魂たまを照てらしましけり。

一二

わが足あしを安やすき道おほぢに導みちびかむと  
輝かがやき玉たまふ嚴いづの大おほ神かみ。

第四六七

一

わが心こころ嚴いづの御靈みたまを崇あがつめつ  
喜びよろこ祝いはふ更生かうせいの神かみを。

二

元もと津つ神かみ嚴いづの御靈みたまの御教みをしへを  
傳つたへ玉たまへる更生かうせいの御神みかみ。

三

瑞御靈萬代までもわが魂を  
眞幸くあれと守りますかも。

四

御力に富ませ玉へる嚴の神は  
わが身を尊きものとなしませり。

五

名は清く恵の深き皇神を  
畏るるものは世々恵まれむ。

六

むらぎも  
村肝こころの心おこ驕おごれる  
まがびと  
枉人まがびとの  
まが  
曲まがを散ちらして救すくはせ玉たまふ。  
玉たまふ。

七

たかやま  
高山たかやまの伊保里いほりを分わけて谷たにに下くだし  
いやしきものを上のぼらせ玉たまふ。  
玉たまふ。

八

うゑ  
飢渴うゑく人ひとをば飽あかせ富とめるものも  
ゆる  
許ゆるさせ玉たまふ日は近ちかづけり。  
玉たまふ。

九

神孫かみのこと其御裔そのみすゑをば限りなく  
憐れみ玉あはたまふ元津大神もとつおほかみ。

一〇

遠津祖とほつおやに誓ちかひ玉たまひし言ことの葉はを  
現あらはし玉たまふ時ときは來きにけり。

一一

古いにしへの神かみの誓ちかひを詳細まつぶさに  
證あかさせ玉たまふ瑞みづの大神おほかみ。

第四六八

一

新あたらしき御み歌うたを神かみの大おほまへ前に  
向むかひて歌うたへ聲こゑも涼すずしく。

二

神かみ津つよ代の奇くしき尊たふとき物ものがたり語  
中なかに交まじはる嚴いづの御み歌うたを。

三

御救みすくひをし知らせただせ正ただしき理ことわりを  
世よの悉ことごとにしめ示しめさせ玉たまふ。

四

瑞御靈みづみたまあらは現まれまして五十鈴いそすずの  
家いへを堅磐かきはにまも守まもらせ玉たまふ。

五

地ちのはかみても神かみの救すくひをえ得えたりけり  
聞きけよ諸人神もろびとかみの言ことば葉はを。

六

琴ことの音ねと歌うたの聲こゑもて皇神すめかみを  
崇あがめまつれよ上かみにある人ひと。

七

海うみも山やまも皆みな諸もろ共ともに鳴なり動どよみ  
やがては神かみの御代みよとなるべし。

八

瑞御靈神みづみたまかみの御前みまへに手てを拍うてば  
山川やまかはとも共に聲こゑ舉あげて答こたへむ。

九

地ちの上うへの總すべてのものは大前おほまへに  
戰をのき畏かしこみ仕つかふる御代みよかな。

一〇

地ちの上うへの總すべての民たみを審さばかむと  
下くだり玉たまひぬ神かみの言葉ことばに。

#### 第四六九

一

節分せつぶんの夜よに退やはれし我神わがかみの

再び現れます時は來にけり。

二

邪心と惡徳を捨てて愛善の  
誠の種子を地の上に蒔け。

三

瑞御靈東の空に甦り  
雲に乗りつつ來る日近し。

四

罪つみに死しし神かみに生いきたる瑞御靈みづみたま  
今いまは此この世よの柱はしらなりけり。

五

至し聖せいなる舊もとの都みやこに雲くもの如ごと  
降くだらせ玉たまふ時ときは來きにけり。

六

時とき満みちて救すくひの神かみは元津國もとつくにに  
甦よみがへりましぬ來きたりて崇あがめよ。

七

瑞御靈みづみたま五み六ろ七くのもとに寄より集つどふ  
誠まことのひと人に生いのち命たま賜たまはむ。

## 第四七〇

一

三柱みはしらの御前みまへに向むかひて喜よろこびの  
聲こゑをあげつつつ謠うたひ舞まへかし。

二

わが身み魂たま生ませ玉たまひて懇ねもころに

はぐく  
哺育みたまふ元津祖神。  
もとつおやがみ

三

からだま  
身體も  
みたま  
靈魂も  
かみ  
神のものならば  
ただみこころ  
只御心に任すのみなり。

四

あやしきいづ  
綾錦嚴の御門に寄り來り  
ほ  
讚めよ稱へよ嚴の御前に。  
みかど  
よ  
きた  
みまへ

五

千<sup>ち</sup>早<sup>はや</sup>振<sup>ふ</sup>る 神<sup>かみ</sup>代<sup>よ</sup>は 愚<sup>おろ</sup>か 萬<sup>よろづ</sup>代<sup>よ</sup>の  
末<sup>すゑ</sup>も 守<sup>まも</sup>ら ず 元<sup>もと</sup>津<sup>つ</sup>大<sup>おほ</sup>神<sup>かみ</sup>。

第四七一

一

惟<sup>かむ</sup>神<sup>ながら</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>幸<sup>さち</sup>ひ ましませと  
三<sup>み</sup>柱<sup>しら</sup>神<sup>がみ</sup>の 御<sup>み</sup>前<sup>まへ</sup>に 祈<sup>いの</sup>る。

二

スメールの山<sup>やま</sup>は何<sup>いづ</sup>處<sup>く</sup>と 打<sup>うち</sup>仰<sup>あふ</sup>ぐ

わが目に映る紫の雲。

三

わが魂を助け守らす皇神は  
三柱神の外なかりけり。

四

わが持てる五官の機關あるうちに  
祈れよ稱へよ勤しみ仕へよ。

五

葦原あしはらの地ちのことごと悉まもを守りまもます  
神かみは夜よる晝ひる眠ねむり玉たまはず。

六

人ひとは只ただ神かみのまも守りまもを受うくるより  
外ほかに榮さか光かえのみち道みちこそ無なけれ。

七

夜よのまも守りまも日ひるのまも守りまもと月つき日ひのかみ神かみは  
光ひかりめぐ恵めぐみをあた與あたへ玉たまひぬ。

八

諸々の醜の災打拂ひ  
わが魂を守らせ玉ふ。

九

皇神は永久までも汝が身の  
出づると入るとを守り玉はむ。

（大正一二・五・一四 舊三・二九 隆光録）

第二三章 神導（一五九八）

第四七二

一

身體からだと靈魂たましひまでに祖神おやがみは  
要いるべきものを與あたへ玉たまひぬ。

二

花はな薰かる野邊のべに遊あそばせ息休いきやすむ  
汀みぎはに清きよく住すまはせ玉たまふ。

三

わが魂たまを生いかし尊たふとき御名みなの故ゆゑに  
正ただしき道みちに導みちびき給たまふ。

四

皇神すめがみは恵めぐみの笈杖しもとつゑをもて  
弱よわき身魂みたまを立たたせ給たまひぬ。

五

御恵みめぐみの露つゆの溢あふる杯さかづきは  
わが魂たましひ潤うるほし給たまふ。

六

御<sup>み</sup>惠<sup>めぐ</sup>みの花<sup>はな</sup>咲<sup>さ</sup>く綾<sup>あや</sup>の花<sup>はな</sup>園<sup>その</sup>に  
集<sup>つど</sup>ふ身<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>ぞ樂<sup>たの</sup>しかりけり。

第四七三

一

皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の定<sup>さだ</sup>め給<sup>たま</sup>ひし大<sup>おほ</sup>神<sup>かみ</sup>教<sup>のり</sup>を  
守<sup>まも</sup>らせ給<sup>たま</sup>へ朝<sup>あさ</sup>な夕<sup>ゆふ</sup>なに。

二

皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>は言<sup>こと</sup>葉<sup>は</sup>の儘<sup>まま</sup>にわが魂<sup>たま</sup>を

導<sup>みちび</sup>き給<sup>たま</sup>ふ珍<sup>うづ</sup>の宮<sup>みや</sup>居<sup>ゐ</sup>に。

三

清<sup>きよ</sup>まりし眼<sup>まなこ</sup>に映<sup>うつ</sup>る神<sup>みす</sup>姿<sup>がた</sup>は  
東<sup>しの</sup>雲<sup>のめ</sup>の空<sup>そら</sup>仰<sup>あふ</sup>ぐ如<sup>ごと</sup>くなり。

四

外<sup>とつ</sup>國<sup>くに</sup>の<sup>ひと</sup>人<sup>の</sup>身<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>も照<sup>てら</sup>します  
神<sup>かみ</sup>の<sup>ひかり</sup>光<sup>を</sup>崇<sup>あが</sup>めまつれよ。

五

皇神すめかみの選えらみ給たまひし至し聖せい地ちは  
廣ひろき御み惠めぐみの泉いづみなりけり。

六

大前おほまへに捧ささぐる百ももの種たなつもの子物も  
皆みな皇神すめかみの造つくらししもの。

七

さり乍ながら吾等われらの清きよき眞心まじこころを  
受うけさせ給たまへいと平たひらかに。

第四七四

一

御<sup>み</sup>惠<sup>めぐ</sup>みの清<sup>きよ</sup>き御<sup>み</sup>顔<sup>かほ</sup>をわが上<sup>うへ</sup>に  
照<sup>てら</sup>させ給<sup>たま</sup>へ幸<sup>さち</sup>はひ給<sup>たま</sup>へ。

二

大<sup>おほ</sup>道<sup>みち</sup>は普<sup>あまね</sup>し地<sup>つち</sup>のはし<sup>し</sup>ばしに  
救<sup>すく</sup>ひの教<sup>のり</sup>を知ら<sup>し</sup>さむ爲<sup>ため</sup>に。

三

朝夕あさゆふに感謝かんしゃ祈願きぐわんの太祝詞ふとのりごと  
宣のる氏うぢの子こを惠めぐませ給たまへ。

四

皇神すめかみの現あらはれまして善惡よしあしを  
審さばき給たまはむ時ときは來きにけり。

五

地裂つちさけて寶現たかあらはれ埋うづもれし  
御玉みたまは清きよく高たかく榮さかえむ。

六

山川やまかはもよりて仕つかふる神かみの代よに  
生うまれ出いでたる人ひとの幸さちかも。

## 第四七五

一

瑞御靈みづみたま現あらはれ給たまふ時とき來くれば  
荒野あらのに沙漠さばくに川かはも流ながれむ。

二

潤うるほひを知らぬ國土くぬちも御功績みいさをに

清<sup>きよ</sup>き清<sup>しみづ</sup>水の源<sup>みなもと</sup>と變<sup>かは</sup>らむ。

三

山<sup>やまいぬ</sup>犬の棲<sup>すみか</sup>處も神<sup>かみ</sup>の代<sup>よ</sup>とならば  
よしあし茂<sup>しげ</sup>る沼<sup>ぬま</sup>と變<sup>かは</sup>らむ。

四

丹<sup>あかなみ</sup>波の山<sup>やま</sup>の奥<sup>おく</sup>にも皇<sup>すめかみ</sup>神の  
聖<sup>きよ</sup>き大道<sup>おほぢ</sup>は開<sup>ひら</sup>かれにけり。

五

穢けがれたる人ひとは聖地せいちに入るいを得えず  
迷まよひの雲くもの晴はれやらぬ間うちは。

六

さり乍ながら恵めぐみの神かみは穢けがれをも  
憐あはれみ給たまひ濺すがせ給たまふ。

七

攻せめ寄よせし獅子ししも來きたらず鬼おに大蛇をろち  
再ふたび襲おそふ事こともあるまじ。

八

醜<sup>し</sup>虎<sup>こ</sup>の爪<sup>つめ</sup>磨<sup>と</sup>ぎすまし後<sup>うしろ</sup>より  
不<sup>ふ</sup>意<sup>い</sup>に抱<sup>か</sup>へぬ瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>を。

九

枉<sup>まが</sup>ものも瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>に清<sup>きよ</sup>められ  
姿<sup>すがた</sup>を變<sup>か</sup>へて仰<sup>あふ</sup>ぎけるかな。

一〇

道<sup>みち</sup>の邊<sup>へ</sup>に深<sup>ふか</sup>く穿<sup>うが</sup>ちし陷<sup>おとし</sup>弃<sup>あな</sup>に  
倒<sup>たふ</sup>れむとして起<sup>お</sup>き上<sup>あが</sup>りけり。

一一

皇神すめかみの嚴いづの御守みまもりある上うへは  
醜しこの枉津まがつも襲おそふ術すべなし。

一一二

勝鬨かちどきの聲こゑを揃そろへて神かみのます  
珍うづの都みやこへ歸かへる日ひ勇いさまし。

一一三

歌うたひつつ榮光さかえの雲くもに打うち乗りて  
永と久はの榮光さかえの聖地せいちに歸かへる。

一一四

悲<sup>かな</sup>しみも嘆<sup>なげ</sup>きも後<sup>あと</sup>を隠<sup>かく</sup>しけり  
獄<sup>ひとや</sup>舎<sup>な</sup>の中<sup>なか</sup>も神<sup>かみ</sup>の榮<sup>さかえ</sup>光<sup>み</sup>に。

一五

元<sup>もと</sup>津<sup>つ</sup>神<sup>かみ</sup>嚴<sup>いづ</sup>の御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>や瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>  
救<sup>すく</sup>ひの主<sup>ぬし</sup>に御<sup>み</sup>榮<sup>さかえ</sup>光<sup>み</sup>あれや。

第四七六

一

天<sup>あま</sup>津<sup>つ</sup>國<sup>くに</sup>の珍<sup>うづ</sup>の都<sup>みやこ</sup>を地<sup>ち</sup>の上<sup>うへ</sup>に

うつし給ひし大本大神。

二

天になる日毎の糧を地の上に  
恵み給ひぬ綾の高天原に。

三

われに罪を負はせしものを赦す如く  
赦させ給へ世人の罪を。

四

試練に遭はせ給はずわが魂を  
悪より救ひ出させ給へ。

五

神の國の御稜威御榮光御權力は  
堅磐常磐に神のものなれ。

第四七七

あゝ吾は天地の造り主、全智全能の誠の御祖神大國常立之大神を信ず。その聖  
き美はしき大御靈より現はれ給ふ嚴の御靈、瑞の御靈の二柱、聖靈に導かれて綾  
の高天原に降らせ給ひ、現世のあらゆる苦患を受け、嚴の御靈は奥津城に隠れ給

ひ、稚姫君の御霊と共に天津國に上りまし、地の上の總てを憐み恵ませ給ひ、又  
瑞の御霊は千座の置戸を負ひて黄泉に下り、百二十日あまり六日の間虐げられ、  
再び甦りて綾の高天原に上り、無限絶對無始無終の皇大御神の大御恵を傳へ、又  
生ける人と死れる人の靈を清めむが爲めに、神の御使として勤み給ふ瑞の御霊の  
神柱を信ず。又吾は大神の聖靈に充たされたる精靈の變性男子變性女子の肉の宮  
に下り、教の場と信徒の爲に限りなき歡喜と榮光と生命を與へ給ふ事を固く信ず。  
惟神靈幸倍坐世。

#### 第四七八

一

あまつかみおほくにとこたちのおほかみ  
天津神大國常立之大神の

ほかまことかみおも  
外に誠の神ありと思はじ。

二

目に見えぬ神を誠の神として  
敬ひまつれ諸々の民。

三

徒に神の御名をば稱へまじ  
穢れ果てたる言靈をもて。

四

清き日は總ての業を休らひて  
神を齋きて歌へ舞へかし。

五

地ちの上うへの汝なれの生命いのちの永ながかれと  
父ちちと母ははとの神かみを敬うやまへ。

六

よしもなき事ことに生物いきもの殺ころすなよ  
皆みな天地あめつちの身み靈たまなりせば。

七

徒いたづらに白しら日ひ床とこ組くみなす勿なかれ  
神かみの御み業わざの勤つとめ忘わすれて。

八

目を偷み寶を盗み日を竊む  
人こそ神の罪人と知れ。

九

詐りの證を立ててわが罪を  
隣の人に夢なきせまじ。

一〇

仁愛の心忘れて世の人の  
總ての業の妨げなすな。

第四七九

一

小雲こくもの川かはを波枕なみまくら  
 百ももの妨さまたげ艱なやみをも  
 直日なほひに見直みなほし宣のり直なほし  
 何なんの憚はばかる處ところなく  
 暗路やみぢを照てらす神かみの代よの  
 奇くしき尊たふとき物語ものがたり  
 言靈車ことたまぐるま轉ころぶまに 水みづの流ながる音おとを聞きき  
 いと安やすらかに述のべて行ゆく。

二

神かみのかかりて物ものされし  
 瑞みづの言靈ことたま聞きく人ひとは  
 なやみも罪つみも速はや川の  
 波なみに埋うづめて曇くもりなき

光ひかりの神かみの御み惠めぐみに  
神かみと諸もろとも共あゆ歩むべし。  
照てらされ乍ながら正まさ道みちを

三

嚴いづの御み靈たまの御み言こともて  
穢けがれ果はてたる現うつしよ世よを  
立たて直なほさむと朝あさ夕ゆふに  
心こころにかけずスクスクと  
神かみのまにまに述のべて行ゆく。  
述のべ初はじめたる神かみの物ふ語み  
尊たふとき清きよき神かみの代よに  
百ももの司つかさの妨さまたげも  
川かは瀬せの波なみの淀よどみなく

四

高たか天あま原はらに現あらはれし  
皇すめ大おほ神かみの御み榮さか光かえの

冠<sup>かむり</sup>を頂<sup>いただ</sup>き勇<sup>いさ</sup>み立<sup>た</sup>ち  
瑞<sup>みづ</sup>の聖<sup>みたま</sup>靈<sup>たま</sup>に充<sup>み</sup>たされて  
節<sup>ふし</sup>を合<sup>あは</sup>せて述<sup>の</sup>べて行<sup>ゆ</sup>く  
堅<sup>かき</sup>磐<sup>は</sup>常<sup>とき</sup>磐<sup>は</sup>に榮<sup>さか</sup>え行<sup>ゆ</sup>く  
神<sup>かみ</sup>の仕<sup>し</sup>組<sup>ぐみ</sup>ぞ尊<sup>たふと</sup>けれ。  
白<sup>しろ</sup>き衣<sup>ころも</sup>をま<sup>と</sup>ひつ<sup>つ</sup>  
天<sup>あま</sup>津<sup>つ</sup>御<sup>み</sup>神<sup>かみ</sup>の歌<sup>うた</sup>ふ聲<sup>こゑ</sup>に  
此<sup>この</sup>物<sup>もの</sup>語<sup>が</sup>擴<sup>ひろ</sup>がりて

第四八〇

—

朝<sup>あさ</sup>な夕<sup>ゆふ</sup>なに積<sup>つも</sup>りてし  
棄<sup>す</sup>てて高<sup>た</sup>天<sup>か</sup>原<sup>ま</sup>に參<sup>まゐ</sup>り  
咲<sup>さ</sup>き匂<sup>にお</sup>ひたるわが身<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>  
聖<sup>きよ</sup>き尊<sup>たふと</sup>き御<sup>み</sup>名<sup>な</sup>により

數<sup>あまた</sup>多<sup>た</sup>の罪<sup>つみ</sup>科<sup>とが</sup>穢<sup>けが</sup>れをば  
心<sup>こころ</sup>の色<sup>いろ</sup>も新<sup>あたら</sup>しく  
嚴<sup>いづ</sup>の御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>や瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>  
昔<sup>むかし</sup>の神<sup>かみ</sup>のふ<sup>ま</sup>れたる

御跡みあとを慕したひ詳細まつぶさに  
その經緯いきざつを述のべて行く  
あゝ惟かむながらかむながら神々々  
恩賴みたまのふゆをたまへかし。

二

八十やその枉津まがつの醜魂しこたまに  
穢けがされ果はてし烏羽玉うばたまの  
黒くろき汚きたなき身からだ體たまは  
潮しほの八百路やほぢの八潮路やしほぢの  
千尋ちひろの海うみの藻屑もくづとし  
恵めぐみ普あまねき皇神すめかみの  
御跡みあとを踏ふみ分わけ奉たてまつり  
根底ねそこの國くにや中ちゆう有界うかい  
神かみの御國みくにの有様ありさまを  
いと細々こまこまと述のべて行く  
奇くしき靈界れいかいもの物語ものがたり  
開ひらかせ給たまへ四方よもの國くに。

三

瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>の救<sup>すく</sup>ひより  
いと新<sup>あた</sup>しき神<sup>かみ</sup>の世<sup>よ</sup>に  
浸<sup>し</sup>染<sup>み</sup>なく傷<sup>きず</sup>なき日<sup>やま</sup>本<sup>と</sup>魂<sup>たま</sup>  
只<sup>ただ</sup>一<sup>ひと</sup>條<sup>すぢ</sup>に歩<sup>あゆ</sup>み行<sup>ゆく</sup>  
恩<sup>みたま</sup>賴<sup>のふゆ</sup>ぞ尊<sup>たふと</sup>けれ。  
あゝ惟<sup>かむ</sup>神<sup>な</sup>々々  
天津<sup>あまつ</sup>御<sup>み</sup>國<sup>くに</sup>に上<sup>のほ</sup>りなば  
御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>を受<sup>う</sup>けて甦<sup>よみがへ</sup>り  
赤<sup>あか</sup>き血<sup>ち</sup>潮<sup>しほ</sup>の道<sup>みち</sup>筋<sup>すぢ</sup>を

第四八一

一

和<sup>わ</sup>知<sup>ち</sup>川<sup>が</sup>の流<sup>なが</sup>れに罪<sup>つみ</sup>を流<sup>なが</sup>し捨<sup>す</sup>て  
新<sup>あた</sup>しき神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>園<sup>その</sup>に進<sup>すす</sup>む。

二

御園みそのには宣傳みつかひ使數あまたあつま多集りて  
天津御國あまつみくにの教のりを傳つたふる。

三

古ふるびたるわが身みを洗あらひ清きよめつつ  
生いかせ給たまひぬ新あたしき命いのちに。

四

現界うつしよの今日けふを終をはりと思おもひなして  
甦よみがへりてむ神かみの大道おほぢに。

五

身を殺す罪の中をば浮び出でて  
命の汀に今は立ちぬる。

六

現界の夢は水泡と消え果てて  
行かむ花咲き匂ふ神國に。

（大正一二・五・一四 舊三・二九 隆光録）

第二四章 神瑞〔一五九九〕

第四八二

一

大空おほぞらゆ黄金こがねの鳩はとは下くだりけり  
御文みふみ御みへて綾あやの聖地せいぢに。

二

御教みをしへと御名みなを廣ひろげく傳つたふべく  
天翔あまかけり往ゆく八咫鳥やあたらすは。

三

永久とこしへに身みは奥津城おくつぎの墓はかを蹴けり  
白鳥しらとりとなりて天翔あまかけりましぬ。

四

吹ふき棄すつる伊吹いぶきの狭霧さぎりにあれませる  
劍つるぎの御靈瑞みたまみづの大神おほかみ。

第四八三

一

生命いのちの主きみはヨルダンの  
聖きよき御園みそのに來きたりまし  
委細つぶさに宣のらす珍うづの聲こゑ  
黄金こがねの鳩はとは御空みそらより  
含ふくみて清きよく下くだり來くる  
都みやこの空そらぞ美うつくしき。

二

榮さかえの園そのにいそいそと  
河かはの流ながれに御襖みそぎして  
神かみの御足みあしの跡あとを追おひ  
永と久はの備そなへの爲ためぞかし

河瀬かはせの波なみを押しわけて  
天津御國あまつみくにの音おとづれを  
風かぜのまにまに聞きこえけり  
神かみの御園みそのの嫩葉わかばをば  
神かみの選えらみし大聖地だいせいち

進すすみ往ゆく身みは五十鈴いそすずの  
罪つみの跡あとなき神御靈かむみたま  
夜よるなき國くにへ上のぼり往ゆく

三

いと新あたしき奥津城おくつぎの深ふかきに隠かくれたまひたる

教をしへ御祖みおやの靈たましひは天津使あまつつかひに伴ともなはれ

日ひの若宮わかみやに昇のぼりまし老おいず死まからず喜よろこびと

榮さかえに充みてる樂園らくえんに御跡みあととどめて葦原あしはらの

下津御國したつみくにの人草ひとぐさに惠めぐみの露つゆを垂たれたまふ

あゝ惟神かむながらかむながら々々 恩賴みたまのふゆを給たまへかし。

第四八四

一

水仙すいせんの花はなは散ちれども惜をしむまじ  
神かみの御園みそのの種たねを殘のこせば。

二

白雲しらくもにまがふばかりの花はなの山やまを  
仇あだに散ちらすか醜しこの曲風まがかぜ。

三

故郷ふるさとに歸かへりて如何いかに詫わびぬべき  
醜しこの嵐あらしに散ちりし花はなの身みは。

四

花<sup>はな</sup>とばかり輝<sup>かがや</sup>く月<sup>つき</sup>にあこがれて  
知<sup>し</sup>らず知<sup>し</sup>らずに神國<sup>かみくに</sup>に入る。

五

御空<sup>みそら</sup>照<sup>て</sup>る月<sup>つき</sup>の光<sup>ひかり</sup>のなかりせば  
夜<sup>よる</sup>の旅路<sup>たびぢ</sup>を如何<sup>いか</sup>に進<sup>すす</sup>まむ。

六

さやかなる月<sup>つき</sup>の御顔<sup>みかほ</sup>を拜<sup>をが</sup>まむと  
出<sup>い</sup>でにし庭<sup>には</sup>に松<sup>まつ</sup>の露<sup>つゆ</sup>散<sup>ち</sup>る。

七

科戸邊の風の姿は見えねども  
眞帆の孕みを眺めてぞ知る。

第四八五

一

皆人の眠りにつける眞夜中に  
醒めよと來なく山杜鵑。

二

千早振神の社の大前に

劍こるぎかざして大和舞やまとまひする。

三

忍しのび音ねに啼なく杜鵑ほととぎす聲こゑ涸かれて  
今いまは血ちを吐はくよしもなきかな。

四

風雅みやび人の耳みみには入いらぬ杜鵑ほととぎす  
嘆なげきの聲こゑは杣人そまびとのみ聞きく。

五

杜鵑ほととぎす聲こゑは御空みそらに啼なき洩かれて  
月つきの影かげのみ後あとに慄ふるへる。

六

杜鵑ほととぎす啼なく音ねを聞きけばしかすがに  
心こゝろ悲かなしくもなりにけるかな。

七

山々やまやまを啼なき渡わたりつつ杜鵑ほととぎす  
賤しづが伏屋ふせやの空そらに來きにけり。

八

清きよき友ともの寄よりて仕つかふる赤まごころ心を  
雲くも井もにつげよ山やま杜ほととぎす鵲す。

第四八六

一

足あし曳びきの山やまの彼かなた方たに月つき澄すみぬ  
仰あふぎ慕したへよ瑞みづの光ひかりを。

二

月つきの神かみ闇やみを晴はらして圓まる山やまの

清<sup>きよ</sup>き御<sup>み</sup>空<sup>そら</sup>にのぼらせたまふ。

三

電<sup>でん</sup>燈<sup>とう</sup>の光<sup>ひかり</sup>も月<sup>つき</sup>の出<sup>い</sup>でぬれば  
うとまれにけり道<sup>みち</sup>行く人<sup>ひと</sup>に。

四

草<sup>くさ</sup>の葉<sup>は</sup>におく白<sup>しら</sup>露<sup>つゆ</sup>のいと清<sup>きよ</sup>く  
月<sup>つき</sup>の光<sup>ひかり</sup>の添<sup>そ</sup>ひて守<sup>まも</sup>れる。

五

夕立ゆふだちの雲くも晴はれゆきて大空おほぞらに  
涼すずしき月つきの影かげさやかかなり。

六

駒留こまとめてしばし拜をがまむ圓山まるやまの  
珍うづの御空みそらに輝かがやく月つきを。

七

小雲川こくもがはなみ波なみも静しづかに水みづの面もに  
うつれる月つきの影かげは碎くだけつ。

八

水底みなそこに影かげをうつせし松まつケ枝がえに  
月つきは澄すみけり魚うをも住すみけり。

第四八七

一

天あまの河かは小雲こくもの川かはにうつせしか  
機織はたおり姫ひめの衣きぬを洗あらへる。

二

月つき沈しづむ綾あやの大橋おほはしうちわたり

高天原たかあまはらにのぼる神人かみびと。

三

野邊のべに咲く花はなの姿すがたにあこがれて  
宿りやどたまふか月つきの大神おほかみ。

四

奥山おくやまの紅葉もみぢの錦散にしきちらぬ間まに  
求まぎて來きたれよ鹿しかの鳴なく音ねを。

五

あななひ  
三五の月の光を求ぎて來よ  
草葉の露に袖ぬらすとも。

六

かみ  
神の道踏み分けゆけば嬉し野の  
きぎ  
木々の梢に宿る月影。

七

くも  
雲の上の貴人達に聞かせたし  
たにま  
谷間に歌ふ鶯の聲。

第四八八

一

雁かりがねの便たよりも聞きかぬ山やまの奥おくに  
世よを救すくはむと泣なく人ひとのあり。

二

澄すみ渡わたる秋あきの月影つきかげ眺ながむれば  
瑞みづの御靈みたまの俣しのばるるかな。

三

荒風あらかぜに吹ふき捲まくられて白露しらつゆに  
おく月影つきかげも散ちりてけるかな。

四

草くさの葉はの露つゆに宿やどれる月影つきかげを  
醜しこの嵐あらしの散ちらすうたてさ。

五

幾いく褥ふすま重かさねてさへも寒さむき夜半よは  
御空みそらの月つきは霜しもに宿やどかる。

六

老<sup>お</sup>いぬれど澄<sup>す</sup>みきる月<sup>つき</sup>を眺<sup>なが</sup>むれば  
又<sup>また</sup>若<sup>わか</sup>がへりたる心地<sup>こころ</sup>こそすれ。

七

花<sup>はな</sup>散<sup>ち</sup>りて見<sup>み</sup>る影<sup>かげ</sup>もなき梢<sup>こすえ</sup>にも  
月<sup>つき</sup>は静<sup>しづか</sup>に輝<sup>かがや</sup>きにけり。

八

夕<sup>ゆふ</sup>暮<sup>くれ</sup>に悲<sup>かな</sup>しげに鳴<sup>な</sup>く秋<sup>あき</sup>の蟲<sup>むし</sup>の  
聲<sup>こゑ</sup>聞<sup>き</sup>くごとに世<sup>よ</sup>をば果<sup>は</sup>敢<sup>か</sup>なむ。

第四八九

一

蟲むしの音ねは早はやくも絶たえて草くさ枯がれの  
野の邊へにも清きよく月つきは照てりぬる。

二

御み教をしへを聞ききて袂たもとを絞しぼりつつ  
露つゆ野のを分わけて參まゐる嬉うれしさ。

三

白露しらつゆの光目ひかりめ出度でたく輝かがやくは  
月つきの御神みかみの在ませばなりけり。

四

賤しづヶ家がやの軒端のきばの菊きくはしをれけり  
唯ただ一度ひとたびの霜しものいたみに。

五

山々やまやまの木草きくさも如何いかに育そだつべき  
清きよけき月つきの露つゆなかりせば。

六

凧こがらしや時しぐれ雨あめに脆もろく碎くだかれて  
朝露あさつゆに匂におふ紅葉もみぢ散ちりぬる。

七

照てりはえし高たか雄をの山やまの紅葉もみぢも  
いつ木こ枯がらしの吹ふかぬものかは。

八

高たか砂さこの尾を上のへの松まつも秋あきの夜よの  
月つきしなければ淋さびしかるらむ。

第四九〇

一

御空飛ぶ高雄の山の紅葉も  
色づき初めて冬近づきぬ。

二

變り行く色こそ見えね常磐山  
紅葉の色もうつりけるかな。

三

澄み渡る月の桂は清くして  
暗き高雄の峰を照らしつ。

四

晴れ曇り時雨往きかふ冬の空に  
月の光はひとりさやけし。

五

日に月にうつろひ初めし紅葉の  
果敢なく散らむ冬は來にけり。

六

日ひの光ひかり月つきの恵めぐみの露つゆを受うけて  
唐から紅れなに照てれる紅もみぢ葉ば。

七

神かみな無なしの月つきの御み空そらは凧こがらしの  
今いま吹ふかずとも紅もみぢ葉ち散ちり行ゆく。

八

千ち鳥どり鳴なく聲こゑも激はげしき浪なみの音ねに  
妨さまたげられて聞きかぬ時ときかな。

第四九一

一

室むろにさくちばな千花の色いろは赤あかくとも  
神かみの恵めぐみの薰かをりなきかな。

二

大本おほもとに参まゐ來き集つどへる信まめ徒ひとは  
一ひと度たび汲くめよ玉たまの井いの水みづ。

三

神垣かみがきの巖いづの光ひかりを白梅しらうめの  
薰かきりに心移こころうつろひにけり。

四

袖そでなしの衣ころもの胸むねに散ちる花はなは  
常世とこよの國くにの姿すがたなりけり。

五

人ひと戀こふる心こころに道みちはなきものを  
など醜鬼しこおにのさやるなるらむ。

六

飽あきかけし夫婦ふうふの中なかも草枕くさまくら  
旅たびにし行ゆけば又また思おもふかな。

七

膝ひざ元もとに仕つかへまつりし時ときよりも  
戀こひしくなりぬ神かみの大前おほまへ。

八

別わかれても亦また逢あ坂さかの關せきの戸とを  
開ひらかむ道みちを備そなへおかまし。

九

小雲川こくもがはふか深こころき心こころはとめずとも  
又慕またしたはしくなるものぞかし。

（大正一二・五・一四 舊三・二九 於教主殿 明子録）

第二章 神雲しんうん（一六〇〇）

第四九二

—

せまり來くる神代かみよも更さらに白河しらかはの

關せきの戸と開ひらく人ひとの少すくなき。

二

草くさ枕まくら旅たびに出いでては思おもふかな  
綾あやの高たか天かまの大おほ前まへ如い何かにと。

三

白しら雲くもの遠とほく隔へだちし國くに々ぐにゆ  
御み稜い威づ慕したひて來きたる神かみ垣がき。

四

敷島しきしまの大和島根やまとしまねの神かみの庭にはは  
千代ちよに八千代やちよに動うごかざらまし。

五

さざれ石いしの巖いはほとなれる姿すがた見れば  
神かみの都みやこの御榮みさかえを知る。

六

皇神すめかみの珍うづの教をしへは萬代よろづよに  
彌廣いやひろらかに榮さかえますらむ。

七

神垣かみがきの木々きぎの緑みどりは萌もえ出いでて  
神代かみよの春はるを長閑のどかに語かたれり。

八

杜鵑ほととぎす聲こゑ涸かれ果はてて御惠みめぐみの  
露つゆ奥津城おくつぎに忍しのび音ねになく。

第四九三

一

四尾山よつをやま峰みねの諸木もろきも緑みどりして

迎<sup>むか</sup>へ待<sup>ま</sup>つらむミロク<sup>ミロク</sup>の御代<sup>みよ</sup>を。

二

桶<sup>をけ</sup>伏<sup>ふせ</sup>の山<sup>やま</sup>の聖<sup>せい</sup>地<sup>いち</sup>に杜<sup>ほと</sup>鶉<sup>ときす</sup>  
夜<sup>よ</sup>な夜<sup>よ</sup>な來<sup>きた</sup>りてひた啼<sup>な</sup>きになく。

三

三<sup>み</sup>千<sup>ち</sup>年<sup>とせ</sup>の長<sup>なが</sup>き月<sup>つき</sup>日<sup>ひ</sup>を啼<sup>な</sup>き明<sup>あか</sup>し  
今<sup>いま</sup>なほ叫<sup>さけ</sup>ぶ山<sup>やま</sup>杜<sup>ほと</sup>鶉<sup>ときす</sup>。

四

風の宵雨の晨は一人に  
物悲しもよ桶伏の山。

五

人の目に壊たれたりと見ゆれども  
珍の高殿永久に建てり。

六

本宮山若葉をふくむ山鳩の  
影さへ見えぬ闇夜なるかも。

七

谷たにの戸とを押おしわけ歌うたふ鶯うぐひすの  
聲こゑは常世とこよの春はるの魁さきがけ。

八

咲さくとても手た折をる人ひとなき松まつの花はな  
葉末はずゑの露つゆの恵めぐみ知らねば。

第四九四

一

神垣かみがきの松まつの梢こずゑに御空みそら飛とぶ

鶴舞ひ下り千歳を契る。

二

月なくて如何で木草の茂るべきや  
天津光の影のみにして。

三

又しても月の面のみを讃め稱へ  
焦れ顔なる夕暮の空。

四

金龍きんりゅうの池いけの面おもてに澄すむ月つきは  
世よの亂みだれをも知しらず顔がほなる。

五

水鳥みづとりのいと安やすらけく浮うかぶとも  
足あしにひまなき月つきの御心みこころ。

六

神思かみおもふ珍うづの心こころにつながれて  
あこがれ出いできぬ絲いとのまにまに。

七

君きみ知しるや高たか天あま原はらの神かみの園そのに  
身みはよそながらかかる心こころを。

八

神かみ垣がきの月つきの光ひかりをながめつつ  
したたる雫しづくに露うつゆひにけり。

九

神かみ垣がきの松まつの落おち葉ばをかきよせて  
常とこ夜よの暗やみの篝かがり火びとせむ。

大丈夫ますらをの中なかに淋さびしく只ただ一人ひとり  
交まじこるわが身みも神國かみくにのため。

第四九五

一

千早ちはや振ふる神かみの教をしへにしたがひて  
御國みくにに盡つくす外ほかなかりけり。

二

楠船くすぶねののり越こす波なみのいや深ふかく

眞心まごころひとつに御國みくにに盡つくさむ。

三

花はなの色いろは昔むかしながらに變かはらねど  
移うつろひにけり心こころの花はなは。

四

木下こした蔭かげに淋さびしげに咲さきし兄この花はなも  
天津あまつひかり光ひかりをうけて榮さかゆる。

五

空そら蔽おひし醜しこの古ふる木きの倒たふれてゆ  
白しろ梅うめの花はなは世よに出いでにけり。

六

山やま深ふかみ日ひ影かげもささぬ谷たにの底そこに  
薰かをる櫻さくらも月つきの惠めぐみぞ。

七

花はなは散ちり木この葉はも落おちて杣そま人びとの  
手て斧をのの鑄さびとなる老おい木きかな。

八

桶伏をけふせの御山みやまの花はなは散ちらされて  
わが面影おもかげにのみぞ残のこれる。

第四九六

一

古いにしへの神かみの都みやこに吹ふき捲まくる  
嵐あらしの浪なみの打うちかへしかも。

二

科戸邊しなとべの風かぜ吹ふきかへす朝あさぼらけ

浪逆なみさかまきて仇船あだぶね沈めむ。

三

來きて見みれば山やまの諸木もろきは緑みどりすれど  
浦悲うらかなしけれ宮居みやゐの跡あとは。

四

三みちとせ千年せんねんの醜荒浪しこあらなみに漂ただよひて  
現あれましし神かみの宮居みやゐこぼちぬ。

五

桶伏をけふせの山登やまのぼり往ゆく信徒まめひとの  
心こころの空そらに時雨しぐれしにけり。

六

宮脇みやわきに潜ひそめる醜しこの曲神まががみの  
荒ぶあらがままに任まかしたまひぬ。

七

皇神すめがみの心こころは廣ひろし和田わだの原はら  
秘密ひみつの底そこは知しるよしもなし。

八

桶伏をけふせの山やまに夜よな夜よな只ただ一人ひとり  
祈いのる眞人まびとのありと知らしずや。

第四九七

一

白妙しろたへの衣ころもの袖そでに梅うめ薫かをる  
綾あやの高天たかまに詣まうで來きしより。

二

家う族から親族やからうち連つれ立だちて神園かみそのの

教をしへの花はなに酔よふぞ樂たのしき。

三

和衣にぎたへの綾部あやべに薰かをる白梅しらうめは  
心こころの花はなの眼まなこさませり。

四

昔見むかしみし白梅しらうめの木きは老おいぬれど  
花はなの色いろ香かはいとど目出めで度たし。

五

足<sup>あし</sup>曳<sup>びき</sup>の深<sup>みやま</sup>山の奥<sup>おく</sup>に潜<sup>ひそ</sup>むとも  
花<sup>はな</sup>は咲<sup>さ</sup>くなり鳥<sup>とり</sup>歌<sup>うた</sup>ふなり。

六

青<sup>あを</sup>垣<sup>がき</sup>を四<sup>よ</sup>方<sup>も</sup>に繞<sup>めぐ</sup>らす山<sup>やま</sup>里<sup>ざと</sup>に  
清<sup>きよ</sup>き清<sup>しみづ</sup>水の流<sup>なが</sup>れけるかな。

七

都<sup>みやこ</sup>路<sup>ぢ</sup>の塵<sup>ちり</sup>に汚<sup>けが</sup>れし御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>をば  
來<sup>きた</sup>りて滌<sup>すす</sup>げ玉<sup>たま</sup>の井<sup>い</sup>の水<sup>みづ</sup>に。

八

山里やまざとに身みは老おいぬれど靈魂たましひは  
神かみの都みやこの花はなと薰かをれる。

第四九八

一

神園かみぞのの松まつに御靈みたまをと取りかけて  
神去かむさりましぬ教をしへ御祖みおやは。

二

白梅しらばいめの花はなに心こころをのこしつ

露奥津城に眠りたまひぬ。

三

木花の咲耶の姫の生れましし  
黄金の峰は雲に聳えつ。

四

瑞御靈珍の教をうつそみの  
世は木の花と永久に榮えむ。

五

西にしへ行くゆく思おもひは誰たれ人もあるものを  
見み捨すてて入いるな大空おほぞらの月つき。

六

憐あはれみこころの心こころは誰たれも廣ひろけれど  
育はぐくむ袖そでの狭せまきが憂うれれたき。

七

限かぎりなき惠めぐみの御手みてを差さし伸のべて  
救すくはせたまふ瑞みづの大神おほかみ。

八

頂いただきに霜しも降りふ添そひて白雪しらゆきの  
心こころの空そらは清きよくなりぬる。

## 第四九九

一

五さ月ば蠅へなす聲こゑは激はげしくなりにけり  
世よの別わかれ路ぢの近ちかづきしより。

二

曲まが神かみの荒すさむ闇やみ世よもすみがまの

黒<sup>くろ</sup>き煙<sup>けむり</sup>と消<sup>き</sup>ゆる神<sup>み</sup>代<sup>よ</sup>なり。

三

あゝ神<sup>かみ</sup>と唱<sup>とな</sup>ふる聲<sup>こゑ</sup>に夢<sup>ゆめ</sup>醒<sup>さ</sup>めて  
打<sup>う</sup>ち出<sup>で</sup>て見<sup>み</sup>れば月<sup>つき</sup>は傾<sup>かたむ</sup>く。

四

嚴<sup>いづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>教<sup>をしへ</sup>の光<sup>ひかり</sup>なかりせば  
如<sup>い</sup>何<sup>か</sup>でか月<sup>つき</sup>に心<sup>こころ</sup>を懸<sup>か</sup>けむや。

五

苗代なはしろの水みづは乾かわきぬ天あまの河かは  
放はなちてみづの御み霊たまたまひぬ。

六

梅うめ散ちりて御み園そのの桃ももは咲さきにけり  
薰かをり目め出で度たき神かみのまにまに。

七

春山はるやまに朝啼あさなく雉子きじの聲こゑすなり  
神かみの御み教のりの若芽わかめ摘つめとや。

八

月の夜に生育ちたる姫小松の  
葉末の露は玉と照らへり。

第五〇〇

一

池水にうつりて咲ける梅の花を  
手折るはみづの心なりけり。

二

吾行かむ後まで散らず待てよかし

薰<sup>かを</sup>り床<sup>ゆか</sup>しき神園<sup>かみその</sup>の梅<sup>うめ</sup>。

三

久方<sup>ひさかた</sup>の御空<sup>みそら</sup>に咲<sup>さ</sup>ける桃<sup>もも</sup>の花<sup>はな</sup>を  
手折<sup>たを</sup>らむよしも泣<sup>な</sup>き暮<sup>くら</sup>しつづ。

四

よしや身<sup>み</sup>は山<sup>やま</sup>河<sup>かは</sup>遠<sup>とほ</sup>く隔<sup>へだ</sup>つとも  
心<sup>こころ</sup>に手折<sup>たを</sup>らむ神園<sup>かみその</sup>の桃<sup>もも</sup>。

五

眞清水も霜にこほればひた曇る  
昔にかへれみづの御靈に。

六

山櫻彼方此方に立ち交り  
松の緑に眺望添へぬる。

七

嵐山花のまにまに緑なくば  
錦の峰と誰か稱へむ。

八

風かぜに散ちる花はなの姿すがたを眺ながむれば  
人ひとの浮世うきよの憂うれたくもあるかな。

第五〇一

一

散ちりて又また再ふたび花はなの咲さく春はるを  
待まつよしもなく滅ほろび行ゆくかな。

二

永とこ久しへの花はな咲さき匂にほふ天あま津つ國くにの

春こそ永久の住家なりけり。

三

讚め稱へ見上ぐる花の足許に  
散りて踏まるる山櫻かな。

四

九重に咲く山吹の果敢なけれ  
散りたる後に實さへなければ。

五

世の中は往來の道も見えぬまで  
闇の帳に包まれにけり。

六

闇の戸を押しわけ昇る朝日子の  
日の出の神を待ちあぐみつつ。

七

東雲の空を眺めて神の子の  
月松の代を焦れ慕ひつ。

八

露霜つゆしもの置おきて褪あせたる白菊しろぎくの  
花はなはあやしく葉末はずえに慄ふるふ。

（大正一二・五・一五 舊三・三〇 於教主殿 明子録）

第六篇 聖地せいちの花はな

第二十六章 神丘しんきう〔一六〇一〕

第五〇二

一

澄<sup>す</sup>み渡る玉<sup>たま</sup>の井<sup>ゐ</sup>の底<sup>そこ</sup>を眺<sup>なが</sup>むれば  
風<sup>かぜ</sup>に散<sup>ち</sup>り行<sup>ゆ</sup>く花<sup>はな</sup>の影<sup>かげ</sup>見<sup>み</sup>ゆ。

二

玉<sup>たま</sup>の井<sup>ゐ</sup>の鏡<sup>かがみ</sup>に映<sup>うつ</sup>る月<sup>つき</sup>影<sup>かげ</sup>は  
瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>か如<sup>に</sup>意<sup>よ</sup>の寶<sup>ほう</sup>珠<sup>しゆ</sup>か。

三

花<sup>はな</sup>の色<sup>いろ</sup>の褪<sup>あ</sup>せ行<sup>ゆ</sup>く見<sup>み</sup>れば知<sup>し</sup>らぬ間<sup>ま</sup>に  
春<sup>はる</sup>は暮<sup>く</sup>れけり野<sup>の</sup>はうつりけり。

四

夜<sup>よ</sup>を照<sup>て</sup>らす月<sup>つき</sup>の惠<sup>めぐみ</sup>を白<sup>しら</sup>雲<sup>くも</sup>の  
花<sup>はな</sup>と讚<sup>ほ</sup>めつつ雪<sup>ゆき</sup>と稱<sup>た</sup>へつ。

五

雪<sup>ゆき</sup>よりも花<sup>はな</sup>よりも尚<sup>なほ</sup>清<sup>きよ</sup>くして  
御<sup>み</sup>空<sup>そら</sup>に澄<sup>す</sup>める月<sup>つき</sup>の光<sup>か</sup>なり。

第五〇三

一

夢ゆめとのみあだ仇あだに聞ききてし時ほととき鳥す  
只ただ一ひとこゑ聲こゑの懷なつかしくなりぬ。

二

神園かみぞのにたてる常磐ときはの松まつを見れば  
花はなに心こころはうつらざりけり。

三

松まつ見みれば何時いつも緑みどりの色いろ清きよく  
常磐ときはの春はるの心こころ地ちせらるる。

四

神園かみぞのの白梅しらつめ清きよく散ちり果はてぬ  
實みを結むすぶなる魁さきがけとして。

五

高山たかやまにかかれる八重やへの横雲よこぐもに  
なきすてて行く山時鳥やまほととぎす。

第五〇四

一

時鳥ほととぎす啼なきつるあとに家鷄かけどりの

聲こゑさわやかにあかつきつ曉告ぐる。

二

曉あかつきのこがね黄金のとり鳥は啼なき初そめぬ  
五み六ろく七しちのみよ御代のあけぼのちか曙近ちかみて。

三

いなかや高なかく月つきは照てれども八やへ重が霞すみ  
中なか空ぞらしきる忌いまはしさかな。

四

武藏野むさしのに聲悲こゑかなしげに啼なき渡わたる  
山時鳥やまほととぎす血潮ちしほ吐はくなり。

五

啼なき涸かれて今いまは聲こゑなき時鳥ほととぎす  
焦こがるる袖そでに五月雨さみだれの降ふる。

第五〇五

一

夏なつの夜よも寝いねあぐみたる老人おいびとの

耳みみを澄すまして啼なく時鳥ほととぎすかな。

二

寝いぬる間まも神かみの御前みまへを慕したふ身みの  
夢ゆめの山路やまぢに時鳥ほととぎす啼なく。

三

世よを嘆なげき人ひとを嘆なげきて時鳥ほととぎす  
聲こゑからしつ々雲井くもゐを翔かける。

四

一聲ひとこゑの叫さけびは月つきか時鳥ほととぎす  
何いづれにしても悲かなしかりけり。

五

時鳥ほととぎす啼なかぬ山やま里さとなけれども  
都みやこ大路おほぢに叫さけぶ術すべなし。

第五〇六

一

荒鷺あらわしの御空みそらをかける都路みやこぢは

山時鳥啼やまほととぎすく術すべもなし。

二

小夜更さよふけて山時鳥やまほととぎす淋さびし氣げに  
啼なきつる聲こゑの耳みみに入いらずや。

三

足曳あしびきの黄金こがねの山やまに登のぼり見みれば  
ここにも聞ききぬ時鳥ときどりの聲こゑ。

四

桶伏をけふせの山やまの茂しげみに身みを潜ひそめ  
聲こゑ悲かなしげに啼なく時鳥ほととぎす。

五

風かぜに散ちる花橘はなたちばなの影かげ見みれば  
來きたるべき世よの俣しのばるるかな。

第五〇七

一

いと清きよき谷たにの流ながれも濁にごり來きぬ

降る五月雨のしげきがままたに。

二

風荒み雨は頻りに降りそそぎ  
清き谷水濁らひ行くなり。

三

今暫し時待てよかし谷の水  
やがては月の影映すらむ。

四

おほぞら  
大空に雲くもふさがりて五月雨さみだれの  
降りふ来る中なかに時鳥ほととぎすなく。

五

こくもがは  
小雲川立たち出いで御み禊そぎする夜半よはの  
かはおと  
川音更ふけて曙あけぼの近かし。

第五〇八

一

おほぞら  
大空を包つつみ隠かくせし五月雨さみだれの

中に輝く月の影かな。

二

白妙のわが衣手は時雨しぬ  
雲井の空を思ひなやみて。

三

澄み昇る二日の月も秋の空の  
盈つる今宵を待ち経たりけむ。

四

久方ひさかたの御空みそらにすめる月影つきかげは  
海うみの外そとまで鏡かがみと見るみなり。

五

踏ふみ迷まよふ人ひとを照てらして秋あきの月つきは  
雲くもに乘のりつつ西にしに傾かたむく。

第五〇九

一

大空おほぞらの月つきも夜よな夜よな眺ながむれば

さまで珍めづしと思おもはざりけり。

二

昔見むかしみし月つきの光ひかりも今日けふの月つきも  
珍めづの姿すがたは變かはらざりけり。

三

中なか空ぞらに雲くものさやりのなかりせば  
月つきの光ひかりはさやけからまし。

四

瑞御靈月の光を見るたびに  
魂の曇りの恥しくなりぬ。

五

桶伏の山に八重雲棚曳きて  
小雲の川に月はさやけし。

第五一〇

一

すむ月の瑞の光を包まむと

高山の端に起る黒雲。

二

小雲川科戸の風に波立ちて  
うつろふ月は千々に砕けつ。

三

八重雲に鎖されいます月影も  
ほのかにさしぬ獄舎の窓に。

四

春はるのひ日のみ御空のつき月をあふ仰ぎみ見て  
涙なみだしにけり吐息といきつくづく。

五

醜しこ神がみにおし押籠こめられし身みの上うへは  
窓まどのつき月さへ仰あふぐ由よしなし。

第五一一

一

和わ田だのはら原漕こぎ行ゆく舟ふねのしるるべとも

なりてかかがよふ月の影かな。

二

小夜更けて山路に深く迷ふ身を  
照して昇る夜半の月影。

三

白妙の袖に輝く月影は  
恵みの露の玉とこそ知る。

四

深山路の木の間に通して照る月の影こそ千々に碎け見ゆるも。

五

玉の身を千々に碎きて木下闇に潜む千草を照らす月影。

（大正一二・五・一五 舊三・三〇 隆光録）

第二十七章 神習（一六〇二）

第五一二

一

醜草しこぐさの生おひ茂しげりたる野の路ぢ行ゆけば  
山犬やまいぬの聲こゑにおどろかさぬる。

二

皇神すめかみと俱ともにありせば獅子しし熊くまの  
吠ほえ猛たけるさへ恵めぐみとぞ聞きく。

三

道みちのため荒野あらのを別わかけて進すすむ身みに  
醜しこの曲まが靈ひの如何いかでさやらむ。

四

たそがれて山路やまぢに迷まよふ旅人たびびとを  
照てらして昇のぼる夜半よはの月影つきかげ。

五

わざはひの繁しげき世よなれば惟かむながら神かむながら  
御旨みむねにまつるふ外ほかなかりけり。

第五一三

一

嬉うれしくも浮うき世よの雲くもをわけ上のほる  
今日け故郷ふるさとの月つきを見みしかな。

二

天傳あまつたふ月つきの惠めぐみも深草ふかくさや  
露野つゆのヶ原がはらにも宿やどりたまひぬ。

三

春はるのひ日のはな花のわか別れををし惜むより  
神かみのみまへ御前のわかわれ惜をしめよ。

四

秋あき深ふかみふかやがてこがらし凧吹ふき荒すさむ  
冬ふゆ來きたるらむそな備へそなせよかし。

五

備そなへとはからだ身體まつ包まつむ衣きぬならず  
いあたたや暖あたたかき心こころ培ちかへ。

第五一四

一

四尾よつをの山やまの諸鳥もどりこゑ聲さ冴さえて  
峰みねに残のこれる有明ありあけの月つき。

二

大庭おほにはに燃もえたつ珍うづの紅葉もみぢばの  
赤あかきは神かみの心こころなるかも。

三

秋山あきやまの紅葉もみぢの色いろのいろいろに  
照てりかがやくも神かみのまにまに。

四

同おなじ山やまに照てる紅葉もみぢもいろいろに  
艶えんを争あらしふ浮世うきよなりけり。

五

皇神すめかみの領有うしはぎたまふうまし世よは  
梢しずの露つゆも御榮みさかえとぞなる。

第五一五

一

神園かみそのの松まつの木蔭こかげに佇たたずめば  
思おもひがけなき梅うめが香かぞする。

二

大空おほぞらに聳そびえて高たかき常磐ときはぎ木は  
百もも度千ち度風かぜに揉もまれつ。

三

玉たまの井いの底そこに宿やどれる月影つきかげの  
深ふかき心こころを汲くむ人ひとぞなき。

四

空そら寒さむき冬ふゆの夕ゆふへに三み日か月つきの  
慄ふるふを見みれば淋さびしかりけり。

五

大空おほぞらに慄ふるふと見みゆる月影つきかげは  
おのが眼まなこの迷まよひなりけり。

第五一六

一

大空おほぞらに引ひき廻まはしたる闇やみの幕まくを  
もれて輝かがやく星ほしの數かず々。

二

立たち迷まよふ八重やへ棚たな雲なぐもの綻ほころびゆ  
覗のぞき初そめたりオリオンの星ほし。

三

選えらまれし民たみは照てる日ひの下もとにあり  
ただ待まち暮くらす望もちつき月の影かげ。

四

日ひ出いづる國くにの空そらより輝かがやきの  
雲くもにのりつつ臨のぞむ月つき影かげ。

五

ヨルダンの水みな底そこ深ふかく照てる月つきの  
影かげは浪なみ間に碎くだけつつ澄すむ。

第五一七

一

吹く風に峰の櫻は散り果てて  
御空に獨り月は霞める。

二

花誘ふ嵐いたむか大空に  
月は霞みて影朧なり。

三

蝸ひびくの聲こゑは漸やく細ほりけり  
閑こがら荒げぶ冬ふゆ悲かなしみて。

四

山やまの端はに惠めぐの月つきは輝かがけど  
麓ふもとの里さとは光ひかりさへ見みず。

五

村むら雲くもを蹴けち散ちらすごとく進すすみ往ゆく  
御み空そらの月つきの勇いさましきかな。

第五一八

一

夜半の暗照してなほも翌晝の  
御空に月は輝きわたる。

二

時雨では晴れゆく後の大空に  
冬の夜の月清く慄へる。

三

打ちうちふる慄ふるふ月つきの姿すがたを眺ながむれば  
常闇とこやみのよを歎かこつべらなり。

四

黒雲くろくもの天津あまつ日影ひかげも隠かくす世よは  
曇くもらざらめや玉たまの井いの月つき。

五

玉たまの井いの底そこに宿やどれる月影つきかげも  
魂たまは御空みそらに永久とこしへに照てる。

第五一九

一

秋あきの野のの木き々ぎの梢しげにおく霜しもを  
照てらして生いかす天津あまつ日の影かげ。

二

秋あきの夜よに月つきの光ひかりのなかりせば  
野山のやまの草木くさき根ねより枯かれなむ。

三

天津日あまつひを眺ながめて遊あそぶ人ひとはなし  
花見はなみ雪見ゆきみと共ともに月見つきみる。

四

天地あめつちに惠めぐみの露つゆを垂たれたまふ  
月弄つきあそぶ人ひとぞ禮みやなき。

五

空そら冴さえて凍こほるかと見みる月影つきかげも  
降ふらしたまひぬ惠めぐみの露つゆを。

第五二〇

一

桶伏をけふせの山やまに皇神すめがみ有明ありあけの  
月つきこそ人ひとの生命いのちなりけり。

二

百千鳥ももちどり聲こゑさわがしくなりにけり  
あかつきちか近ちかき兆しるしなるらむ。

三

雲霧くもぎりを拂はらふ高天たかまの山風やまかぜに  
吹ふかれて散ちらむ醜しこの木この葉はは。

四

圓山まるやまの袖そでに月影つきかげ小夜さよ更ふけて  
小雲こくもの川かはは包つつまれにけり。

五

眞盛まさかりの短みじかき野邊のべの櫻花さくらばな  
春はるの心こころを惜をしむなるらむ。

第五二一

一

散<sup>ち</sup>りて往<sup>ゆ</sup>く花<sup>はな</sup>の心<sup>こころ</sup>は知<sup>し</sup>らねども  
羨<sup>うらや</sup>むならむ空<sup>そら</sup>の月<sup>つき</sup>見<sup>み</sup>て。

二

月<sup>つきごと</sup>毎<sup>ごと</sup>に輝<sup>かがや</sup>く月<sup>つき</sup>に比<sup>くら</sup>ぶれば  
花<sup>はな</sup>の盛<sup>さか</sup>りも物<sup>もの</sup>の數<sup>かず</sup>かは。

三

野<sup>の</sup>も山<sup>やま</sup>も眞<sup>ま</sup>白<sup>しろ</sup>に染<sup>そ</sup>めし白雪<sup>しらゆき</sup>も  
朝<sup>あさ</sup>日<sup>ひ</sup>の影<sup>かげ</sup>に果<sup>は</sup>敢<sup>か</sup>なく消<sup>き</sup>えゆく。

四

花<sup>はな</sup>紅<sup>なもみぢ</sup>葉<sup>はる</sup>春<sup>あき</sup>と秋<sup>あき</sup>との錦<sup>にしき</sup>さへ  
月<sup>つき</sup>の眺<sup>なが</sup>めのながきにしかず。

五

神<sup>かみ</sup>垣<sup>がき</sup>の柳<sup>やなぎ</sup>の梢<sup>こすゑ</sup>芽<sup>め</sup>含<sup>く</sup>みけり  
常<sup>とこ</sup>世<sup>よ</sup>の春<sup>はる</sup>の魁<sup>さきがけ</sup>として。

(大正一二・五・一五 舊三・三〇 於教主殿 明子録)

第二十八章 神瀧〔一六〇三〕

第五二二

一

水晶魂すゐしやうみたまをえ選りぬいて 身魂みたまのあらため爲し給ふ  
絶體ぜつたい絶命ぜつめいの世よとなりぬ この世よは變かはる紫陽花あぢさゐの  
早七度はやななたびも近ちかづきて 神かみの審判さばきも目まのあたり  
驚おどろき騒さわぐ醜魂しこたまの 身みの果はてこそは憐あはれなり  
さは然さりながら何人なにびとも 心こころの柱はしらを立直たてなほし

誠まことの道みちに還かへりなば 本津御神もとつみかみはよろこびて  
平和へいわの御國みくににやすやすと 進すすませたまふぞ尊たふとけれ。

二

こころ改あらため大道おほみちに 向むかつて進すすむ人々ひとびとは  
神かみの恵めぐみに助たすけられ 常世とこよの春はるに遊あそぶべし  
惡念あくねん晴はれず疑うたがひの 強つよく神慮しんりよに反そむきなば  
心こころず懲戒いましめ來きたるべし 皇大神すめおほかみの御言葉みことばは  
巖いはほのごとく山やまの如ごとく いや永久とこしへに動うごき無なし。

三

人ひとの表面おもては變かはるとも

易かはりがたきは靈魂みたまなり

神かみの御言みことをかしこみて  
やがて來きたらむ皇神すめかみの  
神かみは愛あいなり權威ちからなり。

天授さづけの魂たまを良よく研みがき  
さばきの時ときの備そなへせよ

四

わが脚あし下もとに注ちう意いして  
源みなもと涸かれて川かは下しもの  
山やま野の木き草くさもその如ごとく  
花はな咲さき匂におふ枝えだもなし  
同おなじ一ひと木きの身み魂たまなり  
水みづ汲くみ得うべき道だう理りなし  
根ね本もとなければ幹みきもなく  
根ね本もとと幹みきと枝えだ葉はとは  
同おなじ一ひと木きの身み魂たまなり  
根ね本もとを大だい切じに守まもるべし。

五

三千世界の梅の花  
一度に開く時は來ぬ

スメール山に良の  
皇大神のあれまして

治めたまはる五六七の代  
月日と俱に迫りけり

敬ひ畏み大道に  
叶ひまつれよ諸人よ。

第五二三

一

金龍の池の面に清く照る月は

五六七の御代の鏡なるべし。

二

圓山まるやまの御空みそらに望もちの月つき照てりて  
圓まるく治をさまる神かみの御代みよかな。

三

四方よもの海うみ皆みな静しづかなる神かみの代よは  
望もちの夜よの月つき波なみ間まにも澄すむ。

四

千早ちはや振ふる神代かみよながらの月影つきかげを  
うつす金龍池きんりゅういけの牙さやけさ。

五

相戀あひこふる衣ころもの薰かをる夏なつの夜よに  
しづ心こころなく月つきは傾かたむく。

第五二四

一

久方ひさかたの天あまの戸と開あけて嚴御靈いづみたま  
降くだり給たまひぬ桶をけ伏ぶせの山やまに。

二

天あまの川がは竿さををかざして瑞御靈みづみたま

更生かうせいの舟ふねをひきて下くだりぬ。

三

夕ゆふざれば桶をけ伏ぶせ山やまもかすむなり  
空そらにいざよふ月つきおぼるにて。

四

池いけの面もの波なみにくだけし月つき見みれば  
神かみの惠めぐみの俣しのばれにけり。

五

獸<sup>けもの</sup>等の<sup>ら</sup>荒<sup>あ</sup>れ狂<sup>くる</sup>ひたる<sup>かみ</sup>神園<sup>その</sup>に  
すまし顔<sup>がほ</sup>なる<sup>つき</sup>月の影<sup>かげ</sup>かな。

第五二五

一

太<sup>たち</sup>刀<sup>つるぎ</sup>劍<sup>たま</sup>彈丸<sup>ま</sup>は何<sup>いづ</sup>處<sup>く</sup>と<sup>くぐりづ</sup>潛水<sup>すゐ</sup>の  
底<sup>そこ</sup>まで探<sup>さぐ</sup>る<sup>けもの</sup>獸<sup>けもの</sup>の愚<sup>おろ</sup>かさ。

二

四<sup>よつ</sup>尾<sup>を</sup>山<sup>やま</sup>木<sup>こ</sup>の葉<sup>は</sup>搖<sup>ゆる</sup>ぎて<sup>かみ</sup>神<sup>かみ</sup>の園<sup>その</sup>に

あやしき風の吹き荒みけり。

三

蜘蛛の子を散らすが如く戦きて  
果敢なく失せぬ醜の仇司は。

四

小雲川底の月影つかまむと  
くだり來れる山の上の猿。

五

頭搔あたまかき恥はぢかき己おのが手てをかきつ  
神かみの御園みそのを猿さるかきまはす。

第五二六

一

玉たまの井いに映うつる木この實みをむしらむと  
悶もだえ苦くるしむ高山たかやまの猿さる。

二

鬼火おにびかと思おもへば淋さびし五月雨さみだれの

雨あめに息いきする螢ほたるなりけり。

三

頭あたまには赤あかき冠かむりをのせ乍ながら  
尻しりのみ光ひかる螢ほたる蟲むしかな。

四

暗やみ夜よにはかすかに光ひかる螢ほたる蟲むしも  
月つきし出いづれば影かげ消きゆるなり。

五

草くさの上へに露つゆの命いのちを保たもちたる  
螢ほたるは月つきの光ひかりを怖おづるも。

第五二七

一

夕ゆふされば勢いきほひのよき螢ほたるむし蟲むしも  
旭あさひの影かげに消きえ失うするなり。

二

千ち早はや振ふる尊たふとき聖きよき神かみの山やまに

醜しこの曲津見登りて驚おどろく。

三

如何いかにして此この神山かみやまを穢けがさむと  
醜しこの魔神まがみは心碎こころくだきけむ。

四

今いま暫しばし時待ときまてよかし圓山まるやまの  
空そらに輝かがやく黄金こがねの墓いづかを。

五

龍神たつがみも時ときを得えざれば玉たまの井いの  
水底みなそこ深く姿すがたかくしつ。

第五二八

一

月つきとなり龍神たつがみとなりミカエルと  
なりて輝かがやく時とき近ちかづきぬ。

二

四尾よつをの山やまに隠かくれし國武彦くにたけひこの

巖いづの光ひかりを待まつ間まの久ひさしき。

三

大おほ八や洲しま清きよく圍めぐれる池いけ水みづは  
瑞みづの御み靈たまの姿すがたなりけり。

四

澄すみ渡わたるこの眞ま清しみ水みづも夕ゆふ立たちの  
水みづ呑のみあきて濁にごる忌ゆ々ゆしさ。

五

眞清水も亦泥水も否まらずに  
のめどうつらぬ金龍の池。

第五二九

一

月照れる夕の御空静かにて  
柳の梢に春は來にけり。

二

大前を戀ふる心のなかりせば

浮世うきよの旅たびも淋さびしかるらむ。

三

大道おほみちの司つかさの前まへに口くちごもりぬ  
思おもひの丈たけを述のべむとすれど。

四

何事なにごとか思おもひの丈たけを述のぶべしと  
教をしへの言葉ことばに口くちは開ひらけぬ。

五

海山うみやまのつもる思おもひもしかすがに  
言葉ことばの露つゆの慄ふるふのみなる。

第五三〇

一

千早ちはや振ふる神かみに親したしみ愛あいすてふ  
心こころありせば言葉ことばの花はな咲さく。

二

神柱かむはしら遠とほく敬うやまひ居ゐる身みには

言靈車押しあぐみつつ。  
ことたまぐるまお

三

親しみと愛の心を楯として  
親したしみとあいのこころをたて楯として  
廣く言問へ教司に。  
ひろことことをしへをつかさをしへつかさ

四

わが思ふ心のたけの一節も  
わがおも思おもふこころ心こころのたけのひとふし一節も  
神柱の前に語りかねつつ。  
みつかひまへ神柱かたのまへ前かたにかた語かたりかたかかねかねかつつ。

五

わが袖そでの涙なみだの露つゆに月つき照てりぬ  
祖神みおやの問とはば如何いかに答こたへむ。

第五三一

一

夕暮ゆふぐれて妹いもとし登のぼる圓山まるやまの  
月つきを仰あふげば恥はづかしきかな。

二

小雲川こくもがは水の心こころを白波しらなみの

上うへ漕こぎ渡わたる汚を家げの釣つり舟ぶね。

三

月つきも日ひも波なみ間まに浮うかぶ小こ雲くも川がは  
清きよきは神かみの心こころなるかも。

四

桶をけ伏ぶせの山やまを寫うつして小こ雲くも川がは  
いいや永とこ久しへに清きよく流ながるる。

五

小雲川こくもがはたつ荒浪あらなみに驚おどろきて  
淵ふちを出いでけり龍たつのおとし子ご。

（大正一二・五・一六 舊四・一 於教主殿 隆光録）

第二九章 神洲しんしゅう〔一六〇四〕

第五三二

一

宮柱みやばしら太敷たふとしき建てし其昔そのかみを

偲しのぶは一人ひとりわれのみならず。

二

圓まる山やまの姿すがたはとみに變かはれども  
御み空そらの月つきはいよよさやけし。

三

新しん聞ぶんの記き者しゃの囁ささやき腐くた鷄かけの  
曉あかつきまたで鳴なきたつるかな。

四

圓<sup>まる</sup>山<sup>やま</sup>の宮<sup>みや</sup>は再<sup>ふた</sup>び建<sup>た</sup>ちぬべし  
打<sup>う</sup>ち碎<sup>くだ</sup>きたる醜<sup>しこ</sup>の哀<sup>あは</sup>れさ。

五

醜<sup>しこ</sup>弓<sup>ゆみ</sup>のひきて返<sup>かへ</sup>らぬ過<sup>あや</sup>ちに  
的<sup>まと</sup>射<sup>いは</sup>外<sup>はづ</sup>せし鬼<sup>おに</sup>のはかなさ。

第五三三

一

桶<sup>をけ</sup>伏<sup>ふせ</sup>の山<sup>やま</sup>に八<sup>や</sup>重<sup>へく</sup>雲<sup>も</sup>棚<sup>たな</sup>曳<sup>なび</sup>きて

紫むらさの空そらに月つきはかがよふ。

二

紫むらさの御空みそらを廣ひろくしめながら  
かがやき渡わたる圓山まるやまの月つき。

三

本宮山木ほんぐうやまの葉はのさやぎ静しづまりて  
洗あらふが如ごとき夏月なつづき照てれり。

四

礎いしずゑの跡あとを照てらして夏なつの月つき  
惠めぐみの露つゆの雨あめを濺そそげり。

五

只たださへに清きよけきものを圓山まるやまの  
月つきにかがやく礎いしずゑの露つゆ。

第五三四

一

圓山まるやまの底津岩根そこついはねに嚴おごそかに

昔むかしを語かたる珍うづの礎いしずゑ。

二

圓まる山やまの月つきにあこがれ登のぼり見みれば  
露つゆを三み年とせの涙なみだあふるる。

三

月つき清きよし礎いしずゑ清きよし圓まる山やまの  
木き々の梢こずゑはいとど清すがしも。

四

金龍きんりゅうの池いけに浮うかべる魚族うろくづも  
醜しこの嵐あらしを恐おそれざりけり。

五

西にし東ひがし南みなみゆ北きたと醜しこ神がみの  
襲おそひし昔むかしも夢ゆめとなりぬる。

第五三五

一

梓弓あづなゆみ春はるの圓山まるやま緑みどりして

梢しげの露つゆに月つきを宿やどせり。

二

人ひとの世よは百も度た千ち度た移びるとも  
月つきは昔むかしの姿すがたなりけり。

三

限かぎりある人ひとの命いのちは草くさにおく  
露つゆの干ひぬ間まの朝あさ顔がほの花はな。

四

圓山まるやまにかかりし雲くものあと晴はれて  
今いまはさやけき月つきを見るみるかな。

五

みちのくの月つきを見みむとて來きて見みれば  
聖地せいちに劣おとりて濁にごれる心地こちす。

第五三六

一

照てる月つきの光ひかりに變かはりなけれども

人の心の空はいろいろ。

二

圓山に啼き残したる杜鵑  
心悲しげに仇し野になく。

三

何人も御空の月はめづるものを  
花に心を取られ往くなり。

四

仇<sup>あだ</sup>花<sup>ばな</sup>の茂<sup>しげ</sup>り合<sup>あ</sup>ひたる仇<sup>あだ</sup>し野<sup>の</sup>に  
色<sup>いろ</sup>香<sup>か</sup>妙<sup>たへ</sup>なる白<sup>しろ</sup>梅<sup>うめ</sup>はなし。

五

皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の深<sup>ふか</sup>き惠<sup>めぐみ</sup>を白<sup>しろ</sup>梅<sup>うめ</sup>の  
花<sup>はな</sup>手<sup>た</sup>折<sup>を</sup>らむと仇<sup>あだ</sup>し野<sup>の</sup>彷徨<sup>さまよ</sup>ふ。

第五三七

一

照<sup>て</sup>る月<sup>つき</sup>の眞<sup>ま</sup>下<sup>した</sup>に住<sup>す</sup>めばわが影<sup>かげ</sup>の

いともちひ小さく見みゆるものかな。

二

月影つきかげの傾かたむく時ときはわが影かげの  
いと長々ながながしく見みゆるものなり。

三

小夜衣さよころもかけはなれても赤心まごころの  
通かよひし友ともはなつかしきかな。

四

有ありがた難がたさに落おつる涙なみだの玉たまの神ふ諭みは  
わが永とこしへ久への生いのち命ちなりけり。

五

空そら包つつむ夜よるの帳とばりもあきの空そらに  
輝かがやく月つきの影かげの戀こひしさ。

第五三八

一

木この花はなの神かみの命みことの永とこしへ久へに

鎮まり居ます富士の神山。

二

瑞御靈巖島姫永久に

竹生の島に鎮まりたまふ。

三

高熊の峰に現れます玉照彦の

光輝く時は來にけり。

四

黄金こがねなす峰みねの麓ふもとに現あらはれし  
玉照たまてる姫ひめの御世みよとなりぬる。

五

桶伏をけふせの山やまにひそめる杜鵑ほととぎす  
五月さつきの空そらを待まちつつ経ふるも。

第五三九

一

一ひと箸はしの運はこびの間まにも死しの影かげは

人のまはりをつけ狙ひ居る。

二

もてなしのいと懇な晝食こそ  
味も殊更美しきかな。

三

花かざす乙女の玉手にくめる湯は  
いと香ばしき薫り漂ふ。

四

日ひに月つきに清きよき心こころのます鏡かがみ  
のぞくも嬉うれし金龍きんりゅうのうみ。

五

起おき伏ふしの草くさの露つゆにも輝かがきぬ  
瑞みづの御靈みたまの月つきの御影みかげは。

第五四〇

一

大前おほまへに天あまのさかてを只ただ一人ひとり

うつの山鳩やまばとくだ下りき來にけり。

二

大前おほまへの榊さかきにかけし十寸鏡ますかがみは  
清きよけき神かみの心こころなりけり。

三

曇くもりなき鏡かがみの面おもを眺ながむれば  
わが心根こころねの恥はづかしきかな。

四

圓山まるやまに昇のぼる月影つきかげいと清きよく

ミロクみよの御代みよを守まもりますらむ。

五

神代かみよより清きよく流ながれし和知川わちがはの

水瀬みなせに澄すめる秋あきの夜よの月つき。

第五四一

一

巖窟いはやどをあけし鏡かがみをたづぬれば

御空みそらに澄すめる月つきと答こたへむ。

二

御劍みつるぎも鏡かがみも玉たまも瑞御靈みづみたま  
岩戸いはとを開ひらく寶たからなりけり。

三

神かみつ代よの世よの有様ありさまをたづねむと  
月つきにとへども月つきは答こたへず。

四

地に降り草葉の露に身を寄せて  
むかしを語る月の大神。

五

榊葉にたれたる瑞の白木綿は  
神も心をかけてや見るらむ。

（大正一二・五・一六 舊四・一 於教主殿 明子録）

第三〇章 神座（一六〇五）

第五四二

一

仰あふぎ見みる此この世よの月つきに比くらぶれば  
靈みくに國にの月つきは光ひかり妙たへなり。

二

登のぼり行ゆく足あし跡あと見みれば惜をしきかな  
眞ましろ白に積つめる雪ゆきの圓まる山やま。

三

谷たに水みづの流ながるるままにわがゆく行衛ゑ  
定さだめおきたし神かみにたよりて。

四

跡あとたれて幾いく世よ經へぬらむ水みな無な月つきの  
社やしろの松まつも神かむさびてけり。

五

千ち早はや振ふる神かみ代よながらの月つき影かげは  
わが玉たまの井いの底そこに宿やどれる。

第五四三

一

天國てんごくの花はなをかざして大神おほかみの  
御前みまへを祀まつる天使あまつかひたち等。

二

朝あさ日照ひてる桶をけ伏ふせ山やまの神かみの丘をかに  
光ひかりを添そゆる秋あきの夜よの月つき。

三

朝あさ日ひ刺さす月つき澄すみ渡わたる圓まる山やまの  
臺うてなは神かみの嚴いづの御み社あらか殿か。

四

今いまの世よも後あとの世よも亦また皇すめ神かみの  
惠めぐみにたよる外ほかなかりけり。

五

愛めぐはしと皇すめ大おほ神かみもみなそこの  
すめる心こころをみそなはすらむ。

第五四四

一

萬代よろづよに御榮光みさかえあれと朝夕あさゆふに  
祈いのる心こころを神かみは愛めづらむ。

二

本宮山裾ほんぐうやますそを流ながる和知川わちがはの  
水みづは此世このよのみそぎなるらむ。

三

小雲川竝木の松も老いにけり  
吾身も老いぬ神のまにまに。

四

二十五年神に仕へて漸くに  
靈國の様を悟り初めけり。

五

二年や三年四年の宮仕へに  
いかで悟らむ神の經綸を。

第五四五

一

光ひかりをば和やはらげ塵ちりに同まじはりて  
世よびと人とをまも守もる月つきの大神おほかみ。

二

寢ねて祈いのり起おきて祈いのりぬ愚おろかなる  
吾わが身みに幸さちの永と久はにあれよと。

三

千ち早はや振ふる 富ふ士じの 高たか山やま雪ゆき清きよく  
深ふかきは 神かみの 心こころなりけり。

四

如に意よ寶い珠ほつしゆ 玉たま拾ひろはむと 千ち早はや振ふる  
神かみの 光ひかりに 求まぎて 行ゆくかも。

五

玉たま鉾ぼこの 道みちを 歩あゆめる 身みながらも  
人ひとは 難な波はの よしあしを 謂いふ。

第五四六

一

世よの爲ためと祈いのる眞ま人びとぞ尠すくなけれ  
そこの心こころは吾わが身みの爲ためのみ。

二

世よを祈いのるわが眞ま心こころに詐いつはりの  
あたふとら尊たふとけれ神かみのみぞ知しる。

三

罪穢つみけがれあら人神ひとがみの安やすかれと  
朝あさな夕ゆふなに神前みまへに祈いのる。

四

わが植うゑし常磐ときはの松まつは繁しげりけり  
三みつの柱はしらの幹みきを揃そろへて。

五

幾いくちよ千代よも忘わすれざらまし吾わが植うゑし  
常磐ときはの松まつに心こころとどめて。

第五四七

一

此松の榮ゆる如く教へ草の  
永久なれと祈りつつ植ゑぬ。

二

死るとも此松ケ枝に魂かけて  
五六七の御代を守らむとぞ思ふ。

三

靈<sup>たま</sup>ちはふ神<sup>かみ</sup>の大道<sup>おほぢ</sup>を歩<sup>あゆ</sup>む身<sup>み</sup>は  
世<sup>よ</sup>のうき事<sup>こと</sup>も樂<sup>たの</sup>しみと見<sup>み</sup>る。

四

此<sup>この</sup>道<sup>みち</sup>の堅<sup>かき</sup>磐<sup>は</sup>常<sup>とき</sup>磐<sup>は</sup>に動<sup>うご</sup>かざれと  
石<sup>いし</sup>の玉<sup>たま</sup>垣<sup>がき</sup>仕<sup>つか</sup>へまつりぬ。

五

冴<sup>さ</sup>え渡<sup>わた</sup>る八<sup>やく</sup>雲<sup>も</sup>小<sup>を</sup>琴<sup>こと</sup>のすがかきを  
神<sup>かみ</sup>も愛<sup>め</sup>でつつ聞<sup>きこ</sup>し召<sup>め</sup>すらむ。

第五四八

一

松まつヶ枝がえに櫻さくらの花はなに降ふる雨あめも  
同おなじ御神みかみの惠めぐみなりけり。

二

紅くれなゐの花はなも清きよけき白梅しらうめも  
同おなじ惠めぐみの雨あめに咲さくなり。

三

神垣かみがきの風かぜにしられぬ法燈ともしびは  
根底ねそこの國くにまで照てらし行ゆくなり。

四

消きえやらぬ神かみの御前みまへの燈火ともしびに  
闇くらき心こころを照てらされて行ゆく。

五

來きて見みれば思おもひしよりも勝まさりけり  
桶伏山をけふせやまの珍うづの聖地せいちは。

第五四九

一

玉たまの井いの水みづの面おもてに心こころとめて  
輝かがやきにけり三五あななひの月つき。

二

皇神すめかみの大道おほぢを歩あゆむ心こころしあれば  
迷まよひの暗やみもやすく晴はれなむ。

三

山やまの上への池いけの心こころは仇あだなれや  
氷こほりも水みづも名なのみ残のこれる。

四

名なばかりの水みづなき池いけに如何いかにして  
月つきの姿すがたの映うつるべしやは。

五

月つきの水みづたえてし無なくば草くさも木きも  
如何いかで芽め含ぐまむ此この地ちの上うへに。

第五五〇

一

皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の<sup>の</sup>教<sup>のり</sup>の<sup>の</sup>眞<sup>ま</sup>清<sup>しみ</sup>水<sup>みづ</sup>清<sup>きよ</sup>け<sup>きよ</sup>れば  
流<sup>なが</sup>れ<sup>なが</sup>流<sup>なが</sup>れて<sup>よ</sup>世<sup>よ</sup>を<sup>あら</sup>洗<sup>あら</sup>ふ<sup>なり</sup>なり。

二

玉<sup>たま</sup>の<sup>の</sup>井<sup>い</sup>の<sup>の</sup>同<sup>おな</sup>じ<sup>し</sup>清<sup>しみ</sup>水<sup>みづ</sup>を<sup>を</sup>掬<sup>むす</sup>ぶ<sup>み</sup>身<sup>み</sup>は  
瑞<sup>みづ</sup>の<sup>の</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>の<sup>の</sup>永<sup>とこ</sup>久<sup>しへ</sup>の<sup>の</sup>友<sup>とも</sup>。

三

三十年の嚴の御靈の御教に  
まだ現はれぬ光見るかな。

四

薄雲におほはれ居たる月の光を  
今も仰ぎぬ目無き司は。

五

薄雲の逃げ去り行きし後の月の  
光に照りて慄ひ戦く。

第五五一

一

かりそめに説ときおかれたる言ことの葉はに  
眼まなことどめて迷まよふ人ひとあり。

二

さまざまに説とけども説とき得えぬ言ことの葉はを  
聞きかずして聞きく人ひとは稀まれなり。

三

曇<sup>くも</sup>りたる人<sup>ひと</sup>の心<sup>こころ</sup>を照<sup>て</sup>さむと  
巖<sup>いづ</sup>と瑞<sup>みづ</sup>との鏡<sup>かがみ</sup>かがやく。

四

情<sup>なさけ</sup>知らぬ春<sup>はる</sup>の嵐<sup>あらし</sup>も神<sup>かみ</sup>の里<sup>さと</sup>の  
主<sup>ぬし</sup>ある花<sup>はな</sup>は避<sup>さ</sup>けて吹<sup>ふ</sup>くらむ。

五

更<sup>かう</sup>生<sup>せい</sup>主<sup>しゅ</sup>再<sup>ふた</sup>び下<sup>くだ</sup>る世<sup>よ</sup>に會<sup>あ</sup>ひて  
誠<sup>まこと</sup>の神<sup>かみ</sup>の教<sup>のり</sup>を聞<sup>き</sup>くなり。

(大正一二・五・一六 舊四・一 隆光録)

第三章 神閣〔一六〇六〕

第五五二

一

常闇とこやみの夜よるの帳とばりは降おろされて  
初はじめて慕したふ月つきの影かげかな。

二

足引あしびきの五十路いそぢの山やまを二つふた越こえて  
三みつの神かみます花園はなぞのに進すすむ。

三

一ひとり人行ゆくも惜をしくぞ思おもふ花はなの山やま  
ふりかへりつつ招まねく友垣ともがき。

四

曉あかつきを告つぐる御殿みとのの太鼓たいこの音ねに  
長ながき眠ねむりをさましつつゆく。

五

人は皆深き暗路を渡り川  
清き流れに更生主一人立つ。

第五五三

一

傾きし月に心の澄みぬれば  
仇に一夜も寝られざりけり。

二

紫の雲棚曳きて大空に

傾かたむく月つきを慕したひ見みるかな。

三

大空おほぞらに慄ふるひて澄すめる月影つきかげは  
地ちの凧こがらしを歎かこち顔がほなる。

四

小夜さよ更ふけて山川やまかは草木くさき静しづかなり  
只月ただつきのみぞ空そらに冴さえぬる。

五

わくらはに心こころの月つきの澄すみぬるは  
悟さとりに入いるの初はじめなりけり。

第五五四

一

玉たまの井いの底そこに沈しづむも大空おほぞらに  
著しるけき月つきも同おなじ光ひかりぞ。

二

白梅しらびいめの花はなは匂におひていつしかに

疎<sup>うと</sup>みし人<sup>ひと</sup>も尋<sup>たづ</sup>ね來<sup>く</sup>るかな。

三

神<sup>かみ</sup>垣<sup>がき</sup>を後<sup>あと</sup>に見<sup>み</sup>捨<sup>す</sup>てて行<sup>ゆ</sup>く雁<sup>かり</sup>の  
中<sup>なか</sup>にも残<sup>のこ</sup>る一<sup>ひと</sup>列<sup>つら</sup>ありけり。

四

白<sup>しら</sup>梅<sup>うめ</sup>の匂<sup>にお</sup>ふも待<sup>ま</sup>たで行<sup>ゆ</sup>く雁<sup>かり</sup>の  
心<sup>こころ</sup>の空<sup>そら</sup>は淋<sup>さび</sup>しかるらむ。

五

神垣かみがきの春はるもあさ野のの若草わかぐさに  
かくれて雉子きぎす鳴なき渡わたるなり。

第五五五

一

圓山まるやまの木き々の梢こずえの呼子よびこどり鳥  
誰たを招まねくらむ聲こゑも静しづけく。

二

神園かみそのの梅手うめた折をらむと來きて見みれば

早くも散りて實は結びたり。

三

白梅の外にかぐはし友もなし  
散りたる後の心淋しさ。

四

散るとてもまた来る春を松ヶ枝に  
緑の色のすがすがしくあれ。

五

閑こがらしの荒すさみし跡あとの圓まる山やまに  
照てる月影つきかげはいとも長の閑どけし。

第五五六

一

三五あななひの月つきは御空みそらを唯ただ一人ひとり  
わがもの顔がほに澄すみ渡わたるなり。

二

久方ひさかたの天津日影あまつひかげも月影つきかげも

元津御神の光なりけり。

三

時鳥五月の空に里なれて  
夜の更くるまで啼き渡るかな。

四

金龍の池のみぎはもさみだれて  
菖蒲の花の紫に咲く。

五

皇神すめかみの惠めぐみもわけて大八洲おほやしま  
松まつの木この間にま迦陵頻伽からびんが鳴なく。

第五五七

一

和田わだの原はら澄すみ渡わたりたる月影つきかげの  
傾かたむく見みれば淋さびしかりけり。

二

金龍きんりゅうの池いけの氷こほりの解とけてより

水底深くうつる月影。

三

空高く立つ河霧の隙間より  
漏れ来る月の光慕はし。

四

長き夜も明けて悔しく思ふかな  
月の光のあせて見ゆれば。

五

神垣かみがきの空そらを包つつみし黒雲くろくもを  
すかして照てれる有明ありあけの月つき。

第五五八

一

月出つきいでて松まつの緑みどりは榮さかえけり  
紅葉もみぢ散ちり敷しく閑こがらしのあと後に。

二

呉竹くれたけの筧かけひの水みづにおく露つゆも

月の光をうけて輝ふ。

三

富士の根に積む白雪のいと清く  
永久に消えざる心ともがな。

四

富士の雪の永久に消えざる心もて  
清く御前に仕へまつらむ。

五

霜しもの褥とこつき月の枕まくらを數かず重かさね  
神國みくにのために道傳みちつたへ往ゆく。

第五五九

一

山やま川かはに風かぜのかけたる花はなの橋はしを  
渡わたらむとすも今いまの世よ人は。

二

光ひかり無なき谷たにの底そこにも岩躑躅いはつづじ

月の恵の露に匂へる。

三

世の爲に建てし宮居を醜司  
眞金の銚を打ちふり碎きぬ。

四

世のために盡すと言ひし醜司の  
醜の限りを盡したるかな。

五

ひたすらに世を安かれと祈るかな  
朝な夕なに神の御前に。

第五六〇

一

神垣の松の心の誓ひにて  
主が千歳を朝夕祈る。

二

千早振神代は知らず老松の

梢しすゑに澄すめる月つきはさやけし。

三

綿わた津つ海みの眞まさ砂ごの數かずはかぞふとも  
數かぞへきれぬは神かみの御み惠めぐみ。

四

白しら梅うめの花はなも常とき磐はの色いろ添そひて  
八や重へ神かみ垣がきに匂におひけるかな。

五

世の人の心の闇や晴れぬらむ  
澄み渡りたる圓山の月に。

第五六一

一

大空の月も澄みけり池水も  
澄み渡りたる神垣の庭。

二

御楔する小雲の川の小波の

日ひ數かず重かさねて神かみに祈いのりつ。

三

皆みな人ひとのやがて渡わたらむ三みつ瀬せ川が  
せき留とむるよしも無なき涙なみだかな。

四

白しろ妙たへのわが衣ころも手ては濡ぬれにけり  
露つゆと消きえにし可いと憐し兒このため。

五

草くさの葉はにおく白露しらつゆのいつまでも  
醜しこの嵐あらしに散ちらぬものは。

（大正一二・五・一六 舊四・一 於教主殿 明子録）

第三章 神殿しんでん（一六〇七）

第五六二

—

高山たかやまに雲湧くもわき立ちたて天津日あまつひの

影もかすかになり  
にけるかな。

二

東の峰をわけつつ  
昇り来る  
月の姿の大きく見ゆるも。

三

いつ迄も日はわが上に輝かじ  
やがて傾く夕暮の空。

四

おほそら  
大空の星の光を押しかくし  
かがや  
輝き渡る天津日の神。

五

あまつひ  
天津日の光の西に沈みてゆ  
ほし  
星の眞砂は輝き初めぬ。

第五六三

一

ほしかげ  
星影もまばらになりぬ  
あき  
秋の夜の

清きよけき月つきの昇のぼりましてゆ。

二

半はん開かいの花はなも嵐あらしにたたかれて  
もろく散ちり行ゆく浮うき世よなりけり。

三

現うつし世よの恵めぐみの神かみのまさずあれば  
人ひとの命いのちの如いかであるべき。

四

限りなき玉の命の眞清水を  
恵ませたまふ瑞の大神。

五

永久に朽ちず亡びぬ玉の緒の  
命賜ひし元津祖神。

第五六四

一

鳩の棲む桶伏山の木の間より

夜は明けにけり霞晴れけり。

二

山々に數多啼けども時鳥

その諸聲は空音なりけり。

三

奥津城の山に咲きぬる女郎花  
露の涙に打萎れつつ。

四

奥津城おくつぎの松まつの梢こずえは緑みどりして  
常世とこよの春はるを迎むかへ顔がほなる。

五

奥津城おくつぎの紅葉もみぢの色いろの紅くれなゐは  
教御祖をしへみおやの御心みこころなるらむ。

第五六五

一

玉たまの身みをかくしまつりし奥津城おくつぎを

醜しこの獸けものの穿うがつ御み代よかな。

二

奥おく津つ城きは幾いく度たびとなく穢けがされぬ  
深ふかき經しぐ綸みのおはすなるらむ。

三

世よにありて仇あだに攻せめられ死まかりては  
又またもや獸けものに呪のろはれ玉たまひぬ。

四

鳥獸蟲族までも救ひ行く  
巖の御靈は安くますらむ。

五

奥津城の御庭の廣く清けきは  
教御祖の心なるかも。

第五六六

一

時鳥のみか諸鳥夜な夜なに

來りて教祖の奥津城守る。

二

白雲の遠き國より尋ね來て  
教祖が奥津城拜み泣くなり。

三

おさへられ足に踏まれて水袋  
いや益々も固くなりぬる。

四

瑞御靈中に充たせし水袋  
押へよ踏めよ力限りに。

五

奥津城の御空を高く照る月は  
露の涙を夜な夜な降らせり。

第五六七の一

一

諸々の去りにし教子は喜びて

露つゆおくつきの庭にはに遊あそびつ。

二

天てん王わう平だ常ひら磐ときの森もりに八や百ほ萬よろづ  
神かむつど集つどひしてはかり玉たまはむ。

三

大おほ方かたの春はるの哀あはれは鶯うぐひすの  
啼なく音ねにまさるものなかりけり。

四

奥津城おくつぎに來啼きなく鶯聲うぐひすこゑ噎かれて  
また啼なき渡わたる時鳥ほととぎすかな。

五

村雀露むらすずめつゆおくつきの塚つかの前まへに  
伊寄いより集つどひて太祝詞ふとりのりと宣のる。

第五六七の二

一

荒あらされし嚴いづの御墓みはかも神直日かむなほひ

國直靈主の深き神心。

二

奥津城を慕ひて詣る信徒の  
心に悲しき五月雨の降る。

三

奥津城の空晴れ渡り日は照れど  
音なき時雨に袖は濡れつつ。

四

嬉うれしさかなと悲かなしみの雲くも行き交かひて  
心こころの空そらの月つきは曇くもりぬ。

五

奥おくつきの神かみは表おもてに現あらはれて  
開ひらき玉たまはむ五み六ろく七しちの御み世よを。

（大正一二・五・一六 舊四・一 於龍宮館 隆光録）

）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）

靈界物語 第六二卷 山河草木 丑の卷

終り